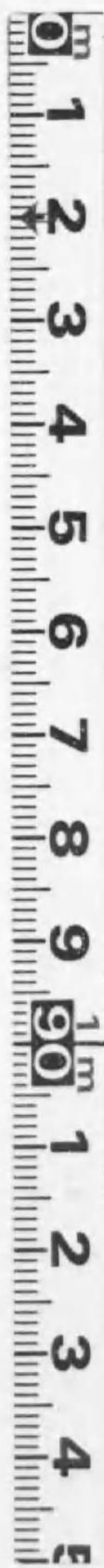


世界史講義

文學士 橫山達三
文學士 小林秀雄
先生講述

東京

嵩山堂發行



始



特116
458

世界史講義目次

序論

古代史

第一章	國民の起源	二
第二章	エジプト	四
第三章	ヘブライ	六
第四章	アッシリヤ	一六
第五章	ペルシヤ	二〇
第六章	ギリシア及び其殖民地	二二
其一	ギリシア及び其の殖民地	二二
其二	ギリシア國家の發達	二三
其三	波斯と希臘	二五
其四	アテチとスバルタとの争衝	三三
其五	テーベとマチドン	三六
其六	ヘレン文化波及の世界	四〇
第七章	ローマ	四五
其一	ローマの起源	四七

頁數



中世史

- 其二 ローマの領土擴張…………… 五一
- 其三 内証時代…………… 五八
- 其四 ローマ帝國…………… 六九
- 第一章 人類の移轉…………… 七七
- 其一 ゲルマニ民族諸國の勃興…………… 七七
- 其二 フランク王國…………… 八〇
- 其三 アラビア人の勃興…………… 八四
- 其四 神聖ローマ帝國…………… 八六
- 第二章 ローマ法皇…………… 九四
- 其一 法皇權の擴張…………… 九四
- 其二 十字軍…………… 一〇〇
- 其三 蒙古人の侵略…………… 一〇五
- 其四 十字軍の影響…………… 一〇八
- 其五 法皇權の衰頹…………… 一一二
- 其六 文藝復興…………… 一一八
- 其七 トルコ人の侵略…………… 一二三
- 第三章 西大陸發見…………… 一二五
- 近世史…………… 一三〇

第一章

- イスパニア…………… 一三〇
- 其一 イスパニアの興起…………… 一三〇
- 其二 ドイツに於ける宗教改革…………… 一三三
- 其三 チーデルランドの獨立…………… 一三九
- 其四 イギリスの發達…………… 一四六
- 其五 フランスの發達…………… 一五三
- 第二章 三十年戦争…………… 一五八
- 其一 ボヘンヤバルツ戦争…………… 一六〇
- 其二 デンコルク戦争…………… 一六一
- 其三 スウエーデン戦争…………… 一六二
- 其四 フランス、スウエーデン戦争…………… 一六四
- 第三章 フランス…………… 一六五
- 其一 フランスの強盛…………… 一六五
- 其二 イギリス立憲政体の組織…………… 一七三
- 其三 ロシアの勃興…………… 一八二
- 其四 プロシアの興起…………… 一八九
- 其五 イギリスと其殖民地…………… 一九五
- 最近世史…………… 二〇二
- 第一章 フランス革命…………… 二〇二

第二章 革命役の歐洲諸國……………二一八

第三章 七月革命及其の影響……………二二三

第四章 二月革命及其の影響……………二二七

第五章 ナポレン三世とイタリー統一……………二三一

第六章 プロシアの強盛……………二三五

第七章 十九世紀のイギリス……………二四一

第八章 トルコ帝國の瓦解……………二四五

第九章 最近事情……………二四九

世界史講義目次畢

世界史

文學士 横山達三 共述
講師 小林秀雄

序論
歴史の定義

歴史の定義

歴史は國民生活發展の記録なり。

人類の生存する所、其處には必ず社會あり。社會は人類か生存の爲に形成したる共全的生活なり。時の古今を論せず、洋の東西を問はず、人類原始の状態に於て既に早く社會は存在するものなり。而して社會の分子たる人口の増殖により、或は他社會との交通により、社會は自ら自己の發展をなし、進んで規律的生活の必要を感じるに至る。是に於てか初めて國家あり。國家は社會の秩序を保持する唯一の機關なり。國家あり而して國民あり。歴史はこの國民の發展を以て對象とす、其國家をなさざる社會状態は歴史の關する所に非ず、依て又歴史前歴史時代の別あり。歴史前は人類學、考古學、等諸學の關する所、歴史は獨り歴史時代を記述して國民發展の状態を明にするを以て目的となす。

● 世界史

世界史とは何ぞ。

二

世界史は二様の見解により記述することを得へし。其一は各國民の歴史を個々別々に記述し、之を排すること之なり。其二は現在生存する諸國民を、一の大集合体と見做し、其大集合体が發展し來りし順序を記述すること之なり。前者は近來まで英、獨等の諸國に普く行はれたる方法にして、後者は晩近獨逸の大歴史家ランケ氏（一七九五—一八八六）の始るところなりとす。ランケ氏は從來の歴史家等か唯一に一國民か他の一國民の狀態に及はしたる事件を考ふるに反して、現在生存せる諸國民を作るに至りたる事件に注目したり。又かの個々分離せる史的事實の排列をさけて、専ら其の内部的結合を調査し、一貫せる主義を明にするに勉めたり。これ氏の世界史が全く從來の世界史と異なる所なり。而して現今世界史と稱するものはもとより氏か見解を繼承したるものに外ならず。

歴史の時期。

凡そ歴史の事實は、必らず一定の時に始まりて一定の時に終るものに非ず。因となり果となり、相纏ふて終に無窮に至る。現今生存する諸國民の歴史生的も、また當に此の如くなるへし。世界史は實に因果の關係によりて連続せられたる不斷の波動なり。然れどもまたこの連続せる波動の中には明かに認め得べき高低の存するなきにしも非ず。而して史家は便宜上この高低の間を劃して

時期を作る。時期とは史家か便宜上設けたるものにして、或一事件か彼時に初りて此時に終るを假定せられたる間の時間をいふなり。既に便宜上なり。故に其時期の劃法に至りては史家各全しからず。今は其普通行はるる所のものによりて次の如く區別したり。

- 一、上代より西羅馬帝國の滅亡に至る。（×——紀元四百七十六年）
之を古代史といふ。數多の國民か羅馬帝國に合併せられたる時期なり。
- 二、西羅馬帝國の滅亡より亞米利加の發見に至る。（紀元四百七十六年——全千四百九十二年）
之を中世史といふ。チュウトン族か國民團體に入りし時期なり。
- 三、亞米利加の發見より佛蘭西革命に至る。（紀元千四百九十二年——全千七百八十九年）
之を近世史といふ。諸國民の團體か歐羅巴全部及び亞米利加に廣かりたる時期なり。
- 四、佛蘭西革命より現代に至る。（紀元千七百八十九年より現今迄）
之を最近世史といふ。國民の團體か世界の他の方面に廣かりし時期なり。

古代史

國民の始

第一章 國民の始源

人類か或一定の土地により、やかつては社會を作り、ついでこの社會をして發達せしめ行くにつきては、其人類の稟賦の如何に關するは、明白なる事實なり。もし其人類の稟賦にして優れたるものならしめば、その社會は自ら發展すべく、もし之に反して劣れるものならしむらばには必ずや衰頽することあるべし。これ社會發展に關する内部的條件なり。

而して他に重要な條件は、第一に其住居せる土地の豊穰なること、又其地方の温暖なること之なり。第二には其住居せる土地の位置の宜しきこと之なり。

凡そ原始の社會なるものは、極めて單純なるものにして、其目的とする所は、只食物を得て生存を全ふし得るにあり。されば土地豊穰にして饒多の食料を産出し、氣候温暖にして四時の變化少なき所は、人類勞力を要する至て少きを以て、隨て社會發展の上に至大の便利を與ふるなるべし、然るに之に反して其住居する所の土地豊穰ならず、氣候亦温暖ならずる所は、増殖する所の社會の分子を養ふことを得ず、生存に用うる勞力をささて、氣候に對する防備をなさざる可らざるの不利あり、之によりて社會發展の勢を妨ぐる可き甚少からず。これ第一條件の社會發達の上に

欠く可らざる所以なり。

位置の社會の發展に關することも又疑ふ可らず。谷間に住する社會、砂漠のオアシスに在る社會の類の如き、何れも四隣關係なく、從て他社會の抵抗を受けず、内部發展をなす爲には、此上なき好位置なるもの、とどし。然れども詳に之を考ふる時は、これら社會の内部發展には大なる制限の存するを見るなるべし。もし少く社會の分子の増力を來すに至らば、彼等はいかにして食を求むべきか。而して廣漠たる平原の中に形成せられたる社會はいかか。かゝる社會の周圍にはもとより十分なる沃地の存するあり。社會の分子は如何ほど増殖するとも、生存の問題に苦むの要を見ず。寧ろ社會分子の増加は社會の増大に大なる利益を與ふるなるべし。然らばかゝる社會は内部的發展をなすに好位置にあるものなりや。否か、る社會はまた他社會の抵抗を受くるの大憂あり。他社會の抵抗に勝ち得れば可なり。然らざれば只滅亡あるのみ。かくの如く考へ來れば最好位置として認むべきものは、海洋河水により交通の便を有し而して多少四隣に延長し得べき土地にこれる社會のみ。是れ第二の條件か社會發展に欠く可らざる所以なり。以上二件は社會發展に關する外部的條件なり。

かくして數多の社會の中にて、これらの條件に適合せる土地におこらざりし社會は亡び、これら條件に適合せる土地にこれりしものは、益々發展して終に國家を形成するに至りたり。

吾人は歴史の初に於て、五個の進歩したる國家を、地球の上に見るなるへし。支那、印度、メソポタミア、エチプト、メキシコ、之なり。而して是等諸國は、皆明かに豊穰なる、温暖なる、好位置なる土地におこれる社會の發展したるものなることを示せり。

此等の諸國は數千年の古に於て、早く發達進歩の状態を呈したりき。國民的統一を有し、確固たる社會組織を有し、文學あり、美術あり、又國民的歴史をも有したりき。これらの事實は近世遺跡研究の結果か、明かに証明する所なり。然れどもこれらの諸國は其發達進歩の程度の著しかりしに關らず、何れも個々獨立に發達進歩したるものにして、國家と國家との關係は未だ曾て存せざりしなり。これらは皆野蠻なる民族に圍繞せられたる孤島の状態にありしなり。然るに紀元前二千百年セミチック族の一派なるヒクソス(牧民)は、シリヤの地方より來りてエチプトに亂入し、ナイル河口の地を領して之に住し、もつて紀元千六百五十年に及べり。エチプト王は之と相戦ふこと數度、終にこの種族を國外に驅逐し、勢に乗じて北東に進み、かくしてメソポタミヤと接觸することゝはなりぬ。是れ國家的關係の始源なり。時に紀元前千六百年なり。

第二章、エチプト。

エチプト

エチプトが幾多の發達進歩したる國家の中より出て、最初に歴史的な中心となるに至りし所以は、其國家の發達進歩か、これら諸國家の中に於て最優れたりしを以てなり。而してエチプトが特に

他の國家に優りて進歩發達したる所以は、其國家の設けられたる位置の他に優れたりしにあり。即ちナイル河の恩恵なり。ナイル河は年々夏至に至れば河源の氷雪の融解によりて河水の増加を來し、七月下旬に至りては終に汎濫して西岸を浸すに至る。かくして漲溢すること略二ヶ月、九月下旬に及びて漸く減水し、冬至の前に至りて平水にかへる。此河水の汎濫するに當りてや、常に膏腴なる泥土を遺し全國をして沃壤ならしむ。故に人民は勞役を用ひずして十分の食料を得られ、大に人民生活を容易ならしむるのみならず、又早く國家組織の發達をうながさしめたるものゝ如し。即ち

- 一、此河の洪水ある毎に、人民の田地を埋没し、其境界を湮滅せしむ。之を整理するには、強力なる主權者を必要とす。
- 二、河水を減退せしむるには、溝渠貯水所等の設備必要なり。而して之を完備せんとせば、強力なる主權者の力を要す。
- 三、土地豊穰なるか故に四隣の蠻人に侵入せらるゝおそれあり。而して十分に之を防禦する爲には勢力ある主權者の指揮を要す。

これらの理由によりてエチプト國家の建設は甚だ古く、ナイル河の大溝渠を穿ち、メンフィスの三角塔を作りたるケオプス、ケフレン二王の時代から、既に紀元前三千余年前のことに屬すといふ

紀元前千六百五十年ヒクソス族を驅逐し、ついで紀元前千六百年シリヤに入りし王等は、實に十八王朝の諸王なりき。

メソポタミア

メソポタミア（二川の間に介在する國の意義を有するギリシャ語なり）はチクリス、エウフラト二河の間の土地の總稱なり。この地エチプトの如く豊穡ならずと雖も、是等の二川は毎年汎濫して土地をして肥沃ならしむること、恰もエチプトのナイル河に異ならず。これを以て國家早くおこり文化風に進みたりき。最も國家の建設はやゝエチプトに後るゝものゝ如し。

エチプトの諸王カシリヤの諸族を征して、進んでメソポタミア文明に接觸するに至りしころは、メソポタミアの諸小國は概ねバビロンの勢力に併せられ、バビロン文明はメソポタミアの全部に廣まり、バビロンの宗教たるバール教は殆んど全國に採用せらるゝに至りたる時にてありき、而してシリヤの諸族も亦其勢力の下にありしなり。

此際に於てエチプトのシリヤに入るに至りしことは、シリヤ種族をしてバビロンの勢力を脱する好機會を與たるものなりき。しかしてバビロンと全く宗教を異にしたるヘブライ人及びエチプト商業上密接の關係を有したるフェニキヤ人はまた、シリヤ諸族と合してエチプトに黨し以てバビロンに抵抗するに至れり。このエチプト、フェニキヤ、ヘブライ三國民のバビロンに對する一大同盟は、國民的關係をして益大ならしめ、國民的生活をして愈隆ならしめぬ。

フェニキヤ

口碑の傳ふる所によれば、ヘブライ人は始めソポタミアの地に國なせしか、ついでカナーンの地に移りしものなり、然るに當時カナーンの地方はメソポタミア文明の普及せし所にして、この地方に住する諸族は皆バール教の信者なりき。これを以て一神教を信したるヘブライ人は常にこれら諸族の迫害に遇ひ、終には殆んど其種族を殲滅せらるゝ不幸に沈淪するに至れり。ヘブライ人かバビロンに抗してエチプトに結托するに至りし所以は、即ちこの不幸より救出せられんどの希望に外ならざりしなり。而してエチプト王はこの同盟者の不幸をわはれみ特にナイル河口の一部コツセンの地をささ此民族に附與したり。かくしてヘブライ人は又カナーンの地よりコツセンの地に移りぬ。ヘブライ人はこゝに宗教の自由を得外族の抵抗を受くることなく、全くエチプト人より分離して、其民族を維持するを得たり。

フェニキヤ人は地中海の東岸レバノン山脈に沿へる、細長き土地に住す、地味はさまで膏腴ならざるを以て、専ら航海を業とし、近隣の諸島に交通し、又旅隊によりて、メソポタミアと定期の貿易を營みたり。彼等は實に商業的航海的人種なりしなり。これら商業的航海的人種にとりては當時天下の寶庫たりしエチプトと交通を開き、其富を各地に運搬して、國家の利益を計らんことは無上の志願なりしなるへし。而してフェニキヤと、エチプトとの航海に關しては一方には強力なる東風の海岸より吹き下すものありて其行を助くるあり、一方には西風の海岸に沿ふて吹き

送るありて其販を迅にするものあるに於てをや。故にフェニキヤ人はバール教を信奉せし民族なるにもかゝはらず、隣族との結合をすて、エチプトに同盟するに至りたり。

かくてフェニキヤ人はエチプト同盟の結果として、彼等か豫期せし如く、果して偉大なる商業國民となるに至れり。彼等はエチプト及びメソポタミヤに出づる出産物交換の仲買となり、メソポタミヤの諸種の作品及びエチプトの武器は寶玉、紙、衣類等を地中海の諸島並に地中海沿岸の諸地に輸出し、これら諸地に産する毛、毛皮、及奴隸を輸入せしのみならず、自國工業品の隨一たりし硝子製造品、金屬細工、染料等を各地に販賣したり。紀元前十四世紀の頃に至りては、フェニキヤ植民地は地中海沿岸各地に生し、希臘の金鑛、伊太利の銅鑛、西班牙の銀鑛の採掘は企畫せられ、終には進んで英國及びバルチック海岸にまで往來を開くに至りたり。フェニキヤ人はこれら商業上の關係より、略一千余年間地中海諸族との結合を持續したり。

フェニキヤ人はかく諸種の民族と交通せしかば、必要上聲音文字の發明をなすに至りき。この聲音文字や、他日希臘に傳へ、羅馬に傳へて、今日歐洲諸國に用らるゝ文字の初をなすものにして、世界文明と共に忘却せらるゝべきものに非ず。蓋しこれらの二十六字の聲音文字はエチプト形象文字より來るものなりといふ。

三國同盟の結ばれし以來、エチプトの國力甚強く、只に同盟諸國に對して覇を握りしのみならず

其の威力は遙かにメソポタミヤ諸國に及びたり。然るに大略二百年を経紀元前千三百五十年の頃に至りて、メソポタミヤの一族たるヒチートの勢力次第に増長し來り、エチプトの勢力は漸く亞細亞方面より退けらるゝに至りぬ。ヒチートは只にエチプトの勢力を亞細亞より退けしめしのみならず、進んでエチプトの國境に侵入するに至れり。こゝに於てエチプト王はエチプト國民のみならず、ヘブライ人に命じて共に國境防禦の業につかしめぬ。ヘブライ人は始は之に應じたりしも、王の待遇甚だ過酷なりしかば、彼等は大に憤怒し、之を以て自個の宗教理念たる人類平等の主義に反し、我等を擧げて一人の奴隸たらしむるものなりとなし、ヘブライ人にしてエチプト王室に教育せられしモーセを以て指導者となし、ゴツセンの住地を脱し、シナイ半島に向て去りぬ。之をエクソダスと稱す退去の義なり、是紀元前千三百二十年頃のことなり。

ヘブライ人か其民族を擧げてゴツセンの地を去りし以來、エチプト國は益々蠻人の乱入する所となり、其國勢は日に衰連に向ふに至り、世界文明の中心は終にエチプトを去りてヘブライに移るに至れり。

エチプトか世界文明に著大なる影響を與へたるものは、太陽曆の發明なりき。エチプトか之を發明するに至りし所以は、ナイルの洪水の基するものにして、其毎年七月を期とするの點より、經驗的に、今年太陽が天球の一點に來り、明年再びその一點に歸る間の時日を計算して、三百六十

五日四分の一の數を得、之を以て一年と定むるに至りしものなり。この曆法は後紀元前四十五年に至りシイサーによりてローマに用られ、やがて各文明國に流布するに至れり。

ヘブライ

第二章 ヘブライ

モーセに率ゐられてエチプトを出てしヘブライ民族は、非常なる困難を経て神の約束し給へりといふパレスチナの地に向ひぬ。途にしてモーセは病にかゝりて死せり。依てヨシウア之に代りヘブライ族を引率し、カナーン人か同族互に相争ふに乗して之を滅ぼし、略々其の土地を征服し、之れを十二族に分配したり。獨り海岸の地方は猶ほフリステン人及びフェニキヤ人の手中に存したりき。

此時に當りてヘブライ人は、依然として中央政府を有せず、彼等は神の前に人は皆平等なりとの宗教理念によりて、王を抱くことを好まざりき。故に彼等は其性格行動よりして神に密接の關係を有すと信したる一人を挙げ、この人をして神の意思を奉して万事を決行せしめぬ。所謂豫言者之なり。然れどもかゝる蠻族の中間にありて、かゝる薄弱なる結合によりて生存し行かんことは誠に望なきことなりしなり。彼等は常にフィリスチン及びカナーン諸族の爲に激烈なる抵抗を蒙りたり。もし不幸にして時々これら諸族の中より偉大なる男女の出るありて諸族を統合するにありざりせば、是民族の運命は實に計るへからざるものなりしなるへし。(是等の人をジャツジとよ

ふ)最後の豫言者たるサムエルの現るゝに及び、大に是に見る所あり、言を神意に託して、王國を建て、十二族中の最少族たるベニヤミン族のソウルを以て國王となし、之に委するに政治兵事の兩權を以てしたり。是ヘブライ人か王政の下に團結を形くるに至りし始にして、またヘブライ國勢の愈盛なるを致す基なりき。

ヘブライ人は王國を建設したる後は、ソウルを奉して四隣の諸族を征伐しやゝ強大に向はんとせしか、ソール王位を其子ヨナタンに傳へんとするに及び、豫言者サムエルは之に反對し、ユダ族のタビトを以て其繼嗣となせり。これより國內再び亂るゝに至りたり。然れども終にタビトはサムエルの力をかりてヨナタンを亡しソウルの後を襲きぬ。

タビトの治世はヘブライ史上注目すべき時代なり。この時代に於て從來征服し能はざりし海岸諸國を亡ぼし、またヘブライ人中に残在したりしカナーン諸族を平け、邊境の諸民族を服せしめ、ヘブライは一躍して西方亞細亞の大強國となれり。タビトは新に征服したるイエルサレムを以て王國の首府となし、こゝに王宮を遷し。フェニキヤ、メソポタミヤの行跡にあたれるダマスクに屯兵を置きぬ。

タビト死して末子ソロモン嗣く。彼の時代は王權の其極に達したる時なりき。彼は從來の王と異り、他族の助けによらずし相續によりて王となれり、故に從來の諸王の如く他族に屬するの必要

を認めざりしのみならず、父タビトカ蠻族征定の後を受けたるを以て外族侵入の憂は全く存せざりき。是に於て彼は莊麗なる殿堂をイエルサレムに興し、またユダ族を直隸の民として王城の守衛にみて、各部族の土地はこれを十二の行政部に區劃し、知事及び國王直轄の官吏を遣はして其地の行政を掌らしめ、各部の人民をして租税若くは勞力を國王の許に致さしめたり。かくして完備したる王國は成就したり。然れどもフェライ人はかくまで王權の下に屬すること雪しどする能はざりき。蠻族の抵抗甚しく民族の滅亡の眼前に横りし頃は、彼等餘義なく王權の下に服せざるを得ざりき。彼等は生存の爲には自個の宗教理念を犠牲に供せざるを得ざりしより。然るに今や外敵全く平定し、彼等の生存安穩なる時に當りて、彼等の祖先カエチプトにあつて斷然爲さざりし行動をエルサレムに於てし、財税及勞力を國王にさくくる如きは彼等の耐ゆるどころにあらずりき。之に加ふにソロモンはエチプト及びフェニキヤ諸王の女を後宮に納れ、チル王ヒラムと親交を結び、これら諸國に行はるゝパール教を保護するに至りしかば、人民の憎怨益々甚しく終に北方十族分離の源を開くに至りぬ。

ソロモンの死するや、北方十族は王室を去りイスラエル王國を建設したり。たいユダ及びシメオンの二族は猶タビト王家を奉してユダヤ王國と稱したり。是れ實に紀元前九百五十三年の頃なりき。

ユタヤ、イエスライル兩國分立せし後は、パール教徒と猶太教（ヘブライ人の宗教を指示す）との争斷ゆることなく、ユダヤ國王は常にパール教徒を保護して猶太教徒に抗し、豫言者は猶太教を助けて王黨に抗し、實に紛亂を極めたりき。然るに紀元前八百四十一年に至り、イエスライル王家斷絶し、その相續者非りしかば、ジエヒウを推して王位に昇らしめぬ。是より猶太教大に勢力を得るに至り、兩國共に多數を占むるに至れり。されど兩國の互に相争ふこと久しくして、國勢の衰頹其極に達し、再び古の如くなることを得ざりき。然れども其の後世に遺したる唯一神の信仰は、他日現はるべき偉大なる耶蘇の根原をなすに至りしことは、世界文明上特筆すべき事實なりとす。

ヘブライの盛大なりし間は、宗教を異にしたるフェニキヤは、少からざる壓服の下にありたり、ここにタマスクのヘブライの手に陥るに及びては、メソボタミヤとの隊商貿易は殆んど杜絶の狀態となれり、故にフェニキヤは専ら地中海島及び地中海岸諸地方の植民に力を盡し、全時にパールの教の宣傳に勉めたり。然るに此際に於て彼等はまた海上に於ける有力なる競争者を發見したり、これ希臘人なり。希臘人は非常なる勢力を以て小亞細亞沿岸の植民を初め、終にフェニキヤ人の勢力をエーゲ海群島及び黒海方面より驅逐したり。是に於て彼は海陸兩面に於て畏縮せざる可らざりき。後ヘブライの分離するに及びて、タマスク其他の近隣の部族の獨立するあり、フェニキ

ヤ陸上の商業に對しては些か好都合なるに至りしといへども、海上に於ける勢力は再び伸張すること能はざりき。

此時に當りてアッシリヤの俄かに強大にをもむくあり。史的中心はヘブライを去りてアッシリヤに移るに至りぬ。

アッシリヤ

第三章 アッシリヤ

アッシリヤはバビロンと同じく、チグリス、ユーフラト兩河の間に介在し、建國の古きまたバビロンにゆづらず。國民慍悍にして狩獵を好み、獅子狩、牛狩の如きは其最も得意とせし所なりといふ。且四圍皆な牧民族の住地たりしを以て、其等民族の攻撃は常に絶へず。自然この國民に對して他國民にまされる軍隊組織の發達を促すに至らしめぬ。就中の弓牛の精巧と、歩兵の敏捷とは、其兵力強勢の主因なりき。彼等は早くバビロンの文化に浴してバール教を信奉し、また遙かにフェニキヤと交通して商業を營みたり。

紀元前九世紀頃に至りては、アッシリヤの勢力漸く隆盛にをもむき、メソポタミヤ、イランの地方を征してチグリス、ユーフラト河外に其領地を廣めたり、於是アッスルナシル、ハバル（自紀元前八八四至紀元前八五九）は更に兵を西方に向けて文明の諸國を攻むるに至れり。此時に當りてヘブライはユダ、イスラエル二國の爭亂の猶繼續するありしか、紀元前七百四十年イスラエルは

タマスクと合してユダを攻めしかば、ユダは貢を納むることを約して赦をアッシリヤに求めたりき。依てアッシリヤ王チグラト、ビレサルは親ら兵を卒めてユダを助け、他の二國を征し、貢をアッシリヤに納めしめぬ。然るに既にしてユダはアッシリヤの治下に服従するを好まず、遙かに氣脈をエチプトに通してアッシリヤに抗し、イスラエルもまた敢て貢を納むることをなざりき。サルマナツス王位につくに及び、先づイスラエルを攻めて之を降し、其子サルゴンを遣はして其市府を破毀せしめ、其民を奴隸としてアッシリヤに送らしめぬ。ついで紀元前七百〇一年の交に及びサンヘリブはアルタクに於て大にエチプト人を敗り、エチプトを以てアッシリヤの附屬國となせり。而して當時フェニキヤも既にアッシリヤの勢力の下にありたりき。かくしてアッシリヤは今や東方メソポタミヤ、バビロニヤ、イラン諸國のみならず、エチプト、フェニキヤ、ヘブライ等の文明の諸國を併せて一大強國を形成すること、はなりぬ。まことに是世界統一の偉業を完成したる最初のものなりき。

既に述べたるごとくアッシリヤ大帝國は幾多の文明國を併呑して成りたるものなりき。其廣大なる版圖には、人種を異にし、習慣を別にしたる幾多の社會を包含したるものなり。而して今これら複雑なる社會より形成せられたる國家を維持せんか爲めに取りたるアッシリヤ國の政策は果して如何なるものなりしや。是大に注目すべき問題に非ざるなきか。

アツシリヤ王は、この龐大なる國家を維持するの策として、先づ正當に貢賦をアツシリヤ國王に納むべき條件の下に各自其舊君主を戴きて自治し得るの權利を與へ、アツシリヤ人の信奉するアツスルの神の至高神たるを認むるものには從來の宗教を繼續したることを得せしめ、ついでアツシリヤ兵を各地に屯在せしめ以て地方の守備を計ると共に、一地方の人種を他地方に移住せしめて人種的結合の念を薄弱ならしめ、而して反者に罰するには極めて嚴刑を以て之を處分するの手段をどることゝなせり。アツシリヤ王は代々此政策を固持して諸地方の反亂常に絶えざりしに關らず、巧に其領地を維持し其境域を擴張したり。殊にアツスルハドン王の如きは、バビロニヤ、フエニキヤの反亂を平定し、エチプトを征服して之を二十州に分ち、アツシリヤ人を以て副王となすの制を設け、また盛に人口の移植を計りたりき。然るに紀元前七世紀の半頃に至りて、二種の蕃族の來りて其邊土に寇するものあり、やかてこの大帝國瓦解の源をなすに至れり。

紀元前七世紀の半頃東方の蕃族シメリアン及びスキズの二族は、アツシリヤの邊土たるメヂヤ及びリヂヤの地に侵入したり。時にアツシリヤ王アスルバリハバル二世はメソボタシヤ地方の反徒討伐の軍にありしを以て、別に兵を遣はして是等蕃族を防かしめぬ。然るに此戰に於てアツシリヤの軍は大に蕃族の破る所となり其無能を天下に示すに至れり。於是メヂヤの副王キクサレス及びリヂヤの副王アリアテスは連合して蕃族を撃退し、終にアツシリヤに反したり。而して偶々バビ

ロン王ナボポラサル及びエチプト王プサメチカスの兵を擧げてアツシリヤ王に抗するあり、アツシリヤ大帝國は忽ちにして四分五裂の状態を呈するに至れり。かくして紀元前六百〇六年には、ハチヤ、バビロン二國は連合してアツシリヤを攻め、進んで市府ニヌアを陥れ、一時莊大を極めしアツシリヤ大帝國も、此に全く其終を告ぐるに至りぬ。

アツシリヤ大帝國の瓦解と共に、リヂヤ、バビロン、メヂヤ、エチプトの四國は再び興れり。而してフエニキヤ、ユダもまた獨立の地位をうるに至りぬ。されど其最も盛なりしものは、バビロン、エチプトの二國にして、ユダ、フエニキヤ二國の如きは、最早其勢力に於ても、其領土に於ても、共に古の如くなること能はざりき。

バビロン及びエチプト二國は今や互に領土の擴張に力を盡すに至れり。而して二國互に領土を争ふ結果は到底衝突を免るゝこと能はざりき。終に紀元前六百〇五年に及びてカルケミシユの大戦あり。エチプト王ネクはバビロン王ネブカトネスルの爲に敗られ、其か亞細亞に有せし領土の全部を失ふに至れり。これよりバビロンの勢益盛にして、ユダ、フエニキヤの諸國は攻守同盟を作りて切に之に抗したりしも、屢々其征服するところとなりぬ。就中ユダの如きは、終にイエルサレムの宮殿を破毀せられ、國中の貴族はエウウラト河岸に移さるゝに至りたりき。これ實に紀元前五百八十六年のことにして世に之をバビロニヤン、エキサイルと稱せり。

かくてバビロンはネブカトネスル王の力によりて、エジプト、メヂヤ、リヂヤ、の諸國を凌ぐの勢となりぬ。三國は之を見て不安の念なき能はざりき。是に於てかメヂヤは當時東方に住せし強勇なるベルシヤ人を訓練し以て己の助となし、リヂヤ及びエジプトの諸國は當時歐州東南部及び小亞細亞沿岸に殖民せるギリシヤ人を傭ひ以て己を維持せんと試みるに至れり。諸國の状態かくの如くにして進まは、紀元前六世紀の前半頃には、バビロンに對する一大衝突を見たりしことなるべし。然るに偶々ベルシヤの勃興するあり、天下の形勢をして全く一變せしむる事となりぬ。

ヘルシヤ

第五章　ベルシヤ

ベルシヤはイランの高原に起りし一小邦にて、初めはメヂヤに屬したりき。然るに紀元前五百五十九年アケメニデ族に屬したりしキロスの立て王となるに及び紀元前五百五十年にメヂヤを滅して獨立し、更に西方に進んで、紀元前五百四十六年にリヂヤを破り之をベルシヤの領土となし、紀元五百四十六年には終にバビロンを滅して其全土を有するに至れり。キロス死後其子カンビセスよく父の遺志をつき、紀元前五百二十五年にエジプトの征服を企てぬ。かくてベルシヤは昔時のアツシリヤ大帝國の全領土を有するに至れり。然れども亦このエジプトの遠征は當時エジプト王ネクスのスエス地峡穿鑿大工事を中止せしむるに至らしめしことは、文化史上大に忘る可らざる事件なりとす。

紀元前五百二十二年カンビセスの自殺するに及び、相續の争おこり、國內一時紛亂を極めたりしか、終に王族の一人たるダリオス、ヒスタスピス王位に上るに至り、ベルシヤ王國の基礎は愈々確定せり。

ヘルシヤ王ダリオスは即位の始め、先づ各地を平定し、後大に内治を計り、軍備を整へたり。而して其政策は大にアツシリヤに鑑るところありしものゝ如し。彼は廣大なる王國の中に、スーザ、ヘルセポリス、エクバトナの三地を撰ひて都城となし、常に之を一周して、王位の尊嚴を天下に示すことを勉めたり。彼は中央集權の制をとり、全國を二十部に分ち、部毎に知事を置きて之を支配せしめ、またどくに國王に隸屬する監督官を派遣して其治政を監與せしめたり。彼は各種族に信仰の自由を許し敢てベルシヤの信奉したるサラストフの教の布教を強ひざりき。彼は蕃人の侵入を防ぐが爲には十分の防備をなし、東方の境界にはオクス、ヤクサルトの兩河岸に、城塞を築き守兵を置いて之に備へ、スキズ族に對しては遙にトラキヤに遠征して國威をドナフ河の地方に輝したりき。

ベルシヤのバビロンを亡はせしより、ユダヤ人（イエスラエル王國滅亡後ヘブライをよぶに此名稱を以てす）自國に販るの機會を得たり。キロス、カンビセス、ダリオスの時代に於て多くのユダヤ人は其故國に販りたりき。かくて紀元前五百十五年に至りてはイエルサレムの殿堂の再建

立せらるゝあり。イエホバに對する禮拜は再び嚴肅なる儀式を以て行はるゝことゝなれり。これ明かに長さ移住か彼等民族の宗教思想に及ぼしたる變化を示すものなりき。而して之に反して、ペルシヤがリヂヤ、エチプトを亡はせしことは、ギリシア人をして大なる不利の地位に立たしむるに至りたりき。サルデスの知事はギリシア植民地の人民に命するに、從來彼等かメヂヤになしたるか如く貢物を納むべきを以てしたり。然るに當時ギリシア植民地は統一を欠くこと極めて甚しかりしを以て、彼等は之を好まざりしに關らず、終に其命令に服従せざる能はざりき。既にしてスキズの侵入あり。王は之を征せんとしてギリシア人に委するにドナウ河の防備を以てしたり。是に於てミレタスのアリスタゴラスは亞細亞に於ける植民地を糾合し、ギリシア本國の援助をかり、ペルシヤ王に對して反旗を翻したり。時に紀元前五百年なりき。この騷擾は後六年を経て全く鎮定に歸しぬ。然れどもペルシヤ王はこの謀反に與りたるギリシア本國を征服するに非れば、未だ十分なる安慰を得ること能はざりき。而して之にペルシヤ、ギリシア二國の一大衝突を見るに至れり。いさゝの事實を述ふるに先ち、いさゝかギリシア。起源より當代に至る發展の狀況を記することを要す。

ギリシア
及び其
殖民地

第六章 ギリシア及び其殖民地

其一 ギリシア人及び其殖民地

ギリシアは往昔ヘラスと稱せられ、ヘレチス民族の居住せし所なりき。其國勢、内地は山脈縱横に交叉して、幾多の小區劃をなし、海岸は海岸線の屈曲極めて夥しく、幾多の嶋嶼其近方に散在せり。これを以てギリシア國內は古より無數の小國家に分れ、各主權を有して獨立の姿を保ちたりき。而して海岸の諸國は交通貿易の便利甚た多かりしを以て、早くより彼等は地中海沿岸の諸地に殖民を企つるに至り、終に東洋文明と接觸する機會を得たり。ギリシアの古傳説によれば、ダオスはエチプトよりアルゴスの地に來りて國を立て、アデンの創立者と稱せらるゝセクロプスはまたエチプトより來り、テベスを創立したるカドムスはフェニキヤの王子なりしといふ。其他近來ギリシアの諸地方より發掘さるゝ多くの古物に考ふるに、當時エチプト及びフェニキヤの人々かヘレチスに對して大勢力を有したりしことは疑ふ可らざるものゝことし。然れども久しからずしてギリシアは大に其勢力を増し、彼等外人の勢力を國外に驅逐し、其殖民地の區域を擴張して遙かに小亞細亞の地にまで及ぼすに至りたりき。盖しかのアルゴノートの遠征、トロヤの征服の口碑の如きはこの間の消息を傳ふるものなるべし。既にしてヘレチス民族の間に、一大移轉の起るあり、殖民の氣勢をして益々高からしめぬ。

紀元前一千百年の頃、ヘレチス民族の一種なるドリリア民族は、テッサリヤ北方の故地を去りて南

に下り、先づドリリス（ドリリア人の居住せしによりて此名あり）の一地を占領して之に據り、更に南に進んでコリント灣を越え、終にペロポネソスの南部に移住したり。これ即ちドリリア人の移住と稱せらるゝところのものにして、この移住の結果は、ペロポネソスの地に、非常なる人口の漲溢を見るに至り、此等住民の多くは、從來の住地をすて、各地方に殖民を企つるに至れり。而して他のギリシヤの諸邦もまた競うて殖民地の建設に力を盡すことゝはなりぬ。かくして黒海々岸には七十有余の殖民地のミレトス人によりて設けらるゝあり、トラキヤには忽ちにして多くのギリシヤ殖民地の開かるゝあり、またかのエーゲ海群島、シチリア海岸、南部伊太利及びコルシカ島、ガウルの内陸にもギリシヤ殖民地を見るに至れり。就中最注意を要するものは、エヂプトのキレナイ、フランスのマシリア、シチリアのサイラキウス、伊太利のナポリ、及びビザンチオンの諸地なりとす。

此時に當りて、ギリシヤ國內にありては、猶幾多小國家の依然として各地に存在するものあり、彼等は各自己の主權を主張してゆづらず、互に領土の擴張を謀りて攻伐し、政治上の統一のことは未だ容易に豫期すへきに非ず。アムヒクテオムの宗教會議あり。オリンピアの競技あり。些か以てヘレチス民族全體の結合を維持し得たるなるべしとはいへ、未だ以て政治的統一の機關として大なる功力を有するものに非りき。然るに殖民地にありては事情全く之に反し、彼等殖民者

等は自己と全く人種を異にしたるフェニキア人の競争者を有したりき。彼等のこの競争者に對立せん爲には、人種的結合を要したりき。實に彼等か各其言語を同くし、其宗教を一にせしことは、彼等か人種的結合を促すの主因となり、彼等は早くよりして統一の傾向を有するに至りたりき。かくて彼等は自己か理解し能はざる言語を使用する人種をよふにバアバリアンの語を以てし、自己か此等の人種と全く異なるヘレチ人種たることを以て他人種の間にはこりたりき。而して彼等はこの人種的結合の力によりて、フェニキア人の勢力を壓服し、彼等か長く地中海及黒海に有したりし海上の權を奪ひ、終にはヘルシヤ人の強力なる威壓に對して斷乎たる抵抗を試みるに至りたりき。

其二、國家の發達。

ギリシヤ國民は、初より政治上の結合を有せず、また政治的組織の基礎を有せざりき。彼等は各一地方に據りて都府を建て、其近隣の土地を領し、其好む所に從て機關を作り、内部の發展と外部の影響とにより、極めて自然的の發達をなしたりき。然してこれら都市の基礎は即ちギリシヤに於ける國家の基礎にして、またこれら都市發展の状態は即ちギリシヤに於ける國家發展の状態なりき。故にギリシヤの古に於てはポリシヤ國內には、或は專制王政あり、或は貴族政体あり、或は寡頭政府あり、或は共和政府あり、種々政体を異にしたる無數の國家（都市）は雜然として各

地方に散在したりき。而してこれら都市の中に於て、最早、著しき發達をどげたるものを、スバルタ、及びアテチの二國(市)となす。

スバルタ

ドリア民族の南下するに當りてや、彼等は先づドリリスの地方を占領し、後ベルボテソス半島に侵入して其西南部の地方を征服し、ついで居をラユニアのスバルタ市に定めて王國を建設したり。これ實にスバルタ王國の起源なりとす。されど彼等民族は權力の一人に皈することを好まざりしかば、二人の王をおきて互に其權を制せしめ、スバルタ人會議を興して緊要の事件は總てこれに諮問することゝなし、五人のエフォルス(執政官)を定めて王を監督し、王を告發し、王を處罰するの權を有せしむることゝなせり。故に名は王政と稱すといへども、實は貴族政治たるを免れさき。而して彼等民族は只自己のみ參政の權を有し、舊來の土人は總て參政の權を有せず、彼等土人は其最も長く彼等に抵抗したりしものは、全く權利を沒收して奴隸とせられ(ヘロツド)や、早く彼等に降り、或は彼等と同盟したりしものは、兵役及び租税の義務を負はせられて生命及び財産の安全を許されたりき(ペリオエシ)然れども彼等民族(ハバルチエイト)の數は之を土人の數に比するときは甚僅少なるを以て、他日若し土人の勢力を得るに至らば彼等の之を制せんこと實に容易の業に非ず。是に於てカスバルタ人は自己生存の目的よりして嚴格なる公共的教育をなすの必要を生じたりき。

此公共的教育の主旨とする所は、毫も一己に權力を附與せざるにありき。小兒の生るゝや、其兒成長の後は果してスバルタ人たるの資格あるや、否や、を驗査し、その體格不十分にして之に耐えずと見る時は、直ちに之をテゲトス山中に捨て、顧みず、その耐へ得へき強兒のみをとりて之を養ふなり。これら小兒は七歳にして、兩親の膝下をはなれ、二十歳に至るまで、全く政府の費用によりて養育せらる。彼等は専ら種々の体操及び操練等の教育を受け、而して後ラユニア内諸地方に遣して、竊にヘロツトの行爲を偵察せしむ。(クリプテア)長して壯年に及へば、皆兵士の如く營舎に起臥し、日々公會の食堂に飲食す。其婚姻の如きも、政府の監督の下に行はれ其許可を受くることを要す。また兩親共にスバルチエイトに非されば其兒は正常なるスバルタ人となされざりき。これらの社會組成は總てリクルグスの考案に出ると稱せらる。もし果して然らば大略紀元前九世紀の末年のことなるへし。

スバルタはかゝる武斷的組織によりて、よくスバルチエイトの勢力を維持することを得、進んで四隣の諸地を威服し遂にギリシア南方の一大國家となるに至りぬ。

アテチ

アテチ市はアツチカの北海岸にあり、交通の便と地勢の利によりて、早く國家の發展を見るに至り、ドリア民族南下の際も、近隣幾多の小市か彼等の侵略を被れるに係らず、よく之に抵抗して國家の安全を保持するを得たり。これより先き、此市は王政を以て政治組織を形成したりしか、

コドルス王のドリア民族征討の軍に死するに及び、終に王政を廢してアルコン(執政官)を置き、以て國政を管理せしむることなしぬ。爾來イオニヤの貴族等はペロポネソスより移住したるアカア貴族と連合して市民を困め、エウパトリッドの貴族政治なるものを現出するに至りぬ。貴族の専横は日を経るに従て漸く甚しく、紀元前六百二十年時のアルコンたりしドラユの人民の運動を抑制せんとして嚴酷なる法律を設け、政治上の惡罪は總て之を死刑に處することゝ定むるに至りしかば、人民甚たしく憤怨し、茲に黨を作りて相軋し、暫らく争擾を致したりき。時にエウパトリッドの一人なるキロンは竊かに不平の市民を煽動し、武人の助力を得て、アテネ城によりてタイラント(僭主)たらんとせしか、アカア族のエウパトリッドの一人たるアルクメオニデの爲に征服せられぬ。時に紀元前六百十二年なりき。是より貴族の勢力益盛にして人民の不平は其極に達するに至れり。而して當時市民の苦痛を感じたるものは貸借の關係なりき。當時債權者の債務者に對する權力は殆んど無限の有様にして、もし債務者か一定の期限を過ぎて負債を償はざる場合に於ては、債權者は隨意に債務者を捕縛して之を奴隸となし、或は之を海外に賣渡すことを得たりき。此を以て六世紀の交に及びてはアテネ市民の貧富の階級著しき差等を生ずるに至り、彼等市民は一方には貴族の壓制を受け、一方には富豪の酷遇を受けざる可らざるの苦境に陥ることをいはなりぬ。

紀元前五百九十四年ソロンはアルコンの職に任せられぬ。彼は實に從來の積弊を打破せんと試みたる最初の人物なりき。彼は安帝の貴族たりしに係らず、下級市民の苦境に對して深き同情を有したりき。彼は改革の第一着手として、奴隸たるを免れんとして海外に逃れたるアテネ市民を召返し、ついで貸借條例を發布して、土地人身を抵當として結ひたる負債に限り、悉く之を取消すへきを命し、また人身を抵當にすることを嚴禁したり。而て更にドラコで作れる苛法を廢止したりき。紀元前五百九十三年ソロン再ひアルコンとなる及びては、財産を標準として權利を定むる制度を採用し、(チモクラシイ)總ての人民を四級に分ち、三万圓以上の土地を有するものを一級となし、一万八千圓以上の土地を有するものを二級となし、九千圓以上の土地を有するものを三級となし、以下を四級となす、而して一、二、三の三級は直接税を收むるの義務あり、其割合は一級は其收入の全部に、二級は其六分五に、三級は其九分五に課す、また一、二の二級は騎兵若くは槍兵となり、三級は槍兵となるの義務を有す。四級は直接税を收むるの義務なしといへども必らず歩兵とならざる可らず。かくて一級はアルコン其他の高官に就き、二級三級は官吏となることを得といへども四級は全く此等の權利を有せざりき。ついで政府の組織を改良し、政府の主腦には九人のアルコンを置き毎年之を撰擧することゝなし、また四百人會議を設け、これを元老の議會となし、法律を起草し、國民會を管理し國民會の議決を施行せしむ。その議員は國民會に於

て推撰し、任期は一ヶ年なり。次に國民會を與し總ての市民をして之に參與せしめ、四百人會より提出したる議案を決議し、アルコンを撰舉し、任期の終りに於て其成績を調査することを掌らしむ。次にアレオバガス會を改良し、先代アルコンの成績良好なりしものを以て其議員となし、高等なる司法行政を掌らしめ、血屬の判定、國民生活の監督、法令施行上の管理をなさしめたり。然れどもソロンはたゞに國會の權限を廣め、貧民に與ふるに撰舉權を以てしたるに過ぎず。政体は依然たる寡頭の政治にして、門閥家に代ふるに富豪を以てしたるの差あるのみ。即ち貴族政治にかゆるに富豪政治を以てしたるものなりき。かくて階級の不和は此改革によりて毫も救濟せらるゝに至らざりき。

ソロンの晩年に至りては、アテネは再び黨争の衝となるに至れり。海濱の土地に住して商業によりて資産を作るに至りし商人(バラリ)平原地方の肥沃の地を有して巨富を極むるに至りし貴族(ヘヂ、エイ)北方山間の地に住して生活に困しみたりし貧民(ヂアクリ)等は各黨を作りて相争ひたりき。而して貧民黨の主領たりしものは、ソロンの友人たりしピヂストラトスなりき。かくてこれら三黨の争は暫らく繼續したりしか、貧民黨の勢力は日に益々強く其主領ピヂストラトスは終に他二黨の主領を國外に放逐し、自らタイラント(僭主)としてアテネを支配することとなりぬ。ピヂストラトスのタイラントとなりし時は、恰もバヒロン、ソヂヤの諸國皆ペルシアの併吞を蒙

り、小亞細亞海岸のギリシア殖民地は意を屈して貢をサルデスの知事に納めざる可らざる時なりき。ギリシア殖民地のタイラントは皆ペルシア王の命を奉してスキズ征伐軍に従へしときなりき。當時ペルシアの屯兵はヘルレスポントの附近に充滿したりき。ピヂストラトスは此報に接して危険の甚た近けるを洞察したり。彼は防禦の必要を豫知したり。故に彼はタソスの島を占領し、トラキアの礦物及材木を廻集して、アテネ艦隊製造の料となし、古傳説を出板して同人種結合の思想を鼓吹し、終にアテネを以てデロス同盟の主領となしぬ。彼はまたソロンの制を奉して積年の弊をたむるに勉め、都府を飾り、文學を興し大にアテネの文化を進めたり。(自紀元前五百三十七年至全五百二十七年)

ピヂストラトス死後は其子ヒツピアス、ヒツバルクの二子嗣さしか、彼等の人物は父の事業を繼ぐの價なかりき、是に於て或は殺され或は追はれ、アテネの形勢は茲に再び復古の傾向を生ずるに至れり。而して之を防ぎしものは實にクレステテスなりき。彼はアルクメオンデ族の主領なりしが、ソロンの制度に對して一大改革を加へ、政治上に於けるエウパトリットの勢力を削り、遂にアテネ民主政治を創建したり。この大改革は紀元前五百九年を以て斷行せられぬ。彼は全國民を十フイレイに分ち、また之を十デモイに分ち、其等百デモイの内十デモイを市部におき、九十デモイを地方におく。また大族の地方勢力を破毀し、エウパトリットの勢力を打破せんか爲に、種

々の地方をフィラ中に編入したり。また五百人會の制を改め、各フィラより五十人を出してこれか議員たらしめ、議長は日を限りて毎フィラをして交代せしむることゝなせり。また九人のアルコンは先づ國民會に於て候補者を定め、其中より撰擧することゝなし、オストラシスムの法を設けて、公安を害する恐あるものは、國民會の特權を以て秘密投票を行ひ、之を市外に追放することゝなしぬ。かくしてアテテは著大なる進歩を見るにいたりついに中央ギリシアに覇たるに至れり。

かくして一方に於てはスバルタの南方ギリシアに勃興するあり、一方に於てはアテテの中部ギリシアに興起するの時に當りて、一大強敵の來りてギリシアを侵すあり。是等二つの大國家をして相協力して之に當るの機會を興へしめぬ。

其二、波斯と希臘、

ベルシアは既に舊文明の諸國を滅し、其威令小亞細亞を壓するに至りしかば、ギリシア殖民地は概ねベルシアに朝貢して其命を奉するに至れり。然れるにミレトスの僭主アリスタゴラスはヘルテス民族のベルシア民族の配下に服するを以て快しとせず、イオニア族の殖民地を糾合して兵を擧げ、進んでベルシアの都府スウザを攻撃せんと企てたり。然れども當時彼はスバルタ及び他のギリシア諸國の救助を得ること甚だ困難なりしを以て、先づサルデスを攻めて其市府を圍み之を

波斯と希臘

焼けり、されどベルシア王は、直ちに兵を起してミレトスを復し、フェニキアの海軍はギリシアの艦隊を破毀せしかば、小亞細亞ニ於けるギリシア植民地は再ひベルシアの羈下に屬せざる可らざることゝなれり。これ紀元前四百九十四年のことなりき。

之よりダリウス王は、スキズ、トラキヤ、マゲトン、ギリシヤ諸民族を征服せんと欲し、紀元前四百九十二年マルドニオスを大將とせる遠征軍を編成し、エーゲ海岸に沿ふて、海陸並び進ましめぬ。然るに其海軍はアトス岬の附近に於て、颶風の襲ふ所となり、其陸軍はトラキヤの戰にて、大敗を取るに至りしかば、終に其目的を達することを得ずして空しく返國したり。

是に於てダリウス王は大に怒り、紀元前四百九十年更に遠征軍を組織し、エーゲ海を横斷し直ちにギリシアに向はしめぬ。遠征軍は途にエレクトリアを降し、其市府を破毀し、進んでアチカの東海岸に上陸したり。之よりさきアテテはベルシアの來侵するを聞くや、使をスバルタに遣して援兵を求めたりき。然るにスバルタは事に托して之を拒みぬ。依てアテテの將ミルチアデスはアテテの兵と少數のプラテアの援兵とを卒めて、マラトン平原に面せる谷合の狹路により、ベルシアの軍に對峙したり。既にしてギリシアの槍兵は突進してベルシアの弓牛を破り、ベルシア軍がギリシアの中軍を攻むる間に、ギリシアの兩翼はベルシア軍の背後に出て、ベルシア軍が海上の軍と相連絡するの道路を遮斷し、夾撃して大にベルシアの軍を敗りたり。是に於てベルシアの海

軍はスニウムの岬を廻りて港内に入り、彼處に停泊せるアチカのギリシヤ艦隊を對たんとせしか、ギリシヤ陸軍の既に屯在せるを見たるを以て、直ちに方向を轉してベルシアに飯りぬ。かくしてベルシアのギリシヤ遠征の軍二回共に失敗に終りたりき。

然れどもダリウス王は此等の失敗を以て意となさず、猶ほギリシヤ征服の希望を抱き、更にベルシア海陸軍全体の動員を命し、大舉してギリシヤを征せんと企てたり、然るに偶々ダリウス王死去の事ありき。紀元前四百八十五年クセルクセス王位をつくに及び父の遺志を繼承し、自ら二百萬の大軍に將として、ヘレスポントの海峡を渡り、別に海軍をしてトラキアの沿岸を走らしめ、以てギリシヤニ逼り入りぬ。時にギリシヤ國民の結合は甚だ堅固ならず、テッサリヤ、アルゴス、テーベ等の諸國民は皆ベルシアの軍に降服したり、實に今や東洋の文明か西洋の文明を壓服する時運の到來せるもの、如く見ゆたりき。列國はコリントに會合して對波斯の策を講しぬ。而してスバルタを盟主としたる防禦同盟は成立したり。スバルタ王レオニダスは三百の槍兵を率ゐて、テルモピレの嶮により、ベルシア陸軍の通路を遮斷し、アテチの海軍はエウボイアの北海軍に於てベルシアの艦隊と戦ひたり。然るにベルシアの陸軍は間道より出て、スバルタ軍後に出てしを以て、レオニダスの兵は全く其敗るところとなり、又これによりてアテチの海軍はアチカニ飯らざる可らざること、なりて中央ギリシヤは全くルシア人の侵入に委せられぬ。今やギリシヤ人か

ベルシア人に對してなし得べき良策は、アテチをベルシア人に與へてペロポネソス半島を防禦するの外なきに至れり。

アテチの名士テミストクレスは、國民に諭して、老幼婦女子をペロポネソスの地に送り、壯丁を徵集して船員に充てしめ、彼か命令の下に總ての船艦をサラミス灣に集合せしめぬ。時にクセルクセス王はレオニダス王を破りて、前方一敵を見ず、即ち長驅アテチに入り、其市街を焼き、ベルシア艦隊に命して、ギリシヤ船艦のサラミス灣内にあるものを攻撃せしめぬ。彼は海岸の巖頭に立ちて、遙かに海上を望見し、心中既に大なる勝利を豫期したりき。然るに戦始まるや、ベルシア艦隊行動の遅緩なる、ギリシヤ船艦の馳驅縱横なるに比すへきに非ず、終にベルシアの海軍は大敗を蒙るに至りぬ。王愴惶爲さん所を知らず、陸兵をマルドニウスに托し、己は本國に逃飯りぬ。而して其翌年に至り、スバルタ王バウサニウスはマルドニウスの軍をプラテーエーに破り、アテチの艦隊はユーゲ海を横ざりて、ミカレ岬附近にてベルシア艦隊の殘部に會し、全く之を破滅したり。

これら幾多の海戦に於て、アテチ海軍の大功を奏せしことは、アテチをして海上同盟の主領たる地位を有せしむるに至りたりき。此同盟の規約に従へば、同盟諸國は其保護の報酬として、軍艦を作り、或はアテチに年貢を納むるにあり。而して此同盟は、其金員のデロス嶋のアポロの神殿

に貯藏せらるゝの故によりてテロス同盟と稱せられたりき。この同盟の建設は専らアリスチデスの方なりき。(紀元前四百七十四年)

此同盟成立するやミリチアテスのチキモンは、トラキアのペルシア駐在軍を攻め、ペルシア配下の諸島を征服し、全然ペルシア人を歐維巴以外に驅逐したり。ついでキプロス島を征して之を取り、ペルシア艦隊はユーゲ海を横きりて、規定線の方に入ることを得ざるべく、亞細亞のギリシア市府は總て獨立たるへしどの條件の下にペルシアと平和を締結したり。時に紀元前四百四十九年なりき。

其四 アテチゴスバルタの争衝

ペルシア戦争終結は、ギリシアをして再び平和の状態に復せしめぬ。されどこの平和の状態は、一時統一に向ひたるギリシアの諸國に向て、再び相反目せしむるの機會を興ふるに至れり。アテチ、スバルタの二大國家の反目は、漸く劇甚なるを見るに至りぬ。

ペルシア戦争の際に於て、アテチ、スバルタ二國の力は甚大なりき。強大なるペルシアの軍隊をして、國外に退かざるを得ざらしめ、薄弱なるギリシアの民族をして、ペルシア民族の壓服を免るを得しめたるは、全く是等二國の力なりき。故に戦争の終るや、小國等は各此等二國を仰きて盟主となし、此等二國に托するに自國の保護を以てし、かくて自國の安全を保持せんことを期す

アテチゴ
スバルタ
の争衝

るに至れり。而して終に此等の二國は互に盟主の權勢を振はんと欲するに至り、こゝに二の争衝を見ることゝはなりぬ。

紀元前四百七十九年スバルタに於て、ヘロツドは屢々ギリシア戦争に預りたる功として、土地の分配をスバルチエートルに要求したり、而て其要求の客れられざるに及びて彼等は結合してスバルチエートルに反抗したり。此窮狀を見て、アテチのキモンは、アテチの民會に説くに、スバルタ陸軍の力なくしてペルシアに抗するの至難なるを以てし、援兵を送りてスバルチエートルを助けんことを勸告しぬ。然るにアテチの市民は一時此勸告を納れて援兵を送りたりしも直ちに之を呼返してキモンを追放し、却てヘロツトに同情を容するに至れり。これ既にアテチかスバルタに對する反目的思想を表示したるものなりき。

ペリクレスかアテチの政權を掌握するに至りては、紀元前四百六十年—紀元前四百二十九年)此傾向は益々其度を高むるに至りぬ。彼はアテチの位置を高むるを以て其一生の政策となし、此政策の完成に向て總ての事業を計畫したり。彼は先づテロス同盟の寶庫をアテチの市中に移し、(紀元前四百六十一年)六十艘内外の武装船をして常に地中海に遊弋せしめ、又新に幾多の新植民地を伊太利地方に建設したり。加之彼はアリチデス、キモン諸氏の意志を襲きて、アテチ市の裝飾に勉め、バルテフンを建て、プロピリーを設け、又文學者をアテチに招きて大に文教を興したり。而

して此等裝飾に要する莫大の費用は、總て之を同盟の寶庫に仰きたりしなり。要するに彼の政策は、同盟の諸國を全然アテチの屬國となし、同盟をアテチ帝國の中に移植するにありしなり。是を以て同盟諸國漸くアテチの處置を憤るものあり、ナクソス、タソス、エギナの諸市續々同盟を脱するに至れり。然れども彼は直に兵を送りて之を屈服し、多大の土地は皆アテチ植民地に編入せられたりき。彼は之より進んで、マケトンを侵し、メガラを取り終にテベスの小市を占領しぬ。是に於てカテベスはスバルタと結ひてアテチに對峙することとなりぬ。時に紀元前四百五十七年なりき。是より是等二流の衝突は常に絶えしことなく、終に紀元前四百三十二年に至りて一大衝突を見るに至れり。

此年ユリントと其植民地なるユルキラとの間に紛擾起れり。アテチはユルキラを助けて同盟諸市とコリントとの交通を絶たしめぬ。然るにボチリアは獨り其命令に従はざりき。依てアテチは兵を遣はして之を圍み、コリントまた援をスバルタに乞ふに至り、此處にメテチ、スバルタ二國の争を出現することとなりぬ。

スバルタは其同盟諸國の兵士を率ゐて、直ちにアテチに侵入せり。アテチは、ペリクレス、アテチの城門を閉ちて之を防ぐ。圍を受けること數年。城内度々惡疫の侵す所となり、將率の之に斃るゝもの數万。ペリクレスマた之に死するに至れり。クレオン後を受け、スバルタ王ブラシタスと

アンヒポリスに戦へしか、終ニ之に死しぬ。(紀元前四百二十二年)翌年ニキヤス之に代るに及ひてスバルタと平和の條約を結ひ、アテチはペロホテソスの要求をすて、スバルタリアンヒポリスを得ることとなりぬ。

然るに此條約はテベス及びコリントが承諾せざりし故によりて、幾何もなくして、再び破らるゝに至りぬ。アテチのアルキヒアデスはシチリアの一市エゲスタが、スバルタの羈下にあるサナラヲウイスに反して、援をアテチに求むるを好機とし、強大なる援軍チサイラキウイスに送りて之を助けぬ。然るにアテチ人はアルキヒアデスを追放せしを以て、アテチの軍は其將を失ひ軍隊は大方敵軍に降らざる可らざるに至れり。

是より先き、スバルタはペルシアの援兵を得て、アテチの海軍を全滅せんと欲し、紀元前四百十二年ペルシアと同盟を結ひ、曾てペルシア戦争の際に定めたる海上問題に關する條約を取消したり。紀元前四百五年に至り、スバルタの將リサンドルは、一大艦隊に將として小亞細海岸にあり、アテチの艦隊をヘレスホント海峡のエゴスポタミに襲撃して之を紛截し、海陸よりアテチを封鎖したり。是に於てアテチは終に降を乞ひ、スバルタと平和の條約を締結しぬ。スバルタは(一)アテチは十二艘の軍艦の外は、悉く之を棄ること、(二)ペロホテソス同盟の一員となり、戦時はペロホテソスに助援すること、(三)アテチ市を圍繞せる絶壁並に市街と港灣を連結せる城壁を取除く

こと、(四)アテチの主となりて締結せる同盟を解き、且同市を治むる爲め別に新憲法を興ふることをアテチに約し、三十人の評議員を選出して新政体を組織せしめぬ。リサンドルは武力を以て人民を壓服し、新政府の行動を助けたりしか、人民終に其暴政に耐ふる能はず、翌年テーベ人及リサンドルと隙ありしスバルタ王の助を得て之を轉覆し、再び舊政を回復したり。然れども今日のアテチは既に昔日のアテチに非ず、ギリシアの覇權は最早アテチの掌中に有らざりき。

其五 テーベとマケドン

アテチ、スバルタ二國互々權力をギリシアに争ふに際して、ペルシア王タリオス二世は、スバルタに與して、小亞細亞のギリシア植民地を奪掠し、次子キロスをして其大守に任したりき。紀元前四百四年タリオス二世死し長子アルタクセルクセス位を嗣くに及び、弟キロス之を肯んせず、スバルタの援兵を借りて叛を謀り、紀元前四百一年クナクサに戦死す。是によりてスバルタはペルシアの來敗を恐れ、却て兵を出して小亞細亞を侵す。然るにペルシア王は、莫大の金を投じて、テーベ、コリント、アルコス等の諸國に賄ひ、以てスバルタに反抗せしめたり。スバルタ王終に屈し、紀元前三百八十七年アンタルキデスをサルデスに送りてペルシアと平和條約を結はしむ。其條件は(一)小亞細亞のギリシア植民地及びキプロス嶋は、ペルシアに屬すべきこと(二)ギリシア國內の各市は各其自治に委すべきこと、但しペロポネソス半島内に於けるスバルタ領及びアテ

テーベと
マケドン

チ領の島嶼は此限に非ず(三)此條約に反くものは、ペルシア、スバルタ兩國協力して之を征すること等なり。世に之をアンタルキデスの條約といふ。これ實にスバルタの國力を張らんか爲に、ペルシアをしてギリシアの國事に干渉せしむるの端を開くものといふべきなり。テーベは之に對して斷然たる抗義を申込まざるを得ざりき。スバルタは大に怒りてテーベのアクロポリスを占領しぬ。是に於てスバルタ、デーヘ二國の間に戰爭を見るに至れり。

時にテーベにはペロピダス、エバミノンタスの二雄あり、力をテーベの興起に盡し、テーベの軍隊を改良して戦法を改作し、ハラシクスの隊形を創始したり。かくて終に紀元前三百七十一年レウクトラの戦にて大にスバルタの兵を破り、ついで紀元前三百六十二年ペロポネソスに侵入し、マンチニアに於て再びスバルタ兵を撃破したり。

然れども此戦に於てエバミノンタス戦死し、後久しからずしてペロピダス死せしを以て二人の經營を全く滅ふるに至り、デーベの覇業も永く保持する能はず、ギリシアは亦小邦割據の状態となり、終に北方トリア族の勢力の下に服従せざるを得ざるに至らしめぬ。

アテチ、スバルタ二國の勢力は、日に衰頹に向ひ、テーベの國力は相盛なりしも、また以て彼等二國の昔日に比するに足らず、ギリシア國內暫らく強國を欠くに至りしことは、諸小國をして全く自治の状態を現出せしむるに至れり。而してまた諸小國が各自治をなし之に分離して生存した

いしことは、外國の勢力をして容易にギリシア國內に侵入するの便宜を興ふるに至りたりき。紀元前三百五十九年フィリッポ二世がマケドンの王となるや、彼は、己が幼時テーベに於て受けたるギリシア教育をマゲトンに注入し、エバミノンタスカ創肇する所の軍制に依りてフアランクスを編成し、盛に騎兵を養成して之を訓練し、専ら力を兵力の強大に用ひたりき。彼はトラキア海岸の諸市を略取し、メトーン、アンヒボリスの諸市を征服し、切りに侵略を事とせしかば、ギリシアの諸國は漸く目をマケドンにうゝくに至り、彼の威名は忽ちにしてギリシアを壓することゝなりぬ。彼はやかてフオキア人か擅にアンヒクテオム宗教同盟に屬するデルヒ宮殿の資財を領し、同盟諸國之と相争ふに及び、同盟の軍を助けて終にフオキス市を陥れ、功によりて同盟の議員に推舉せらるゝに至れり。是に於てか彼は北方の蕃族より一躍してギリシア内事に容喙する權利を掌握するに至りぬ。

マケドンの勢力益々ギリシア國內に及ぶに及び、ギリシアの諸國には去就の問題漸く熾に、主戦平和の二黨は、何れの國內にも喧争を極むるに至れり。アテネの主戦黨デモステテスはフィリッポを目するに北方の僭王を以てし、各地に遊説して、志氣を鼓舞し、遙にベルシアと同盟して彼を排斥せんと試みたり。されどフィリッポは紀元前三百四十年ヘレスポントに近きペリントを攻めて、二國同盟の艦隊を退け、アテネ國民の要地たるビザンチオンを侵したりき。ついで紀元前三

百三十九年に至り、久しくテルヒ殿堂の所領を占有したりしアムヒツサを攻め、またエラチアを降して益々南進の形勢を示したり。デモステテテ子は此形勢を見て大に驚き、テーベと連合して其南下を遮らんと企しか、紀元前三百三十八年同盟軍はケーロチアの地に於て大にマケドン軍の破る所となれり。フィリッポは即ちコリントに至りて同盟の會議を召集し、スバルタを除きて總ての諸國は、フィリッポの權力の下に、(一)同盟の議員は議員たる他市の内事に容喙すへからず。(二)同盟の議員は議員たる他市の追放者を隱匿すへからず。(三)フィリッポを以て盟の同盟主となし、此等の條項の施行を監し、其違背者を責罰せしむ。(四)マケドンか他の抗撃を受けし場合若くは他日ベルシアを征する場合に於て、各市の委員は援兵を之に送るべし。どの決議をなしぬ。彼は此勢に乗して直ちにベルシア遠征を企てんとせしか、偶彼は臣下の爲に暗殺せられぬ。時に紀元前三百三十三年なりき。

フィリッポの死するや、其子アレクサンドルは其後を受けぬ。齡僅に廿歳なりき。然れども彼は非凡の才を有したりき。彼は直ちに同盟會議をコリントに召集し、父の意志を繼ぎてベルシア遠征の行をなすへきを告示したり。彼は先づ北方蕃人の反を征し、デモステテスカ企てたる再度のアテネ、テーベ同盟を破毀し、テーベを征服して全く其勢力を挫ちき、然る後、マケドン、ギリシア、及び諸蕃人よりなれる三万五千人の兵を率ゐ、ヘレスポントの海峡を渡りて小亞細亞に侵

入したり。ペルシアは此報を得て、小亞細亞、シリアの兵を集め、アレクサンドル王の兵をグラニマス河に要撃したり。されど王は容易に之を破り、(紀元前三百三十四年) 海岸に沿ふて南に進み、ミレトス、ハリカーナソスのペルシア守備隊を降し、至る處にギリシア植民地の自由を宣言したり。彼はペルシア兵の直接ギリシア本國を攻むるを慮り、先づ地中海沿岸のペルシア諸州を征して、此等の憂を除かんと欲し、兵を進めてギリシアに至る。時にペルシア王ダリオス三世は全軍を擧りてイソス附近の地に陣し、マケドン兵の後を遮る。然るにアレクサンドル王は直ちに兵を轉して恐しくこの大軍を撃破し、王母以下の皇族を捕へ、其行李を奪ふ、王は僅に身を以て遁るゝことを得たり。(紀元前三百三十三年) クリオス王は使をアレクサンドル王に遣し、エウフラト以西の諸州をささて平和の締結をなさんことを乞ひしか、王は猶之を許さず、フェニキヤに至りてチルを降し、バレスチナに至りてガザを陥れ、終にエチプトを征してニル河口にアレクサンドリア府を建設したり。是より彼はペルシアの内部に入りチグリス河口に近きガウガメウに於てペルシアの大軍と際會し大に之を破りたり。時に紀元前三百三十一年ダリオス王は遁れて東方バクトリアに走りたりしも、知事の殺すところとなり、ペルシア帝國は全くアレクサンドル王の掌中に落ちぬ。是に於てか彼はギリシア人をして、自國の祖先か曾てクセルクセス、ダサオス等に受けたる凌辱を十分に雪かしむることを得たり。

今やアレクサンドル王は、徒にギリシアの代表者たるのみならず、亦ペルシアの代表者たるべき地位にありき。彼はこの大領土を統一して一大帝國を建設せん希望に滿さるゝに至りぬ。故に彼は自らペルシアノ服装ヲ着用し、ペルシア朝廷の義式を用ひ、ダリオスの長女ロクサナと婚を結ひ、パール教の殿堂に參拜し、ついで諸將に薦めてペルシアの婦人を娶らしめ、舊ペルシア領土の人民に宗教の自由を許し、以てギリシア、ペルシア二民族の融合を謀り、紀元前三百二十七年には遙かに印度を征してガンガ河の邊に至り、大帝國の首府をバヒロンに定めて統一の大業を成就せんと企てしか、紀元前三百二十三年 道病を得てバヒロンに死せり時に齡三十二歳なりきと云ふ。

其六 ヘレン文化波及の世界

アレクサンドル王の死すると共に、ギリシア、ペルシアの二民族を合して、一大帝國を建設せんとの大政策は、自ら消滅に皈するに至れり。アレクサンドルが各州の知事とせしマケドンの諸將は孜孜として自己か有する地方の利益をねさめ、また自己か獨立の地位を固めんとし、舊ペルシア領土の中に於てすら、既に分離の傾向を示すに至りたりき。然れども東西二國の文明は彼により融合の道を開き、ギリシアの文明は盛に東洋に輸入せられ、前後アラビア人の侵入に至るまで、大略九百年間、ギリシア文明か東洋人の精神を支配するに至りしことは、注意すべきことな

りどす。

アレキサンドルの死するや、彼は其愛將ベルチカスをして其子フィリッポ、アルヒダイオス、及びアレキサンドルを助けて、大權を掌らしめ、アントバトロスをしてマケドンを支配せしめ、諸將を各地に分配したり。然るにベルチカスは自己の權力の大なるを頼み、自ら代て王たらんと欲し、切りに王室に迫害を加ふるに至りしかば、諸將連合してベルチカスに反し、皆其命令に従はず、ベルチカス依てエチプトを征せしか却て自個の軍隊の爲に殺すところとなりぬ。是より先きギリシアは紀元前三百三十年既に漸く分離の状態を生し、スバルタ王アギスは、虚に乗じて獨立を企て、アレキサンドルの死するに及ひては、この傾向益甚たしく、デモステテス、ヒブレーデスの二人はアテネ市民を煽動し、エートリア人と同盟して、マケドンを抗したりき。(ラミアの戦)然るにマケドンの守將アントバトルスは常に能く之を破り、マテテの市政を變更し、デモステテス、ヒアシーデス等を法律外の者と宣告せり。是によりて彼の威名一時マケドンを震ひ終にベルチカスに代りて大權を握るに至りぬ。チカサンドル其後を受くるに至り、アレキサンドルの母オリンピヤを殺し、アレキサンドルの妹テサルニケと婚して、永久大權を維持せんと試みたりき。時にパピロの將アンチゴースは、此報に接してカサンドルの罪を鳴し、マタ自個の三位繼承の權利を主張し、カサンドル等と小亞細亞のイブソスに會戦せしか、却て其破る所となりき。後カサン

ローマの
起源

ドルの死するや、マンチゴースの子ゴノタスは屢々兵を起してマケドンの地を争ひたりしか終にアレキサンドルの有せし、大帝國には幾多邦國の興起を見るに至り、エチプトはブトレマイオスの領となり、シリアはセレウコスの手に落ち、マケドンはアンチゴースの有するところとなりぬ。かくしてこれら三國は其領土の大によりて、幾多小國の間に立ち、常に權勢を振ひたりしも、偶々西方の半嶋國ローソの漸く強大に赴くあり、紀元前百六十八年マケドン先づ其版圖となり、フンマシリア、エチプト等の諸國皆其領するところとなるに至りぬ。

第七章　ローマ

其一、ローマの起源

イタリアは紀元前八世紀の頃、既にエトラスカ、サムニ、ラチニ、等、幾多のイタリア民族の要害の地を領して、攻伐を事とするあり、而してエトラスカの如きは、甚た發達せる文化を有したりき。ローマは、蓋しラチニの建設にかゝる所、後サムニの市を合して、其規模を擴張し、エトラスカの征服を受くるに及ひて、其發達せる文化を輸入して更に其莊大を増加したり。ローマ人は其祖先を同らし、其宗教を同らせる自個の部族のみを以て、官吏となり、僧侶となり、政治に參與するの權を有するものとなし、其征服したる市の人民は、總て王に屬するものにして(プレブス)、總ての公職につくの權なく、絶對的にローマ社會の制裁に服従すへき義務あるものとせり。

かくしてローマの社會は終に貴族（パトリシアン）、平民（プレビアン）の二階級に分るに至り、稍不穩の狀況を現出することとなりぬ。セルピウス王の立に及び、些か貴族の專横を制し、以て平民の權利を伸暢せんと欲し、貴族と平民とに別なく、土地を有するものは、皆兵役納税の義務あるものとし、財産の多寡によりて人民を五級に分ち、各級をまたケンチュリーに分ち、一ケンチュリー毎に一投票權を與へ、貴族平民を合するローマ人民の議會を創立し、戰爭を布告し、新法を認可し、平時に於ける死刑、体刑を決定する權利を與へたりき。然るにローマ人は此等異人種と混合するを慊とせず、終に、革命を起し、エトラスカの王を廢して共和政府を建設したり。時に紀元前五百〇九年なりき。

新に建設せられたる共和政府は、毎年改撰せらるべき二人のコンソルと、三百人の貴族よりなれるべき二人のコンソルと、三百人の貴族よりなれる元老院とによりて組織せられたりき。而して此等二人のコンソルはローマ人民の集會なるコミチヤ、ケンチュリアタより撰はる所にして、軍隊を指揮し、裁判を施行し、議會を召集するの權利を附與せられたりき。實に貴族によりて作られたる共和政府は、自ら貴族の勢力を擴張し得べく作られたりき。この共和政府の新設によりて、平民は益々大なる迫害を受けざる可らざることゝなれり。

平民は到底この迫害に耐ゆる能はざりき。かくて紀元前四百九十四年より紀元前六十七年に至る

まで、平民は常に貴族に抵抗して其權利の擴張に勉めたりき。此長日月の間、平民か如何にせしか貴族に抵抗して撓まず、屈せず、一步一步其權利を擴張して、終に貴族と全等の地位に至りしか、ローマ史上大に注目すべき事實なるべし。

平民の最苦痛を感ずる所は、彼等か社會上奴隸の地位に陥らざる可らざることなりき。彼等はローマか近隣の諸族と相争ふに當りて、常に兵役に徴集せられ、靜かに農業に従事する能はざりしのみならず、武装は總て本人の負擔なりしを以て、之に要する莫大の費用は、多く之を貴族の手に仰かざるを得ざりしなり。然るに當時貴族の之に對する甚だ酷にして、其利率高く、負債の法嚴に、爲に、多數の平民は、其土地を失ひ、債主の爲に奴隸として勞働せざるを得ざるに至りたりき。是を以て紀元前四百九十四年、ローマか隣族と相争ふに際し、平民等は戦役に従ふを拒みて大に貴族を苦しめしめ、貴族か總て負債者を免し、彼等の救済を約するに及びて、漸く戰場に出るに至りしか、戦後、元老院か約に背さて十分負債法の改良を爲さざるを見るに及び、彼等は遂に意を決してローマを去りモンズ、サーケルに移り、彼等は全く元老院の支配を受けざることを公言したり。是に於て貴族等大に驚き、元老院をして其和解に努めしめ、多くの負債者を免し、奴隸を放ち、また彼等の安全を保證する爲に、平民より五人のトリビュン（護民官）を撰ひて政府の官吏の不正なる處刑に對して平民を保護する權利義務を與へ、ベトの權（拒否の權）を與

へて裁判宣告の執行及び行政處分の實行を禁止、元老院の議決をも拒否することを得せしめ、また平民の各トリプスより撰出したる議員を以て組織したるコミチヤ、トリビユータを設けたり。かくて平民の権利はやゝ伸暢せらるゝ機運に向ひぬ。やがてローマかまたイタリア諸族を征するに及ひて、平民は其報償として、元老院及び貴族の官吏に請求するに、成文律の編纂を以てし是によりて自個か恣に貴族の意向によりて處分せらるゝの弊を防かんと試みたり、貴族は此請求に對して暫らく争ふ所ありしか、紀元前四百五十年に至りてコンソル、トリビユーンの、職を廢し、ローマ市民より撰出されたる十人會(デセンツイリ)を設けて國政を掌理せしめ、以て成文律を制定せしむることゝなれり。翌年に至りて法典成り、十枚の銅表に刻して公衆に示されぬ。その後次の十人會は更に二表を追加したり。これこの有名なる十二の銅表にして實に羅馬の起源と稱せらるべきものなりとす。されどこの成文律は未だ以て平民の希望を満足せしめ得べきものには非ざりき。この成文律はたゞ貴族の特権を表示したるものに過ぎざりき。彼等平民にとりては何の得る處なかりしなり。是に於て平民等は再びローマを去りてモンヌ、サーケルに移りぬ。依て貴族は十人會を廢しコンソル、トリビユーンの官を復し、以て平民の意を平け、つゝ法律に關するコミチヤ、トリビユータの決議は、ロース市民全体に効力あるものとし、(紀元前四百四十八年)平民の貴族と結婚することを公許したり。(紀元前四百四十五年) 然れども貴族は猶自個の特権を

増加するに向て從來の意志を變更したるものは非ざりき。彼等は一方に是等の讓歩をなすと共に一方には幾多の特権を發見したりき。彼等は新にセンソルを置き、人民の族籍を定め、人民の財産を調べ、租税額を定め、元老院議員を選定し、其他一般の監察をなさしめたり、而して此重要な官吏は専ら貴族中より之を任することゝしたり。偶々紀元前三百九十年、ゴールのローマに入寇するあり、貴族は非常なる打撃を蒙りしに反して、平民は十分なる勢力を得るに至り、リシニウス、セクスチウス等のトリビユーンは負債法を改善し、負債は總て從來支拂ひたりし利子を元金より除き、殘額を三年賦に償ふべきことを定め、土地所有の制を立て、一人の所有地五百五ゲラ(ユゲラは我二反半許)を越ゆるを許さざらしめ、貴族の所有地を削りて之を平民に與へ、二人のコンソルの中一人は必らず平民より撰ふべきことゝ定めたり。(紀元前三百七十六年) 是より貴族平民の争は暫らく平穩に飯するに至り、茲にローマの領土擴張の時期を現出することゝなれり。

其二、ローマの領土擴張

ローマは、國內に於て、貴族平民去に權を争ひし間に、國外に於て、常にエトラスカ及びイタリア諸族と戦へしことをいへり。然るに、今や、ローマ國內は、久しく續きたりし貴族平民の争暫らく去りて平穩無事の時來り、貴族平民相連合して國外の事に當るを得ることゝなれり。偶々紀元三百〇九年、ゴール人の侵入あり、俄然ローマをしてイタリア諸族中に、最高地位を有せしむる

ことゝなれり。

紀元前六世紀頃アルプスを越へて北部イタリアに移住したるゴール人は、紀元前世紀に及びてパドス河を渡りて中部イタリアに侵入したり。エトラスカは最も彼等に近かりしを以て、其災害を受くること最甚しかりき。ローマは此報を得るや、エトラスカに對して有したりし、從來の惡感情をすて、使をゴールの將ブレンヌスの許に送り、エトラスカを助けて戰を共にすべきことを告げぬ。是に於てゴール人はエトラスカをすて、直にローマに進み、ローマの軍をアリア河の邊に破り、之をウエイイの地に走らせ、ローマに入りて其市街を焚き、其城郭を圍みたり。然るにローマはカミルスをして將となし、精兵を集めてローマの軍隊を改造せしめ、大にゴールの兵を破り、紀元前三百六十七年の交に至りては、全く之を中部イタリア以外に驅逐し、之をして南方に進むる途を絶たしめたり。是よりローマの勢力は漸く強大にして、ラチニ、サピニ、エトラスカ人の同盟を壓服し終に純然たる帝國の形勢を成すに至れり。時に紀元前二百九十五年なりき。初め、ローマか近隣諸族を征服せし時には、ローマは總て其領土をローマに編入し、其人民を平民となし、ローマ市民と同じく市民権を與ふるを以て常例となしたりき。然るに今ま、イタリアの中部北部の大領土を得、幾多の種族を含むに及びては、ローマは茲に從來探り來りし政策を變更するの必要を感じるに至りたり。即ちローマは此等人種を目するに一樣の社會を以てせず、個

々別々の社會を以てし、各自異なる政治上の權利を與ふるに至りたり。かくしてイタリア諸族政治上の權利は大略三種に區別せらるゝことゝなりぬ。其一はローマンスにして、公私の權共に之を有し、羅馬法律の支配を受け、議會に列し、各種の行政官となることを得。其二はラヌスにして、ラチン市民権を有す。此ラチン市民権は曾てラチウムに附與せしものにして、完全なる羅馬市民権に非すと雖も、容易に之を得るの便あるものなり。其三はイタリアンスにして、一切の羅馬市民権を有せず、自活を許され、自ら法律制度を設け、官吏を選擧し得るものなり、然れども宣戰講和、造幣、外交の三大權は、全く之をローマの手中に收めて、毫も他人の容喙を許さず、以てローマのイタリア諸市に於ける勢力を保持することに勉めたりき。

ローマは既にイタリアの中部及び北部を従へしのかは、更に進んでマグナ、グレスシアに入り、南部イタリアのギリシア植民地を侵すに至れり。タレンツムなるギリシア人は、終に救をエピロスの王ピロスに求めたり。依て紀元前二百八十年ピロスは兵を率ゐてイタリアに入りぬ。是れ實にローマかギリシアと相接するの始めなり。ピロスはローマ人と會戰して、幸に之に勝つことを得たりしか、偶々ゴール人かギリシアを侵略するの報に接したるを以て、之を防かぬか爲めに兵を收めて本國に返りぬ。ローマ人は之を機とし當時海上に勢力を有せしカルタゴと同盟を結び盛にギリシア植民地の蠶食を企てたり。既にしてシチリヤ島のシラクサの民、カルタゴに壓服せらるゝ

に苦み、援をビロスに求むるあり。ビロスは再びイタリアに來り、ローマ、カルタゴの同盟を撃破し、以てイタリア、シチリヤのギリシア人を救援せんとせしか、紀元前二百七十五年ベチベントに於て大にローマ人の破る所となり、イタリアに於けるギリシアの市府は總てローマの手に落ち、シチリアの大部はカルタゴの所有に返しぬ。

ローマはカルタゴと同盟して、イタリアに於けるギリシア植民地を征服し、終に全く、是等二國の進路に横はれる共通の障害物を除去し得たり。然れども既に今、この共通の障害物が除去せられて、此等二國の境界相接するに至りし時、此等二大強國が猶其同盟を維持すべきやは、故より疑はしき事實なりしなり。實にローマは是よりシチリアの内事に干渉して、カルタゴと相争ふの機會を造るに至り、前後三回、略百有余年の戦を開くに至れり。これ有名なるピユウニツク戦争なり。

紀元前二百六十四年、シチリアの北東なるメツシナ地に關して、シラクサとカルタゴとの間に争論起り、カルタゴはシチリヤ島内に亂入したり。依て、ローマはレラクサにありしマメルチン(カンパニヤ傭兵の一隊)を助けてカルタゴの傭兵、及び、シラクサの王ヒーロンを破りたり。是實に第一ピユウニツク戦争の起源にして、ローマ、とカルタゴと干才を交ふるの始なりき。(ピユウニツクの語はフェニキヤ人なる語のラチン名に基く)かくて紀元前二百六十二年ローマは其根據地

アグリゲンツムを取り、ローマの將ヅイリウスは新造の戦艦と精練の水兵とを以て、大にカルタゴの海軍を破り、コンスルのレギユルスは艦隊を率ゐて、親らカルタゴの本國に迫りぬ。後カルタゴ暫らく有勢なりしか、ローマ人は切に艦船の新造と水兵の訓練とに勉め、終にコンスルのカチユルスの下に一大戦利を得るに至れり。是に於て紀元前二百四十一年兩國平和の約成り、ヒーロンの領地以外シチリア全部はローマのプロビンスと定められぬ。これ明かにローマがイタリア以外に領地を有する初にして、またプロビンスを置くの初なり。而して總てプロビンスの人民は、貢金をローマに納め、ローマ官吏の支配を受くるものにして、政治上遙かにイタリアンスの下にありとなす。この後ローマは、カルタゴの内亂に乗じて、サルデニア、コルシカ諸島を奪ひ、又ゴヒールを征して北部イタリアに領土を廣めたりき。此時に當りて、カルタゴの將はミルカル、バルカスは、自ら許をまたず政府の手兵を率ゐて、イスパニアに渡り(紀元前二百三十七年)南東の地方を經營し、諸方の礦山を採掘して傭兵の資用に充て、將に東に進んでローマを征せんとせしか、中道にして斃れぬ。義子ハスドルバル其後を受けしか、間もなく部下の殺すところとなり、ハンニバル(ハミルカル、バルカスの子)之に代れり。ハンニバル義兄に代りて將となるや、彼は直ちにローマ征討の計略を定め、之か實行に着手したり。紀元前二百十九年、彼は兵士を率ゐて、エプロ河を横さり、ローマの同盟者たるサグンツム市を陥れ、益々此方に進入したり。ローマは此

報に接して、使を彼に送り其行動を詰責し、又カルタゴ政府に對して、平和の破毀者たる彼をローマに引渡さんことを請求したり。然るにハンニバルは翌年ピレネース山を越ゆるのみならずカルタゴ政府は彼の行動に關しては何等の關係なく、亦彼を引渡すの能力なきことをローマに通告しつゝ、非常の歡を以て彼の壯舉を迎へたり。彼の壯舉は管にカルタゴの同情を得たるのみに非りき。從來ローマを恐れたる四隣の諸邦は、皆舉りて之に同情を表したりき。ゴール、ギリシア諸邦、イタリヤ内のローマの同盟諸邦へは總て彼の壯舉を快とし、マケドン王フィリポの如きは彼どローマに對する攻撃同盟を結ひたりき。かくて彼はゴール、カルタゴ、ギリシア、イタリア諸邦の大連合軍を以てローマを征服せんとの大計を密しつゝ、アルプスの連山を越ゆるてバスの谷に侵入したり。彼はトレビアの戦ひ、トラシメテス湖畔に戦ひ、前エトルリを経て南に下り紀元前二百十六年カンチーの地に於てファビウス、マキシムス、の率ゆるローマの大軍を撃破したり。是に於てかカルタゴ、マケドンの二國は、公然ローマに對して戰を宣し、シラクサも亦たローマに反しぬ。然るにローマは此等の敗戦に屈せず、海軍をギリシアに送りてギリシア諸邦を煽動し、フィリポをしてローマに進軍するを得せしめ、マルセルスをシラクサに遣して其市府を圍ましめ、プブリウス、コルネリウス、スキピオをイスパニアに送りて、ハンニバルの弟ハステルバルのイタリアに入るの道を防かしめ、ハンニバルをして十分なる活動をなすことを得せしめ

ぬ。ついでハステルバルの死するに及び、スキピオをしてアフリカに航し、頻りにカルタゴを攻撃せしめぬ。依てハンニバルは兵を卒んでカルタゴに渡り、紀元前二百〇二年ザマに會戦せしか大にスキピオの破る所となりぬ。やかて兩國間に平和の條約締結せられ、カルタゴは五十年間二千万圓の貢金をローマに納め、ローマの許可なくして戰端を開く可らざることゝなれり。先きにハンニバルかローマを征するや、マケドン王フィリポどローマ攻撃の同盟を結ひてローマに抗せしかはローマは兵を送りてマケドンに反對するギリシア諸邦と結ひ、大に之を苦しめたることありき。これ實にローマかギリシアの内事に干涉するの初にして、ギリシアは是よりローマの壓迫を受くることゝなれり。第二ピユウニツク戰爭の終るや、ローマはコンスルのフラミニウスをギリシアに送り、アテチを連合してマケドンに抗せしめぬ。紀元前百九十七年、彼は大にフィリポの軍をキノスケスアレの地に破り、翌年ギリシア諸邦に告ぐるには諸邦の自由を以てしたり。然れども諸邦の自由は全く名のみにしてローマの壓迫は益々甚しかりき。故にベルシウスかフィリポの後を受けて王位に上りし頃には、ギリシア諸邦のローマを離れてマケドンに屬するもの多く、マケドンの勢力稍盛なるに至りたりき。依てロースはパウルスがマケドンに遣し之を征せしめぬ。パウルスはビドナの戰に於て大にマケドンを破り、終にマケドンを四國に分割し、エピルスの全市府を破毀したり。

此時に當りてカルタゴは隣國ヌミヂアと争を生し、ヌミヂア王マツシニツサはカルタゴの市府を攻撃したり。依てカルタゴはローマに報するに事情已む可らざるを以てし、兵を擧て之と戦ひぬ。ローマはカトーを遣し其事情を調査せしめしに、彼はカルタゴを滅すの必要を陳述したり。是に於てローマはプブリウス、ユルトリウス、スキピオ、エーミリアヌス（前に見ゆるスキピオの弟）をアフリカに遣はして、カルタゴを征せしめ、其市街を破毀し、領土の一部をヌミヂアに與へ、之をローマのプロビンスとなす。時に紀元前百四十六年なりき。

ローマが第三ピニツク戦争に多忙なりし間に、マケドンの四國は連合して一國を成さんと企てたりしか、紀元前百四十八年またローマの破る所となり、終にローマのプロビンスに編入せられぬ。此後イスパニア地方に内亂ありしか、紀元前百三十三年に至りて、全くローマの征服する所となれり、かくして一小都市より起りしローマは今や歐洲三半島及びアフリカ北部の主權を握るに至れり。

内証時代

其二、内証時代

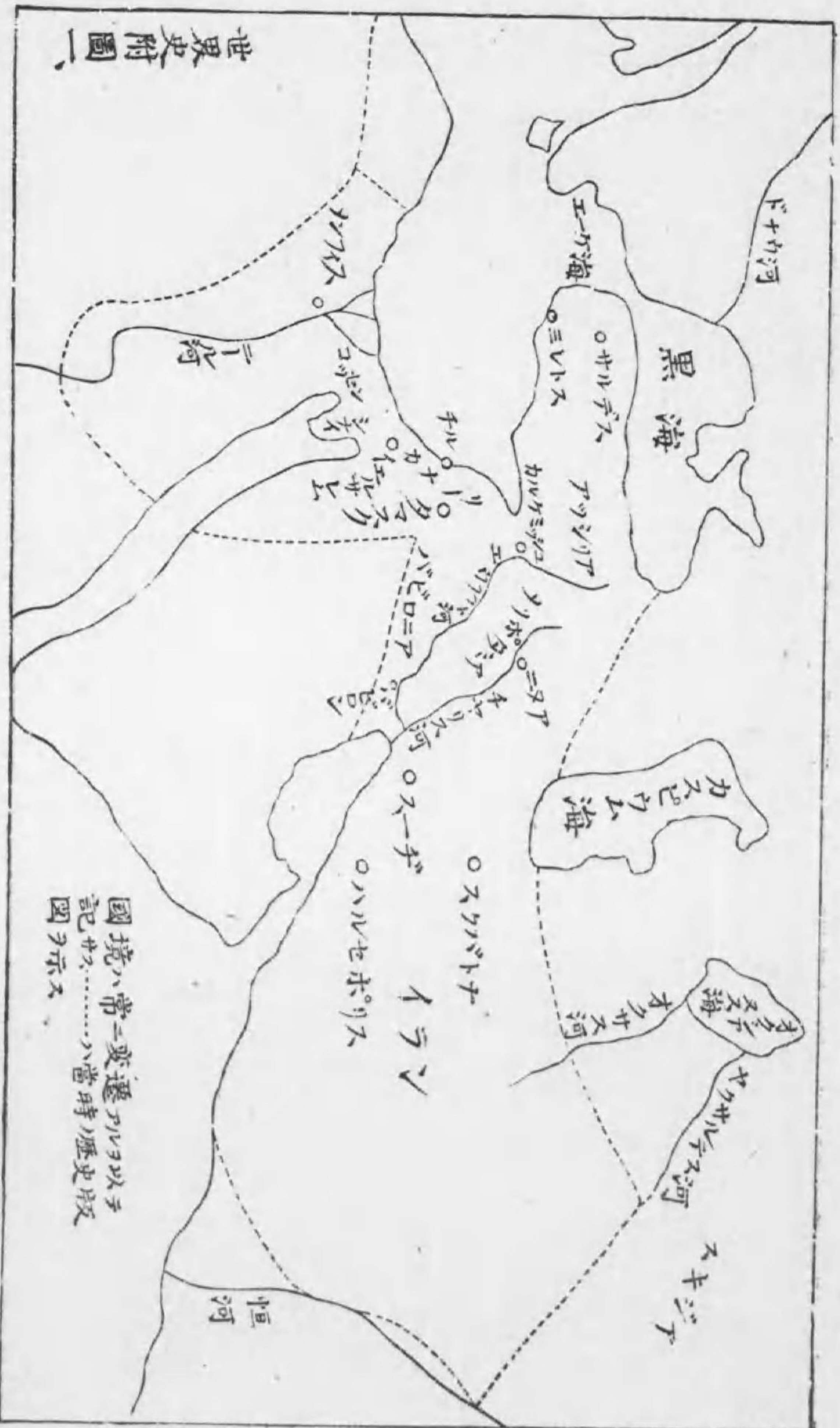
ローマの外國征討は、各地の財貨をローマ市に集注せしめ、ローマの貴族をして奢侈に陥らしめしのみならず、奴隸の輸入によりて、非常なる便利を大資本家に供し、農氏の有する土地の併吞を容易ならしめ、富人貧人の争をして、再ひ隆盛ならしむるに至りたりき。然して此等歸人が、一

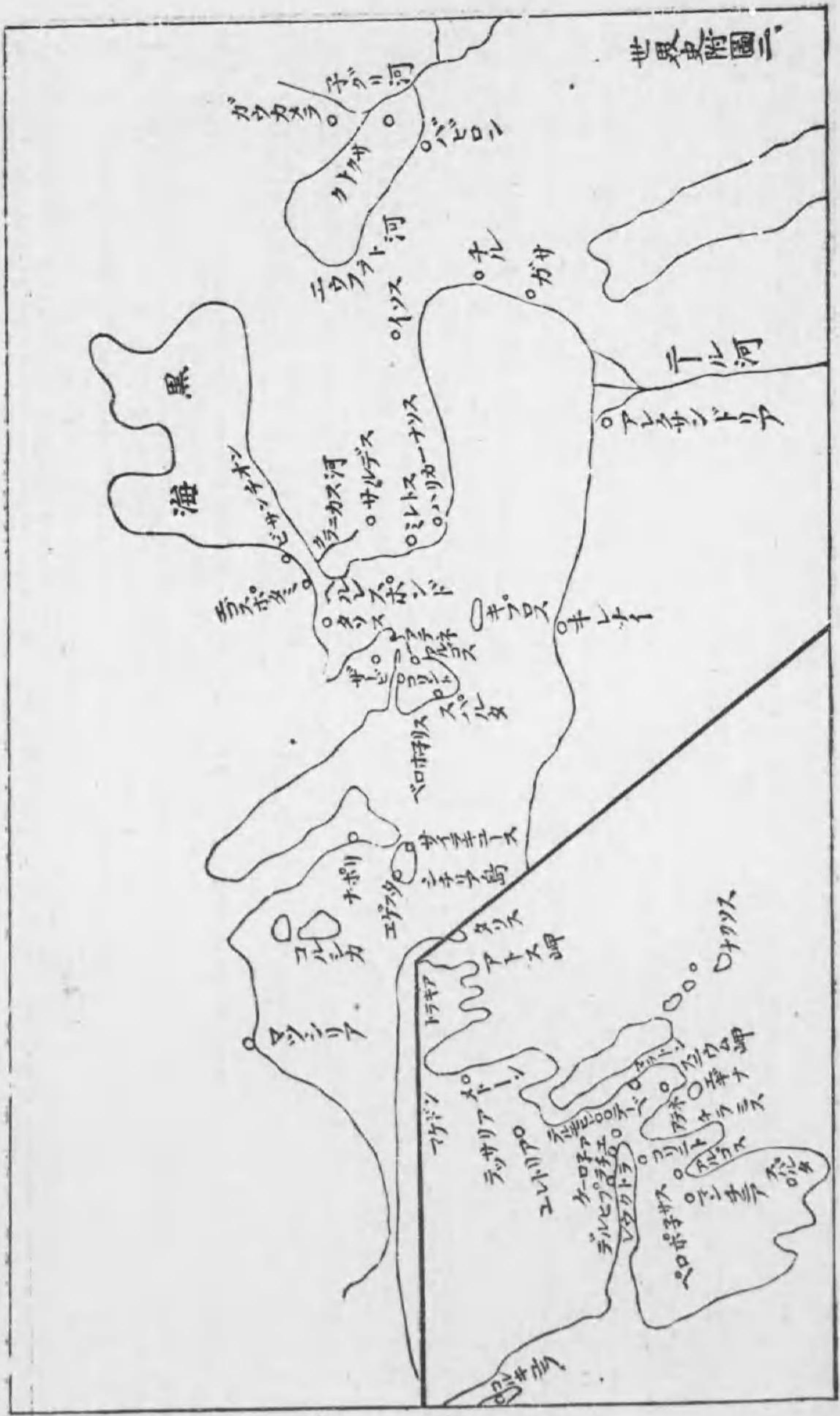
度高地位を得るや、自個の血族を結合して、他の血族に對抗し、常に同族によりて其地位を保たしめんと企てしことは、ローマの社會に一種特別なる階段を現出するに至らしめぬ。（ノビリタス）紀元前百三十三年、チベリウス、グラツクス、農民の日に減して兵力の月に衰ふるを慮り、曾てリシニウスの定めし土地分配法を改正して、一人の所有は五百エーカーを超ゆるを許さしめぬ。然るに彼は、是によりて、ローマの富豪及びイタリアンスの富豪の怒を買ふに至り、遂に其殺すところとなれり、後紀元前百廿二年、ガイウス、グラツクス（チベリウスの弟）トリビュンとなるや、兄の遺志を嗣ぎ、イタリアンスに與ふるにユミチヤ、トリビュンタに出て、投票するの權を以てし、以て土地の分配を完成せんと企てしか、是亦多數の市民及び元老院の反對を受くるところとなり、クラツクスをして自ら其命を失ふの止むを得ざるに至らしめぬ。かくしてクラツクス兄弟の企圖は、共に富豪の反抗によりて、十分なる實行を見る能はざりしといへども、然も猶ほ此等の企圖によりて、ノビリタス及びセネートの權力を縮め、ユミチヤ、トリビュンタの勢力を増加せしむるに功ありしのみならず、イタリアンスをしてローマ市民と同等の權利を請求するの端緒を開くに至らしめぬ。

グラツカス以後、富人貧民の争猶熄まず、ローマンス、イタリアンス、の争漸く盛なりしか、紀元前百〇九年、又ミチア國王位繼承の争あり。マリウス、スルラの二將之を征服して、名聲を博

するに及び、マリウスは貧民に與みし、スルラは富人に黨し、各黨人を卒めて、權勢を争ふに至り、更に武人の争を現出した。紀元前百〇七年、マリウスは貧民黨より撰出せられてコンソルとなりぬ。時にシンプリ、チユートンの二族、アルプ山を越えて、此ローマに侵入し、地を北方に得て、軍役に服せんことを乞ふ。ローマは之を拒んで、屢々ローン河邊に獸ひしが、常に勝つこと能はず。因てマリウスは、貧民及びイタリアンスを集めて、新に軍隊を編成し、遂に之をアクエー、セクスシエーの地に破り、大にローマ人の耳目を驚動せしめたりき。而して此軍隊組織の改正は、貧民をして職を軍隊に得るの途を開かしめ、コンミチア、チンチユリアタをしてコンミチア、トリビユータと全く其趣を同するに至らしめしど雖も、ローマンの感情を害はんとを恐れて、イタリアンスの權利を伸張することを敢てせざりしかば、イタリアンスは、毫も戦後の報償を得ざるを憤り、兵を起して、ローマに抵抗するに至れり。自紀元前九十年至紀元前八十八年)ローマはマリウス、スルラ兩將をイタリア各地に遣し、未だ武器を取らざりし市、及び六十日以内に降服する市は、總て特權を附與すべきを告げて、之を和解し。ついで總てのイタリアンスを三十五のトリブスに分ちて、新政を施行することゝしたり。

此時に當りて武人の争は漸く劇しくなりぬ。紀元前八十八年、ポントス國王ミスリダテスは、アジア諸州とギリシア諸邦を連合して、ローマに抵抗せんと企てたり。マリウス、スルラの二將は





共に此か征討軍の總督たらんことを望みしか、元老院はスルラに委するに此大任を以てしたり。マリウス大に怒りて、貧民と結び、元老院を威嚇し、議員を捕縛し、強て其命令を取消さしめたり。依てスルラはカンパニアのノラに至り、イタリア征討に従事したりしローマの軍隊に投し、之を卒めてローマに叛り、マリウスの軍を破り、元老院を回復し、翌年東方遠征の道に上れり。マリウスは一旦アフリカに逃れたりしか、スルラの東方に向へしを聞き、更に兵を卒めて、本國に入り、紀元前九十八年に至りて、コンソルに上り、盛にスルラの黨與を殺戮したりしか、數週にして死しぬ。マリウス死後、キンナ其後を受け、ポンペイウス軍隊を卒めて、之を助けたりしか既にして、スルラはミスリタデスを破り、巨額の償金を得て本國に叛るに及び、ポンペイウスと連合して、マリウスの黨を壓服し、大に其黨與を殺戮しぬ。依てセルトリウスは部下を卒めて、ポルトガルに走り、全然ローマより獨立したり。是に於て、スルラは、コミチア、トリビユータの權力を制限して、元老院の權力を回復し、富人の資本家より三百人の元老院議員を作り、マリウス黨人の奴隸を放免してローマ市民權を與へ、マリウスに黨せしイタリア人民を、其居住地より放逐したり。かくしてスルラは、全くローマのマリウス黨を屈服して、無限の勢力を有し、ディクタートルとして、無上の幸福を保ちたりしか、紀元前七十八年突然彼は此世を去れり。スルラの死後、ポンペイウスは、軍人黨の主領となりぬ。彼はスルラの死を聞きてイタリア各

地に起れるマリウス黨を征し、ついでポルトガルに於けるセルトリウスを服し、名聲頗る高かりき。元老院は、彼が勢力の日に盛なるを見るに及びて、漸く驚怖の傾向を生ずるに至りぬ。紀元前七十四年、ミスリタタスの争あり。元老院は之を以て、ボンベイウスの競争者を作るべき好時機となし、ルクルスを以て、此か征討の將となし、ついでグラチエーターの争あるに及び、クラッスを以て此か征討の將となしぬ。依てボンベイウスは富人黨を去て貧民黨に入り、クラッスと相結托するに至れり。紀元前七十年、ボンベイウス、クラッスの二人は共にコンスルとなりぬ。彼等は貧民黨の意志を代表し、會てスルラかコミチア、トリビユータに行ひたる制限を廢し、やかに、コミチヤ、トリビユータの決議は、元老院の意志に關係なく實行せらるゝことになり、かくてコミチヤトリビユータは元老院と全く同等のものとして認定せらるゝに至りぬ。後紀元前六十六年、ボンベイウスはルクルスに代りて、ミリダテス遠征の途に上り、翌年大にミスリタタスの軍を破りて、全く之を鎮懾し、エウフラト河以西の地を征服し、略二年間に、レリア、アルメニア、バルチア等、東方の諸國を討平し、廣大なる版圖を占領しぬ。

ボンベイウスが東方を征する間、ローマ市内にありては、舊族等の負債に窮して、謀反を企るありしか、事覺れて悉く刑に處せられぬ。(カチリンの謀反)富人黨の主領たりしキケロは此謀反を未然に防きたる功績により、一時非常なる市民の名聲を博したりしか、貧民黨は彼の富人黨たる

故を以て慍からず、遂に彼を國外に放逐したり。此時に當りてジュリウス、ケーザル(キンナの女婿)はマリウス黨の首領として、民王黨の泰斗と仰かるゝに至れり。彼は博學にして武略あり實に不世出の英傑なりき。

ホンベイウスの東方より返るや、元老院は密に其野心を疑ひ、常に彼の希望を妨害したり。依て紀元前六十年、ボンベイウスは、ケーザル、クラッスと結托して元老院を抑制せんと試みたり是即ち有名なる第一回二頭同盟なりとす。(トリウムビル)翌年ケーザルはコンスルとなりしか、自ら望みて、ガウルの大守となり、五年の期を以て任に赴きぬ。紀元前五十六年三人の連合は再び新にせられ、ケーザルは更に五年を期して、ガウルの大守となり、他の二人はコンゾルとなり。ボンベイウスはイスパニアに、クラッスは東方シリアに大守となりぬ。然るに紀元前五十二年クラッスがかカルヘエーに死するに及びて、ケーザル、ホンベイウスの間は漸く陳遠の傾向を示すに至れり。

クラッスの死するや、ローマの市民は、自らボンベイウス、ケーザルの二黨に分れ、其軋轢の甚しき、ローマ市内に戦争の光景を現出するに至れり。然るに元老院は能く之を鎮壓し得る勢力を有せざりしを以て、終にボンベイウスに結托して、其勢力に依頼することゝなれり。ケーザルは先きにガウルの大守となりて、北方蠻地の經營に勉め、兵馬を動かすこと殆八年、アルプ山地

方の三百余族を征し、遙に海を渡りて、二回ブリテン島を征し、紀元前五十年には、ガウルガウルの酋長ウエルキンゲトリクスを平け、此地を以てローマのプロピンスとなせり。時にケーザルはガウル大守の任期迫りしを以て、販りてコンソルたらんことを望みぬ。然るに元老院は、ボンベイウスの意を受け、辭を設けて之を拒み、ケーザルの任期猶一年を命せしに關らず、突然其辭を解さたり。依てケーザルは大に憤り、翌年部下の精兵を卒つひめてラベンナを出發し、ルビコン河に至り更にローマに進軍せり。ボンベイウスは之を防禦するの暇あらざりしを以て、部兵を卒つひめて東ギリシアに走りたり。ケーザル即ちローマに入り國庫を占有し、當時ローマに反したりしプロピンスを平け、イスバニアに至りて、ボンベイウスの黨興を滅し、轉してギリシアに向ひ、ボンベイウス及び元老院議員等を追撃したり、紀元前四十八年ケーザルは、ファルサルファルサルに於て、ボンベイウスと會し、大に其の軍を破れり。ボンベイウスは逃れてエチプトに走りしか、刺客の爲に舟中に殺されぬ。ケーザル之を知らず、ボンベイウスを追てエチプトに至りしか、ボンベイウスの既に死せるを聞き、エチプト女王クレオパトラの弟ブトレマイオスと不和なるに乗し、ブトレマイオスを殺し、クレオペトラをしてエチプトを支配せしめ、猶進んでローマの反將のアフリカの走れる者を滅して販れり。後二度イスバニアに航してボンベイウスの二子をムンダの地に殺し全くボンベイウスの一家を滅しぬ。

於是ケーザルは自らダイクテートルとなり、次てイムペラートル（故は軍事の總督にして戰爭中のみ之に任するものなりき）となりぬ。かくて彼は總ての國家の大權をば自己の掌中に收めたりき。今やコンミチヤ、トリビユータも、コンミチヤ、ケンチユリアスも、共に只形式的のものとなりぬ。元老院は定員を増して九百人とせられしといへども、只彼の諮詢に答ふる義務を有するのみとなれり。彼は然か自ら稱せざりしも事實上帝王にてありき。彼は此大勢力を以て、長く混鈍の中にありし、ローマの政治上、社會上の状態に一大改革を試みんと企てたり。彼は軍隊の請求人民の志望を調和して社會秩序を維持せしのみならず、屯兵を各プロピンスに送りて、外族の侵入を防ぐと共に之を同化せしめ、又エチプト曆を採用して、ローマ曆を改め、イタリア諸市の權利義務を整理したりき。然るにローマの豪族中には彼の改革の急なるを見て却て喜はざるものあり。又其權勢の大なるを見て之を恐るゝものあり。紀元前四十四年二月十五日ルーベルカル祭に當り、部下の將アントニウスが王冠を彼に捧げて王位につかんと勸むるに及び、反對黨は之を以て共和政を仆し、帝政を始めるものとなし、ブルツス、カシウス等相結んで之を除かんと謀り、紀元前四十四年三月十五日、元老院の議場に於て、ケーザルを刺殺したり。ブルツス、カシウス等は、既にケーザルを刺殺して、十分に元老院、及び、兩コミチヤの勢力を回復し得へしと信したりき。然るに元老院は、猶當時コンソルたりしアントニウスを恐るゝか故に、

又當時軍隊に將としてローマ附近に駐在せしレヒトヅスを恐るゝか故に、斷然たる行動をなすこと能はず、却てケーザルか下したる命令及び遺言の有効なるものなることは議決するに至りたりき。依てブルッス、カシウス等は禍の己に及はんことを恐れて、曾てケーザルが彼等を任命したりし土地に向て去りぬ。時にケーザルの甥オクタビウスは、ケーザルの遺言によりて、ケーザルの後を襲さしか、レビヅスは彼に勸めて、アントニウスと結はしめ、紀元前四十三年、アントニウス、レヒグス、オクタビウスの三人は、第二回三頭同盟を組織したり。ついで彼等はギリシアに潜伏したりし、フルッス、カシウス等を攻めて、之をフェリッピン殺し、ローマの全領土を二分して、各其一分を支配することゝなせり。即ちオクタビウスは西方諸國を得、アントニウスは東方諸國を取り、レビヅスはアフリカを領することゝなりぬ。然るに其後、レビヅスはシチリアを得んとして、二人の怨を招き、却てアフリカを失ふに至りしかば、ローマの全領土は、オクタビウス、アレトニウス二人の手に分たることゝなりぬ。是實にヘレチス文明波及の世界か、ローマ本國と分るゝの始にして、又他日東西ローマの分るゝ所以なりき。やがてアントニウスは、アジアを経てエチプトに入り、大にアフリカの地を經營せんと企しか、彼はケーザルと全しく女王クレオパトラの巧言に迷ひ、クレオパトラの子に贈るにローマのプロピンスを以てし、オクタビウスに送るに絶交の書を以てせしのみならず、遂にオクタビウスの妹なる其妻を離縁するに至

れり。是に於てオクタビウスは、アフリカに航し、アレクサンドリアに至り、紀元前三十一年、アクチウムの海戦に依て、大にアントニウスの軍を破り、エチプトを以て、ローマのプロピンスとなしぬ。是に於て彼は明かにローマ全領土の主人となりぬ彼はケーザルの例に従てデクレーターとなり、イムペラトールとなり、遂にローマ帝政の基を開きぬ。

其四 ローマ帝國

ローマ共和政府は、富人貧人の争につぐに武人の争を以てし、内にありては、擾亂常に絶えざりに關らず、外にありては、能く四方を征服し、大に其領土を擴張するを得、終に地中海沿岸の諸獨立國をは悉くローマの版圖に合するに至れり。即ちギリシアよりエウフラト河に至り、エチプトよりドナウ河に至る、ヘレチス文化波及世界の大部分、アフリカ北海岸なるケルツ民族の諸邦、ライン河の西方に住せるゲルマニ民族の諸地等は、概ちローマの併呑するところとなりぬ。かくしてローマは此等文明諸國の中心となり、また主人となれり。

ローマは往古よりして既に著るしき文化を有したりき。其の古代の建築物及び水道工事の如きは、明かに其文化の高かりしを示すものといふべし。然れどもローマの文化は單に物質的に止りたりき。もしろれ智力的文化に至りては、未だ之を以てギリシアに比し得きものに非りき。是を以てローマが一且ギリシアを征服するに及びては、盛んに其文化の輸入を試みるに至れり。ローマ上流

の士は競ふてギリシア文化の輸入に勉め、ローマの先覺者等はこのギリシア的ローマの文化を以て世界を感化せんと企るに至れり。オクタビウスの出てたるは、實に此傾向の漸く盛なるの時なりしなり。彼は明かにこの時勢を洞察して、茲にローマの帝政を開くに至りぬ。ローマ帝政の興起は決して偶然に非りき。

紀元前二十七年、ローマの元老院は、オクタビウスに贈くるにアウグスツス（至高の意、至尊の義）の尊號を以てしたり。史家は通常、此年を以て帝政の始となす。彼は此年、元老院の權利を限り、センソルの官を廢し、總ての高職を自己の掌中に收め、ローマ全國をインベリアル、プロビンスとセネトリアル、プロビンスとの二部に分ちて、主要の土地を自己の配下に屬せしめ、常備軍を設け、本國を十四レギオン、イタリアを十一レギオンに別ら、又親衛兵を置き、プレフェクチ、プレトリオをして之を指揮せしめ、國庫を元老院より奪ひ、之を大藏に收めて直轄となせり。是に於て元老院及びコミチアは全くアウグスツスの指揮、命令を受くに至り、アウグスツスは明かに皇帝の地位を保つに至りぬ。今やローマの人民は其權利を舉げて總て之を一人の掌中に移しぬ。ローマ帝國の基礎は、かくの如くにして確立したり。オクタビウスは之より孜々として意を國內の治平に傾け、プロビンスの富をローマ市に回收し、其繁榮を謀りたりしかは、文藝、美術は蔚然として興り、非常なる盛觀を現出するに至りぬ。爾後、幾多の皇帝は彼に續きしといへども、

文運の隆盛は、獨りコンモドスの時代を除きて、未だ彼の時代に比較すべきものを見ざりき。

ローマは世界の總てを擧げて、ローマ化せんと企てたり。然れども是決して容易の事業に非りき。歐洲の中央部に住したりしゲルマニ民族は、常にローマの國境を侵し、東方のバルチア王國は、屢々ローマの領土に寇したり。アウクスツスは、大に之を憂ひ、絶えず親征して、ゲルマニ民族を破り、ついで、チベリウス、ドルスス等、切りに要塞をドナウ、ライン兩河の附近に設けて、之に抵抗せしも、更に効果を奏すること能はざりき。バルスの時に及び、アルミニウス、之か討伐を謀り、終に之をトイドブルクの森林中に破りたりしか、バルスは到底之を征服するの難事なるを察し、ライン、ドナウ兩河の沿岸の要塞を嚴にし、長城を築きて、其侵入に備へ、又バルチヤ、王國に對して、エウフラト、チグリス兩河附近又屯營を設け、是を以てローマの國境と定めたりき。紀元三世紀の半頃、ペルシア、サ、ニデス王朝、興りてバルチアに代るに及び、古代ペルシアの文明は再び東方諸國に勢力を逞ふするに至り、ローマ文化波及の上に至大の影響を與ふるに至りぬ。

ローマの統一的企圖は、宗教上にも實現せられざるを得ざりき。ローマはローマの世界に宗教上の統一を要したりき。然るに當時ローマの世界に行はれたりし宗教は何れも統一的性質を欠きたりき。エチプトの拜物教、ペルシアの二元教、ヘブライの一神教、ギリシアの神話、此等は皆各

特種の性質を有する宗教にして、ローマが領有する諸國に通して、之を普及せんことは甚だ難きことなりしなり。是に於てかローマは此等諸宗教の儀式を折衷して、更に一種の宗教を作らんと試みたり、然れども、ローマ帝國の人心か、かかる宗教によりて支配せられんことは、もとより望み得へきに非りき。而して此時に當りて、世界的なる耶蘇教の興起したるは、ローマの宗教的統一の企圖に關しては、極めて好都合のことにてありき。

ユダヤ人は、ヘレチス文化波及の時代に在りては、概ねシリア王の配下に屬したりしが、紀元前二世紀の未よりして獨立の形勢を保つに至り、イエルザレム市を中心として、東方の各地に住したりき。然れどもユダヤ人は、往古より、神によりて世界の他民族より聖別せられたるものなりとの僻見を固持せしか故に、他民族と交際する如きは、寧ろ彼等の欲する所に非りき。紀元六世紀の頃、ローマか之を其領土内に編入し、之に課税するに及び、彼等は屢々之を拒みて、劇烈なる抵抗を試るに至れり。是に於てローマの諸帝は大にユダヤ人を嫉み、チツスはイエルザレムを圍みて之を破毀し、(紀元七十年)ハドリアンは全く之を滅して其民を諸國に分散せしめたり。(紀元百三十五年 此の如くユダヤ人は、ローマ帝政の下に、實に悲惨なる境遇に陥らざる可らざりき。是より先き、ユダヤの幾多の豫言者等は、ユダヤ人民に告ぐるに、他日ダビトの子孫、救世者として此世に出て、ユダヤ人を救ひて、大國を地上に建設すへきを以てしたりき。ユダヤ人は

かゝる悲惨の境遇にありて、かゝる救世者の出てんことを望むこと甚だ切なりき。而してチベリウスの代、(イエスは紀元前六年、若くは四年に生れたるもの、如し)ベツレヘムに生れたるイエスは、自己を以て、往昔豫言者か語りしところの救世主なりと稱し、ユダヤ人の有する國民的熱望を轉して、之を宗教の分野に用ひ、深遠なる教理と、高傑なる品性とを以て、ユダヤ民族を指導し、神に對しては、万民皆兄弟にして國土民族の差別なきを説き、從來ユダヤ人か抱きたりし僻見を破毀したり。此を以てユダヤ人は深くイエスを憎み、彼を目するに偽救世主を以てし、終に彼を磔上に殺すに至れり。然るに、後使徒パウルの出るに及び、彼は耶蘇教を以て、只にユダヤ人のみならず、ユダヤ以外の民族に廣めんと欲し、ギリシア哲學の用語を流用し、哲理によりて其教義を解説し、古來ギリシア、ローマの哲學者等か、十分に説明する能はざりし形而上の問題に關して、明瞭なる解答を與へたりき。かくの如くにして耶蘇教は自然ギリシア文化と結合を生ずるに至り、ひいてローマ市民の間にも、障害なく廣布せらるゝ傾向を顯出するに至りぬ。武力によりてヘレン人に勝ちたるローマ人は、文化によりてヘレン人に滅されぬ。ヘレチス文化輸入の結果は一時ローマ人をして、文藝、美術の盛時を樂しましむるを得たりしといへども、既に

してローマ市民に特有なる勇悍の氣風は去りて、ギリシアの終りに目撃したる柔弱の風習は來りぬ。ローマ人は、上帝王より始め、下度民の末に至るまで、皆彼等の祖先か有したりし勇烈を忘

却して、腐敗せるヘレネス文化を渴仰し、隱逸を悦ぶの傾向を生ずるに至れり。今や彼等都人士は總て國境の防備と地方軍隊の將士に委ねて、一時の平安を伴伴するに汲々たりき。是に於てか、外國にありて、比較的ローマ都人士の氣風に感染することを免れたる軍隊の將士等は、自ら自己の勢力を増長するに至り、終に彼等は部下の兵士の力によりて皇帝に推舉せらるゝ場合に進みぬかくして紀元百七十三年より全二百八十四年に至る百有年間、ローマには將士帝皇の時代を見るに至りぬ。實にローマ國勢の衰運は此時に兆せしものといふべきなり。

紀元二百八十四年、ゲオクレシアンが帝位に即くに及び、彼はこの衰運に傾きつゝある國勢を恢復して、帝國一統の基礎を堅固ならしめんと欲し、アウグスタスか作りたる帝國の組織に加ふるに、一大變革を以てしたり。彼は全然元老院が政治上に於ける權利を奪ひ、更にプロビンスを小分して百一となし、將士か勢力を得るの道を防ぎ、全國を二分し二人のカイゼルをして之を支配せしめ、自己はニコメヂヤに移りて、専ら東方の經營に當りたりき。彼は帝國を四區に分ち、四王を撰ひて各區を統轄せしめ、自ら此等を總理して帝國の面目を一新せんどの計劃を抱持したりしが、彼の死するに及び、王位を奪ふもの六人の多きに及び、彼の計畫は全く行はるゝに至らざりき。然るに紀元三百二十三年、コンスタンチンが、耶蘇教徒の力によりて、ローマを一統し、帝位を占むるに及び、彼はテオクレシアンの遺業を繼承し、都をビザンチオンに移し、之をコンス

タンチノーブル(コンスタンチノポリス)の轉訛にしてコンスタンチンの都の義なりと名け、全國を四プロファクト、百十七プロビンスに分ち、文武の兩權を分割したり。而して彼の改革中最も注目すべきものは、從來のローマ宗教を廢して、耶蘇教を採用したることなりき。彼は耶蘇教上に生したる各種の議論を統一して、宗教上の爭論を防かんと欲し、紀元三百二十五年、ニケーアの地に宗教大會を開き、各地監督(ビショップ)の討論の末、所謂ニケーア信經を決定したり。彼はまた命を下して耶蘇教會の僧侶一般に課税の義務を免除し、アレクサンドリア、アンチオキア、コンスタンチノーブル、ローマ四所の監督を以て主教(パトリアーク)となし、他監督の行動を監理するの權利を許可したり。かくして耶蘇教はローマ帝國內に鞏固なる基礎を作るに至りぬ。

コンスタンチンの熱心なる改革は、正に衰運に向つつゝありしローマの運命に向て、少からざる興奮を與へ得たりしことは、明白なる事實にてありき。然れどもローマの腐敗は、既に其膏肓に達したりしなり。腐敗せしローマ人は遂に外敵を抗し得べき力を回復すること能はざりき。ゲルマニ民族の一派たるゴート族か、蒙古人に窮追せられて、都をロトマに求むるに當り、バレンスはローマの兵力の能く彼等の侵入を防ぎ得ざるを見、彼等の請求を許して、之を國內に移住せしめぬ。是れ實にゲルマニ蕃族がローマ國內に入るの始にして、ついで東ゴート族も亦請ふてローマ國內に移るに至り、ローマ國內投亂の勢をして更に益々劇甚ならしめぬ。

紀元三百七十九年、セオドンヌス帝位に上るや、彼の其臣下に令して、悉く耶蘇教に改宗せしめ固く他教の信仰を禁し、尋てゴート民族を以て自己の兵伍に編入し、以て國內の治平を計らんと試みたりき。然れども是よりローマの兵權は、漸くゴート民族の掌中に陥るの基を開くに至りぬ。かくして紀元三百九十五年、セオドレウスの二子、アルカヂウス、ホノリウス、ローマ全國を二分し、一方はコンスタンチノーブルによりて東ローマ帝國と稱し、一方はローマ（後ラウエンナに移れり）によりて西ローマ帝國を稱するに當りては、皇帝の權力既に滅び、ゴートの長アラリックの如きは、部族を率ゐてイタリア全國を蹂躪するの有様となれり。爾來西羅馬帝國は全く蕃族衝争の地と變し、皇帝は只名同を維持するのみに過ぎざりしか。紀元四百七十六年、元老院はゲルマニ民族の會長たりしオドワケルの請を容れて、西ローマ帝國は最早帝王を置くの必要なきを告示し、最後の王、ミユルス、アウグスツスを廢せり。東ローマ皇帝エノはオトワケルに與ふる貴族の稱號を以てし、彼をしてイタリア地方の政治を處理せしめぬ、是に於て西ローマ帝國は全く滅亡せり。

中世史

第一章 人類の移轉

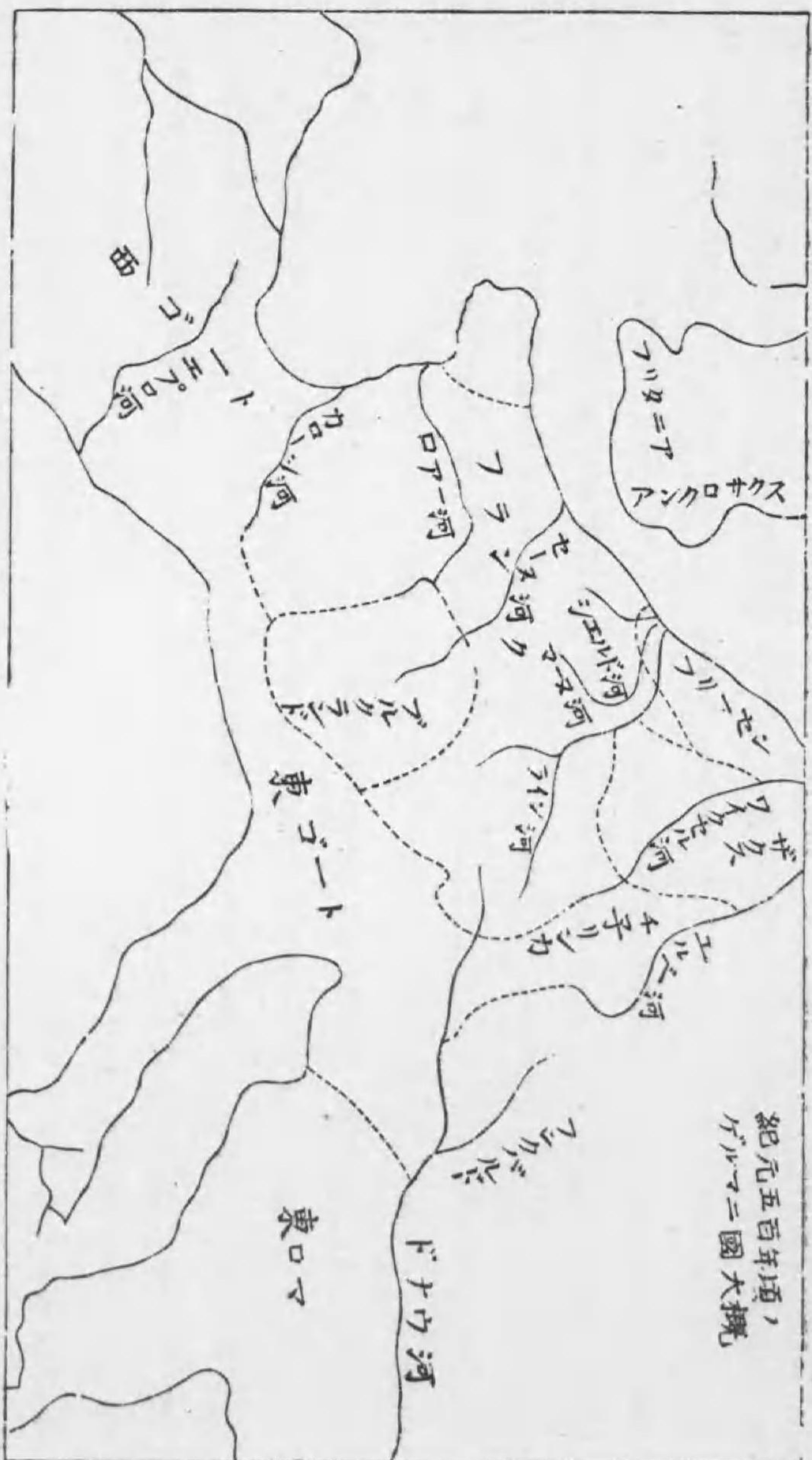
其一 ゲルマニ民族諸國の勃興

ゲルマニ民族諸國の勃興

東ライン河より西ワイクセル河に至り、南ドナウ河より北北海及び東海に至る地は、ゲルマニ民族（ゲルマニはケルト語にして隣人の義なり）の住地にして、ローマ人は之をゲルマニアと稱したりき。始め此等民族は、ライン中流の森林沼澤多き地に住したりしか、既にして土地の不毛と人口の増殖とに困むに至り、遂に各地に散在して茲に相別るゝに至れり。故に、紀元四世紀の頃には、アラマン族は、ツエーランドを略取してカリヤに侵入し、フランク族は、北方カリヤに移住し、サクス族は、北海沿岸に擴張して遂にブリタニアに渡航し、ゴード族は、黒海ドナウ河の地方に行進し即ち東西に分れ、西は、ダキヤに居る、パンダル族、ブルグント族等も亦ドナウ河及ひライン河上流の地方に遷居したり。然るに既にして紀元三百七十五年、蒙古族なるフン族の、突然中央亞細亞より歐洲に侵入し、オルガ河を渡りて東ゴートの部族を征服し、ダキヤに亂入して西ゴートの部落を脅迫し、尙進んで獨逸の内地に及ふあり、ゲルマニ民族をして、更に其銳鋒をさけて、平穩なる居住地を求むの必要に陥らしめぬ。而して當時東ローマ皇帝たりしアルカヂウカ、西コ

ド部族の争亂を憂ひ、其王アラリックを誘て、イタリアの地に向はしむるに及び、西ローマ皇帝ホノリウスは、其の蹂躪を防かんとして、ブリタニア及びカリヤに於けるローマの軍隊を呼返したり。是に於てケルマニ民族は、悉くイタリアに向て進入し來り、パンタル族は、ライン河を渡りてガリアに入り、ブルクント族は、ライン河に沿て南ガリアに進み、フランク族は、遙にセーヌ河の沿岸に及びぬ。かくして紀元四百七十五年、西ローマ帝國の滅ひし頃には、舊西ローマ帝國の領土内には、幾多のゲルマニ族の國の興起せるものあるを見たり。即ち紀元五百年の交に於ては

- (イ) イスバニア及び南西カリヤには西ゴートあり。
 - (ロ) 南東ガリアにはブルグントあり。
 - (ハ) 北ガリア及び西獨逸にはフランクあり。
 - (ニ) 中央獨逸にはチユーリングあり。
 - (ホ) 東獨逸にはラングバルドあり。
 - (ヘ) イタリア及びイリ、アには東ゴートあり。
 - (ド) 東ブリタニアにはアングル、サクスあり。
 - (チ) 北アフリカにはバンダルありき。
- 而して此等の中、其最盛なりしものをフランクとなす。



其二、フランク王國

フランク
王國

紀元五世紀の半頃、フランク族は、ライン下流の地よりマース河及びシエルト河の地方に横り居たりしか、サリク、フランク族の長、フロドウイヒの出るに及び、切に近隣の土地を征服して其領土を廣め、紀元四百八十一年には、ガリアを侵して、ローマの知事、シアグリウスをソアン、の地に破り、紀元四百九十六年には、アラマン族をグウーリヒの地に破り、紀元五百七年には、西ゴート族をブーヨンの地に破り、其領土をローア河の彼方にまで擴張し、又自ら洗禮を受けて耶蘇教徒となり、耶蘇教徒等の力を藉りて其部族を一統し、遂に盛なる一王國を建設したり。是れ即ち、メロビンカ朝の始祖なり。フロドウイヒの死するや、其子四人、各領地を分ち、各自己の領土によりて外族に當り、更に其領土の擴張に勉め、紀元六世紀の半頃には、フランク王國の領土は、北はアルプ山より南海峽に至り、東エルベ河より西ガロン河に至る大境域を含むこととなれり。然るに此後不幸にして内には争乱常に絶えず、外にはアラビヤ人の國境を侵すあり、爲に王權大に衰へ、紀元六百十三年、フロタール二世再び全國を一統せしと雖も、最早只名目を維持するに過ぎざりき。而して此間に於て權力を養成したるものはマヨル、ドームスなりき。マヨル、ドームスは、もとはた王家の執事に過ぎず、隨て政治上の權力を有するものに非りき。然るに屢々王の代理者として議會に出て、は、議長の席をとり、軍隊に出て、は、將軍の地位を占

ひるに及び、彼は自ら政治上、并に兵力上有力なるものとなるに至り。而して紀元六百八十七年、テストリの戦に大功を奏せしより以來、マヨル、ドームスの襲は、ビビン家の世襲すべきこと、定め至れり。やかてビビンの子、カロロカ其後を受るに至りて、マヨル、ドームスの權は實に其項上に達したりき。

此時に當て、フランク王國に對するアラビヤ人の壓迫は實に甚しく、此の救済の策を講ずるはカロロに取りて最大急務なりき。彼は早く之を察知し先づ舊來襲來りしフランク軍隊の組織に關して、大なる改革を斷行したり。凡そ古來ゲルマニ民族の習慣によれば、民族の他民族の土地を征服し、或は擴張せる場合には、族長は其土地を以て己の所有となし、他の幾分を割きて之を功者に分與し、以て世襲財産たらしめ、(アロッド) 又更に自己の所有地を分ちて之を其信用する人々に托し、其使用權を與へて(ベチフェイス) 以て己に隸屬せしむ。(ワツサル) 而して此等の人々は戰事には王に従ひ、平時には朝政をどるの義務を負ふものとなりき。

然れども此組織は領土の擴張するに従て、漸く強力なる軍隊を作るに適應するものとなりたりき。是を以てカロロは、この二の習慣を結合して、或多數の人々に土地使用權を賦與し、之をワツサルとなし、騎馬を養ひ之を訓練するの義務を負はしめ、以て強兵の實を擧げんと計りたり。かくて紀元七百三十二年、彼はこの訓練せる兵士を率ゐて、アラビヤ人の軍に對抗し、遂に大に之を

ツ、ル、及ひ。ボ、ア、チ、エ、の地に破り、全然之を耶蘇教國以外に驅逐したり。是に依て、彼はマルテル(樵)の稱號を得るに至りぬ。

イタリヤは其後常に擾亂の中にありき。この擾亂の中にありし法皇は常に蕃族の壓迫に苦しみたりき。就中彼の苦みたる一アラビヤ人なりき。彼は今カロロの強勢なるを見て、彼と同盟して耶蘇教國を異教徒の迫害より脱せしめんと考へぬ。而して法皇との同盟は、カロロに取りては、其勢力をして益堅固ならしむるに利益あり。故に兩者の同盟は直ちに成立しぬ。かくして紀元七百五十一年、カロロの子、小ビビンカメロピンカ朝の最後の王、シルデソツク三世を廢して寺院に幽閉するに當り、法皇カザリアは、其行爲を是認し、王冠をビビンに授けたり。是實にカロリンガ朝の始なりきついで紀元七百五十六年、ブルグンド族の法皇領を侵すに及び、ビビンは、直にイタリヤに至り、法皇を助けてブルグンドを征し、功を以てローマのバトリシアンとなれり。ビビンの死後、其二子、カロロマン及びカロロ王國を分領せしか、兄カロロマン早く死せしを以て、カロロは全王國を統治するに至れり。是有名なるカロロ大帝なり。(自紀元七百六十八年—至全八百十四年)

帝は賢明にして大志ありき。彼は先フランクバルドを滅し、ついでサクスを破り、ブリタンヤ及びエスバニヤ、を除きては、悉く西方エプロの地を定め、エスバニヤ、イタリヤ地方を征し、幾

多のマルクを各地に設立し、マルクグラフを置いて、スラブ、デーン諸族の侵入に備へたり。かくてアングロサクソン王エクベルトの如き、身を低ふして彼に敬意を表する有様にて、其勢威甚た盛なりき。故に紀元八百年正月、法皇レオ三世は、ローマのペーテル寺院に於て、彼にローマ皇帝の冠を興へローマ皇帝レオカロロアウクスツスと稱せしめぬ。カリフ、ハーロン アルラシツド以下東方諸王は、特に使を遣し、方物を送りて之を祝しぬ。今や彼は舊西ローマ皇帝の地位に代り、彼の勢力は總てのカドリツク教國全部の主權を握るもの、如くなりき。實に彼の領土は南エプロ河より北アイデル河に至る、西は大西洋より東エルベ河及びタイス河に至る、西は大西洋より東エルベ河及びタイス河に至り、而してイタリヤの大半及びシチリヤ、コルシカ、又其領土に屬せり。王は全國統一の考より法律を劃一ならしめんと欲し、舊來各部族に行はれたる習慣法レツクス(假令はレツクス、サクソヌム、レツクス、アラマノルムの類)を廢して更に新法を發布したり。(カピチユリア)又フランク民族の習慣の改良と、教育の發達とに心を用ひ、耶蘇教の普及を計り、學校を設置したり、又文學技術を奨励し、アルクイン、アインハルド、パウルデヤコス以下知名の學者を宮中に集め、幾多の建築物を各處に設立したり、又農業、商業に意を注ぎ、ライン河の水道、アインツの橋梁の大工事を起したりき。

カロロ大帝の死後、子ルイス、位を受けしか、其後ルイスは全國を三子、ロタール、ビビン、ル

イスに分與したり。然るに末子カロロの生るゝに及び、三子の領土の一部を削りて之を末子カロロに與へんとせしより、三子各意平かならず、遂に父ルイスを幽閉するに至れり。既にして父ルイス死し、ついでビビンまた没せしといへども、三子の争は尙止まず、紀元八百四十二年に至り、ベルタンの地に於て和議を結び、ロタールは中フランク(イタリア)を領して西ローマの帝號を稱し、カロロは西フランク(フランス)を領し、ルイスは東フランク(ドイツ)を領することになりて其局を結ひたり。是れ實に今日のフランス、ドイツの相分るゝ始なりとす。

其三、アラビア人の勃興

アラビア人の勃興

耶蘇教カゲルマニ民族の間に廣布せられつゝありし間に、マホメット教は多くの東洋國民を感化して、更に西洋にも其勢力を及ぼすに至りたり。而して此宗教はアラビア人の創立にかゝれり。此新宗教の創立者は實にマホメットなりき。

マホメットは紀元五百七十一年アラビアのメツカに生る。彼はクレイイシユ族の一人なりき。彼は幼にして父母を失ひ、早く商業に従事しぬ。彼は之に依て多くユタヤ人及びクリスト教國の人に接するの機會を得たり。彼は後に富有なる一寡婦カチシキに婚したりしか、四十歳の頃に至り深山に隠れぬ。而して彼はこの新宗教を創立したりき。此新宗教(イスラム)の要點は、神は只一なり。マホメットは其豫言者なり。信者(モスレミン)は祈禱し、斷食し、巡禮もする義務あり。最

高の徳は正義なり、運命を信し、樂園に永生を得ることを知るへしといふにあり。彼は總ての新宗教の創立者の如く同族の迫害を蒙りぬ。依て紀元六百廿二年彼はメデナの地に歩りぬ。(之をヘヂユラ)と稱す。後再びメツカに皈り、メツカ古來の神カアバを以て神聖なる神となし、アラビア人を心服せしめ、將に大に外國の傳道に取かゝらんとせしか、紀元六百三十二年病を以て死せり。

マホメットの繼嗣をカリフといふ。マホメット死後、アブヘクル、オーマル、オスマン、アリ等、相繼てカリフとなる。皆マホメットの遺志をつき、新宗教の弘布に勉め、清國に侵入して、納貢、コラーンマホメット教の經典なり、創載三者の中其の一を撰はしむ。就中、オーマルの時代は、アラビヤ人の勢力が東洋に最も擴張せられし時にして、新ベルシア國を破り、東ローマ帝國よりシリア、パレスチナを離反せしめ、アフリカにカイロ、バストラの兩市を建設したりなど注目すべきこと多し。

オミアッド家(自紀元六百六十一年—至全七百四年)の起るに及び、其居をメデナよりダマスカに移し、以て東ローマ帝國に抗し、西地中海の諸島を下し、東印度を蠶食せり。而して紀元六百九十七年には、將軍マース、アフリカの沿岸を平けてカルタゴを滅し、屬將タリクは遙にイスパニアに渡りジベルアル、タリクス今のジブラルタルの山(今のジブラルタル)附近に陣營を置き、西コードに對峙

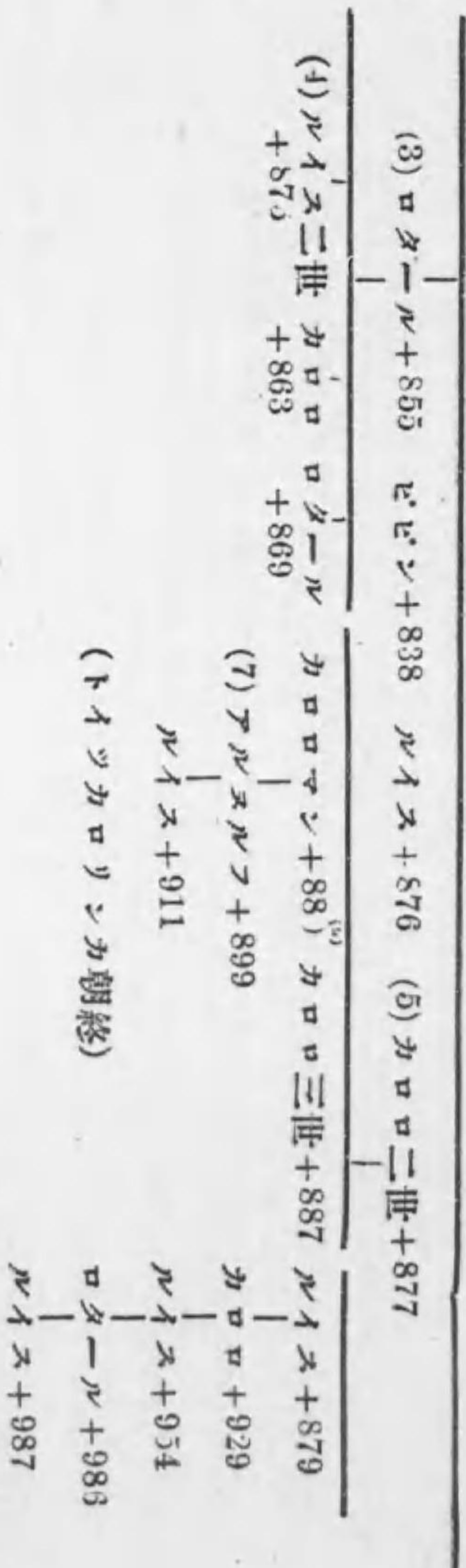
し、遂にクセレスドラフロントラの戦に於て、大に西コート王ロ德里クを破り、全くイスパニアを占領したり。タリクは是よりイタリアカリア地方を征して、陸路本國に至らんとし、ビレニース山を越て、フランク王國の領土に侵入せしか、カロロ、マルテルの爲に破る所となり、其意志を果すこと能はざりき。かくしてオ、アット家の末に於ては、アラヒアの領土は非常に尨大なる境域に達し、實に、アラビア海岸及びインドよりカウカサス迄の西方アジアの巨部、アフリカの北海岸全体、ビレニース半島の大部分、南方アランタのナルボナ及びサルヂニア、コルシカ諸島を含めり、然るに紀元七百五十五年カリフの繼嗣につきて争起り、マホメットの叔父アバスの子孫オミアット家を滅し、バクタットによりてアバシット家を創めたり。されどオミアット家のアブデルラーマンは、イスバニアに歩り、ユルドフによりてオミアット家を再興したり。是に於て廣大なるアラビヤの大領土は、東西二部に分るゝに至り、國勢漸く衰連に向ひ、屢々セルジュツクトルコ人の攻むる所となりしか、遂に十一世の頃に至りて、全く覆滅せられりぬ。

其四 神聖ローマ帝國

カロリツカ朝系譜

(1) カロロ大帝 + 814

(2) ルイヌ + 840



(フランク朝終)

フランク王國は、紀元八百四十二年、ベルダンの條約によりて、東フランク、西フランク、イタリア(今のロートリンゲン地方をも含む)の三部に分れたりしか、其後三國の争は猶止まず、イタリアにありては、ロタールの死するに及び、其領土は、ニチルイス二世及びカロロの分つ所となり、西フランク國にありては、切に國境を争ふて相和せざりしか、紀元八百七十年に至り、マルゼンの條約を結ひて其終を結ぶに至れり。即ち此條約によりて、兩フランク國の境界は、大略現在の獨佛の如く定り(オランダ、ベルギイを含みて)、ロタールの長子は、イタリアを領して皇

帝の號を稱すること、決しぬ。されど、フランク王國は此等の争論の際に於て、アラビヤ人及北人の少からざる侵害を蒙りたりき。而して北人の侵害は最も注目すべき事件に屬せり。

アラビヤ人は、先きにアバシッド、オミヤット兩カリフ分立以來、其勢漸く衰運に傾き、アバシット家はバクダットによりてカリフの位地を持続せしとはいへど、既に統一の力を有せざりき。是を以て各地の知事等は各獨立を企て、紀元九世紀の頃にはアフリカの地にアグラバイト家の興起を見るに至りぬ。而して此新朝は新興の勢力を振て、先づ當時東ローマ帝の手にありしシチリヤを奪ひ、遂にイタリア大陸に渡り來りて、ナポリを征し、紀元八百四十三年にはローマに入りて掠奪を試みるに至りぬ。かくしてイタリアはアラビヤ人によりて少からざる領土を奪はれたり。

北方ヨーロッパに住せしゲルマニ民族、デーン、ノルマン、ルッス等の諸民族を總稱して之を北人といへり。彼等は總て勇悍なる航海者にして、航海の術に就ては、特別なる技能を有したりき。彼等は小舟を以て大海を渡り、至る所の海岸に上陸して要塞を築き、近隣の人民を抄掠して海賊的生活を營みたりき。是を以て紀元二世紀の半以來、彼等は北方諸國の非常なる恐怖を受くるに至れり。殊に其關係の密接なりしはイギリス及びフランクなりき。イギリスと北方との關係は甚だ古く、遠くローマの時代より、デーン人は來りて海岸を抄掠し、或は内地に移住を企てたり。

り。而して紀元八百二十七年、サクス族なるエクバルトカイギリスを一統せし頃といへども、彼等の勢は尙盛なるものにして、サクス朝は最もデーン人を恐れ、アルフレット大王の如き、エセルレット王の如き、皆屢々彼等を虐殺して、其勢力を失はしめんと試みたり。然れどもサクス朝は遂に全く彼等を屈服せしめ居ざりしのみならず、却て彼等の反抗を甚しくし、紀元一千十七年には、デーン人の會長カニユートは大軍を率ゐてイギリスに侵入し、サクス朝を仆して之に代るに至れり。かくしてイギリスは一時全く北人の有に歸したりき。フランクも殆どイギリスと全しく、彼等の北海岸を抄掠せしは幾度なるを知らず、紀元八百〇一年、デーンの會長、コットフリードは大舉してフリースフントを侵し、カロロマン大帝の兵に破られしより、暫らく其侵入を止めたりしか、帝死し帝國二分し其勢力を失ふに及び、デーン人はまた來りてバンプルクを略し、ロアーの河岸に進み、遂にセーヌ河岸に達するに至り、紀元八百四十五年には、デーンの會長ジグフリードは數萬の兵を率ゐ、來りてパリの市街を圍みたり。依てパリ人は彼を欺きてブルグントの地に向はしめ、辛うして其災害を免れぬ。然るに紀元九百一年、ノルマンの會長ロルフの旅人を率ゐて、セーヌ河畔に現はるゝに及びては、カロロ王は、之を防ぐの策に窮し、ノルマンディーの一地を割與して、自己のワツサルたらしめぬ。かくしてフランク國は此人の爲に幾多の領土を失ひたり。

メーレンセン條約後、兩フランク國及びイタリアの形勢を見るに、イタリアはアラビア人の勢力によりて、少からざる土地を奪はれし以來、漸く衰運に向ひて、皇帝は種々なる特權を賦與し、ツサル及び市府を使役せざる可らず、皇帝の品位は事實上無意義のものとなるに至りぬ。而て兩フランク國はかくイタリア皇帝の事實上無意義なるを見、法皇を助けてアラヒア人に當り、其功を以て皇帝の地位を自己の掌中に移さんと試み、紀元八百七十五年、皇帝ロタールの子、レウス二世の死するに及び、西フランク王カロロは遂に皇帝の稱號を有するに至れり。然れども西フランク國はカロロの後継者の代となりては、アラヒア人ノ侵害よりイタリアを救ひ能はざりしのみならず。年々自國に侵入し來る此人を防ぐの力なく、専ら地方諸侯の力によりて之を防ぎし有様なりき。就中、パリ伯オドは、此際よく此人を防ぎてパリ、ド、アイルを救ひたる故を以て、非常なる勢力を有するに至れり。かくて紀元八百八十四年、西フランク國は一時東フランク國の所領となりしか、紀元九百八十七年、オドの子孫、ユーゴー・カペーは推されて王位に上り、紀元一千三百二十八年に至るまでフランスを統治したり。是をカペチンカ王朝となす。東フランク國は、ルイス(ゲルマン)の代には、種族の争亂、常に絶えざりしか、子ルイス立つに及び、國內のケルマニ種族をサクス、ババリア、スヴヒヤ、フランクの四族に分ち、各世襲諸侯の統治の下に、おらしめ、自己はババリア侯となりて此等諸侯を總括するとなし、以てゲルマニ民族の統一と東フ

ランクの鎮靜を計りたりき。是を以て其子カロロ三世の時には、フランクの勢力は漸く隆盛にして、或はイタリアに入りてアラビア人を破り、法皇を助けて半島を支配し、或は西フランク國に至りてノルマン人を防ぎ、フランク人を救ふてカロリンガ朝を後見したりき。ついでアルチルフの代には其勢力益強大となり、北人及びスラブ族を征服せしのみならず、紀元八百九十八年には、イタリアに入りてローマを征服し、法皇に迫りて皇帝の位を得たり。然れども、紀元八百九十年に、彼カスラーブの勢力を壓制せんとして、蒙古族なるマチャールと結ひしことは、マチャール族か西フランクに入るの道を開き、ルイス(自紀元八百九十九年―至全九百十一年)の時には彼等は切りに侵略をなし、王は之を拒止すること能はず、ババリア、フランコニア、サクソニア、スクビヤ、ロードリンカの諸侯は、相率ゐて獨立を企つるに至り、カロリンカ朝は、遂に其滅すところとなれり。

カロリンカ朝の最後の王たるルイスの死するや、彼等五諸侯及僧正等は、フランコニヤ公コントラットを撰ひて王となしぬ。然るに獨りサクソン公ヘンリーは彼を戴くを肯せず、彼の王位を認めざりき。故にコントラット位につくに及びては一方には侵入し來るマチャール人に當り、一方には反對者たるヘンリーに抗したりしか、共に功を奏する能はず、遂に位をヘンリーに讓ることを命じて死しぬ。是に於てヘンリーはフランク人に推されて帝位に上れり。是をサクソン朝の始祖と

なす。ヘンリーは王位に上るや、専らマチャール討伐の策を講し、彼等カサクソニーを侵すに當り、九年間の貢賦を約して彼と平和の條約を結び、其間切りに軍隊軍器の改良に、城塞の建築に力を盡し、遂に紀元九百三十二年、大にマチャールをウシスルートの地に擊破し、一時彼の軍隊は精銳を以て四隣に震ひたりき。紀元九百三十六年、ヘンリー死しオトロー位につきぬ。彼は初め其即位に關して母及叔父の異議を受けたりしも、三人の僧正と四人の侯伯は彼を推して即位の式を行はしめぬ。彼は機會あらは諸侯の領土を沒收して、自己の家族に分配し、以て藩屏となし僧侶等に政治上の地位を與へて王室との關係を密接ならしめ、因て以て事實上ドイツの主人たる勢力を作りたりき。ついで彼はフランスの内情に干渉しルイ四世を立て、カロリク朝を再興し(紀元九百五十年)、イタリアなるイブレアのベレンカル二世を破り、女王アテルハイドを救て之と婚し、而して彼は紀元九百五十五年、アウクスブルクに近きレヒフェルトに於てマチャール人を破りて大に之に勝ち、東方のマルク、即ちアウストリア(今のアウストリア國の基をなす)を設けて、全然マチャール族侵略の道を杜絶したり。是に於てか、彼の名聲は各地に喧傳せらるゝに至り、紀元九百六十二年、ローマ法皇レオ八世は、彼に與ふるに神聖ローマ皇帝の冠を以てし、代々ドイツ國民の主領として此稱號を繼續すべきことを布告せり。是より彼は東ローマ帝國の海軍をかりて、アラヒア人をイタリアより驅逐し、また其嗣子オトロー二世の爲に、東ローマ皇帝の

女、テオワニアを娶り、將にかのカロロ大帝の考案をつかんどせしか、紀元九百七十三年終に死せり。世稱してオトロー大王といふは即ち彼なり。オトロー二世位をつき、父の遺志を繼述して、ローマ大帝國復興の計畫に熱中し、帝都をローマ市に移し、妻の名によりて南方イタリアを征せんと企てたり。彼の在位は僅に十年なりしを以て、未だ何等の活動をもなすこと能はざりき。オトロー三世は三歳にして位につきしか、十五歳にして自ら政治を處理したりき。然れども彼は余りに空想に走りて實務にうとく、此時代に於てポーランド、ベイメン等は皇帝を離れて、別に新スラブ國の基礎を立てたりき。後ヘンリー二世位を受けしか、ついで死し、サクソ王朝はこゝに終りを告げ、紀元一千二十四年より全一千一百廿五年に至る間は、サリツク家の皇帝によりて支配せらるゝことゝなりぬ。サリツク家の最初の皇帝コンラッド二世の代は、ポーランドの勢力漸く盛にして、其王ミーセスフウ二世は兵を率ゐてザール河附近に敗し一万人の捕虜を擄て引返したることありき。翌年再び來りて貢賦を收め、其捕虜を返し、更にワツサルとなりて奉仕すること誓ひしといへども、其反抗の勢力は決して消滅せざりき。ヘンリー三世其後を襲ふに及びては、ノルマン人か其居住地を去り南に下り、アラヒア人を南イタリア及びシチリヤより驅逐し、新に王國を建設したることあれども、スラーウ、マチャールの抗撃は余り甚しからざりしか如し。此際彼は法皇に對する勢力をたのみとして、オトロー大王か採用せし王子封侯の制をすて、専ら僧

侶任用の法を取り、法皇の命によりて彼等を統御せんと企てたり。然れども是明かに他日ローマ法皇の権力の増大するに隨て、神聖ローマ皇帝が膝を法皇の前に屈せざる可らざるに至りし所以なりと云ふべきなり。

サクヌ朝系譜

サクヌ朝系譜
サクヌ朝系譜

- (1) オトー一世 + 973 ヴンラー (ババリア公) + 975
- (2) オトー二世 + 983 ヴンラー + 995
- (3) オトー三世 + 1002 (5) ヴンラー二世 + 1021

第二章 ローマ法皇

其一 法皇權の横張

西ローマ帝國滅亡以來、ローマ法皇(紀元四百四十九年、ローマの監督たりしレオは、自己が最高の監督たる故を以てホープ(法皇の稱號を採用をしたり、是よりローマの監督は法皇と稱せらるゝことゝなりぬ)は猶ローマ市に在りて、幾多蕃族の布教に従事し、彼等のイタリアを蹂躪するの際に當て、一部地方の平安を維持し、ローマ皇帝の地位が世俗界に於ける神の代理者として、彼等に羨慕せらしことく、彼は精神界に於ける神の代理者として、少からざる信

仰ど、尊敬とを保ちたりき。然れども彼はもとより兵力を有せざるを以て、異教徒たるアラヒア人がイタリアを侵略するに及びては、強大なる王族の力を籍りて、此か防禦の方法を滿せざる可らざりき。是に於て彼は神聖ローマ皇帝の尊號を以て、近隣の豪族を招き、以てイタリアの安全と信徒の平安を保持することを試したり。かくの如くにして彼は神聖ローマ皇帝の保護によりて存在するものとなり、神聖ローマ皇帝の前には勢力なきものとなるに至りぬ故にドイツ帝カロー三世の如きは、ローマ法皇に迫りて神聖ローマ帝の位置に上り、オトー大王は令を發して、ローマ法皇は信徒の會議に於て撰舉せられたる後、更にローマ皇帝の認可を得ざる可らすといに至れり、是よりローマ法皇叙仕の權利は、全くドイツ王の手中に飯し、法皇は總て王の命令を奉せざる可らざるに至りたりき。然るに紀元十一世の頃よりして世人の宗教的傾向に動搖を興しつゝ、以て法皇の位置勢力に對して一大變動を生ず、此宗教的傾向の起源をなしたるものは、實にフランスなるクランニ派僧徒の革新運動なりき。彼等か一度宗教對國家問題を提出して、宗教と國家とは全く分離すべきものなることを主張するに及び、世人の宗教的傾向に大なる動搖を起さしむるに至りぬ。而して當時フランスの僧徒は、ドイツ僧侶の如く、土地を有せず、政權を有せず、俗人的勢力を有せざりしといへども、熱誠を有し、堅信を有し、精神的勢望を有したりしを以て、彼等の主張は、忽ちにして天下の主張を構成するに至りたりき。かくてグレコリ七世

(ヒルテブランド)が法皇となりし頃は、ローマ法王は帝王の上座に立ち、帝王はローマ法皇の支配を受くべきものなりとは、一般の輿論なりき。

紀元一千五十六年、ヘンリー四世は、父ヘンリー三世の後を受けしか、猶幼弱なりしを以て、母アグネスは代りて政治を處理したり。アグネスは、皇族を封して王室の強固を保たんと欲し、義子ルドルフをシユワーベンに、ベルトホルドをケルンテンに、サクス候オトーをバイエルンの地に封じたりき。然るにヘンリー四世自ら政治を執るに至り、母アグネスの處置を満足せず、大に僧正等を任用し、又バイエルンの地をサクス候より略奪したり。故にサクス候は俗人的諸侯の助力を籍り、ハルツブルク以下の諸城を下し、王をしてウオームスに退かしめぬ。王は更にライン地方及び上ドイツ地方の僧侶諸侯の援助を得、サクス候等の軍をウスツルフトに近きホーヘンブルグに破り、其領土内の人民に對して、更に一層甚しき壓制を加へたり。因て俗人の諸侯等は使を送りて救護を法皇クレゴリー七世に求めぬ。是に於て法皇クレゴリー王に近侍せる僧正を廢し、紀元一千七十六年、令を下して寺職の賣買(シモニー)と俗人諸侯が僧侶に采邑を附與する(インベスチュール)を禁じ、嚴に僧侶の獨身(ケリバート)を守るべきことを命じたり。而してインスチユールの問題は、ドイツに取りては最重大のものにてありき。然るにヘンリー四世は更に此等の命令に従はざりしのみならず、部下の僧正等をウオームスに會し、法皇クレゴリー七世排斥

の事を計りしかば、法皇怒りてヘンリーを破門し、臣下をして帝に忠實を誓ふことを止めしめ、且一年以内に此破門の許さるゝに非ればヘンリーの帝號は虛名たるべきことを告示したり。ついで俗人諸侯等は法皇と相謀りて、此際別に新帝を撰定せんと企に多忙なりき。是に至りてヘンリー四世も、亦、策の出づべき所を知らず、即ち罪を法皇に謝し、依て以て帝位の安全を求めんと欲し、意を決してイタリアに向ひぬ。途にして法皇カノツサ城にありときき、轉じて城に至りて會見を請ふ。遇はず。西ローマ皇帝は雪中蹠足にして城外に立つこと三日。紀元一千七十七年正月二十八日に至りて、初めて相見ることを得、やがてヘンリーは法皇によりて總て過去の行爲を容赦されたり。然るに既にして法皇は俗人の諸侯等がルドルフを擧て新帝となせしを聞き、又帝を赦すことを拒みたりしかば、ヘンリー大に怒り、直にドイツに飯り、兵を興してルトルフを撃破し、更にイタリアに進みて法皇を追ふてクレメント三世を擁立したり。ついでウルバン二世がグレゴリー七世の後を嗣て法皇と稱するに及び、またイタリアに入り、武力によりて法皇を威服せんと企てたりき。紀元一千一百六年ヘンリー五世位につきしが、法皇と皇帝との争は猶止まず、帝は法皇バシヤリス二世に迫りて即位式を施行せしめ、インベスチユールの權を承諾せしめたり。然れども皇帝の勢力は未だ以て法皇を壓服するには至らざりき。遂に紀元一千一百二十二年、帝は法皇カリクストゥス二世とウオームスに會し、ウオームス、コントマタット(ウオームス契約)

を結ぶに及び、皇帝はドイツ國內の僧正を撰擧する權利を有し、法皇はイタリア國內の僧正を任命する權利を有すること、定り、法皇皇帝の長き争は一時其局を結ぶに至れり。而して紀元一千二百二十五年、ヘンリー五世の死によりてサリツク朝は終を告げぬ。

此際イギリスに在ては、サクス朝最後の王たるエドワード、コンフェツツル位にありしが、王は嗣子なかりしを以て、グント侯の子ハロルドをフランスに遣し、位をノルマンディー公ウイリアムに譲らんことを約したり。されどアンクロサクス人は、人種を異にしたるノルマンディー公を王位に戴くを慍とせざりしかば、紀元一千六十六年、ハロルドを擧げてエドワードの後を嗣がしめぬ。然るにノルマンディー公ウイリアムは、此報を得て大に憤り、援を當時なほ大執事たりしヒルデブランド(クレゴリー七世)に求めたり。因てヒルデブランドは直に其擧を賛し、旗をウイリヤムに贈りてイギリスの主權の爲に戰をなすべきことを許したり、蓋しヒルデブランドの意は、是によりて法皇權をイギリス内に扶植せんと考へたるもの、如し。是に於て、其年七月、ウイリアムは艦隊を組成し、自己の臣下を引率してイギリスに侵入し、ハロルト王をヘスチングスの野に撃破し遂にイギリスの王位に上りぬ。是れ實にイギリスがフランスなるノルマンザールと共に一王の下に支配せらるゝ始なりき。ついでウイリアムは總ての高等官吏に任用するにノルマン人を以てし、アングロサクス人等の土地を沒收してノルマン人に分與し、以て一種の封建的國家を創

始したり。されどウイリアムはローマ法皇の最高權を認むるは、封建的國家に取りて大なる不便あるを見たるを以て、曾てローマの教會の勢力をかりて、征討の功を全ふしたるに、かいはらず、ローマ法皇クレゴリー七世が屢々下したる命令に反して、ローマの教會との同盟を拒絶したり。然れども大勢の潮は遂によくウイリアムの力の防ぎ得へき處に非ざりき。彼の正しき抵抗にも關らず、ローマ法皇の權力はイギリス國內に於て日に日に増進するの傾向を示すを見たり。ウイリアム一世死後、長子ロバートはノルマンディーを領し、次子ウイリアム二世はイギリスを領したりしか、ヘンリー一世に至りて再々兩地を併有し、以てステハンに傳へたりき。然るに偶々ヘンリー一世の孫、ヘンリー二世(アンジウ侯ゴットフリードとヘンリー一世の女マケルダとの間に生る)は、父アンジウ侯の助によりてステハンを破りて王位に上れり。是をブランタデニツツ王朝と稱す。此時に當りて、ローマ法皇のイギリス國內に於ける勢力は漸く盛にして、カンタパリー大僧正ベツケットの如き、常に輿論の中心點となりて非常なる勢力を振ひたりき。王は彼が權勢の強大にして、政府と教會との調和を欠くを好まず、遂に之を暗殺せしむるに至りしが、然かも猶ローマ法皇の最高者たるを認め、法皇廷の處置を是とせざる可らざる有様となるに至れり。故に法皇が彼に與ふるにアイルランドを以てし、之が征服を命せし時の如き、彼はイギリス、フランス二國の兵を率ゐて、屬々之を征し、遂に之を占領したり。かくてヘンリー二世死し、子

ジョンの代となりては、イギリスは最早全くローマ法皇の屬稱たる状態に陥るに至りぬ。かくの如くにしてローマ法皇は帝王の王たる權力を得ぬにや彼の命令は各の帝王に従はれ、彼の威令は万民に行はるゝに至りぬ。是に於てかローマ法皇はこの大勢力を宗教上に用ひ、總てのクリスト教徒をして従來クリスト教國に敗したるアラビヤ人、トルコ人及びローマの教會と教を異にせる人民等を征討し法皇を戴ける大帝國を地上に建設せんとの思望を熾ならしめたり。

十字軍

其二、十字軍

通常十字軍と稱するは聖墓恢復の軍を稱す
こゝへは余は此意を廣く用ひたり。

西方に於けるマホメット教國、コルドワなるオミアツド家は、紀元七百三十二年、ツール、ボアチエーの兩戰に於て、カロロ大帝の大打撃を被りしより、暫時其手足を伸すこと能はざりしが、後、西ローマ帝國の分裂するに及び再び強大なる勢力を有するに至り、アプト、アル、ラ、マン三世（自紀元九百十二年—至全九百六十一年）の代には、コルドワ朝廷全盛の時代を出現したり。然れども其後王家の勢力は、日々衰運に趣き、遂に紀元一千三十一年に至り、コルドワ朝廷は其終を告げ、イスパニアなるアラビヤ人の領土は、幾多無數の小邦に分裂するに至れり。而してこの分裂は、實に北方イスパニアにありしキリスト教國（即ちレオン、アラゴン、カスチリヤ、ナバレの諸國にしのな）に勃興の好機會を與へたるものなりき。是に於てアルホンゾ二世は紀元一千八十四年、レ

オン、カスチリアの二國を併せ、翌年アラビヤ人の領せしトレド市を略し、以てイスパニア全土に君臨せんことを企てぬ。依てアラビヤ人は救をアフリカなる同族に求めて之に抗し、アルモラビットの朝廷を南イスパニアに興したりしも、紀元一千一百一十八年、アラゴンのアルホンゾ王は、更に東イスパニアなるガラゴザを奪ひ、アルホンゾ八世に至りては、自ら皇帝と稱する有様なりき。後紀元一千一百五十九年、アルホンゾ八世死し、カスチリヤ、レオンは二國に分れ、キリスト教諸國各分離するに當り、アルモラビット朝のカリフ、ジャコブは、アラルコスアラルコスの地に於て、大にアルホンゾの孫を破り、一時勢力を恢復したりしか、ジャコブ死するや、クスリスト教諸國の連合再び成り、紀元一千二百一十二年、其の子マホメットトロッサに破り、遂に全くアラビヤ人の勢力を挫きたり。ついでヘルチナンド三世は、またカスチリヤ、レオン二國を併せ、セビヤ、コルドワの町を領するに至り、アラビヤ人は唯にグラナダの一小國を有するのみとなれり。かくて紀元十三世紀の半にて於て、イスパニア國內には、カチスタリヤ、アラゴン、ポルドガル、ナバレ、グラナタの諸國存したりき。而して南方イタリアに於けるアラヒア領、及び、シチリアにありては、紀元一千一十七年の頃よりして、既に早くキリスト教徒となりしノルマン人の侵略を受くること甚たしく南方イタリアは直にノルマン人の手中に落ち、ついで紀元一千六十年にはノルマン族長ロバート、ウイスカード等海を渡りてシチリヤに入り、遂に紀元一千一

百三十年に至り、全くアラビヤ人を征服して、茲にシチア王國を建設したり。

東方に於けるマホメット教國、バグダッドなるアバシット家は、ハルンアルラシット及び其子マムンの時代の間は頗る隆盛を極め、能く領土の統一を保ちたりしか、既にして漸く廢類に向ひ、紀元八百六十一年には、諸侯各其領地によりて蜂起し、政治上に於けるカリフの勢力全く地をあらふに至りぬ。是に於てブシードン家興りてカリフの有せし俗界の主權(エミルアルオモラの權を奪ひ、爾後カリフは只宗教上の主能者として認めらるゝことゝなれり。然るに紀元一千五十八年に至り、更にカリフの傭兵たりしセルジュクトルコ人のスルタントグルイベツグは、カリフを助くるを名として、ブシードン家を破り、ブシードン家か有せしエミルアルオモラの權を奪て、カリフの領土を一統したり。是に於て東方マホメット教國に於ては、アラヒア人の勢力全く滅び、同教徒なるトルコ人之に代りて、小アジアより支那に至る大領土を支配することゝなり、やかつてキリスト教國との大衝突を起すに至りぬ。

既に紀元一世紀の頃よりして、コロソツ諸國のキリスト教徒は、イエルサレムに到りて、クリストの墳墓に詣つるもの少からざりしか、コンスタンチン大帝の代、帝の母ヘレナかクリストの墳墓を改造するに及びては、チエルサレム聖墓の巡禮はキリスト教徒等の必生の希望となるに至り、かくて紀元六百三十七年、アラヒア人か東ローマ帝國を侵し、パレスチンを略するに至りて、

猶幾多の信徒か聖墓に巡拜するものを見たりき。然るにセルジュクトアコの此地を領するに及びては、彼等のキリスト教徒を遇すること極めて酷にして、巡禮者に對する悲惨なる報導は、屢々ヨロツバ諸國の耳に達したりき。是に於て異教徒たるトルコ人を征服して聖地をキリスト教徒の手中に收めざる可らすとの議論は、漸くヨロツバ諸國の間ニ喧傳せらるに至れり。特にフランス、アミアンの僧なるベートルは各地に遊説してこの主張を廣布したり。而してローマ法皇ウルバン二世は甚だ此舉を賛し、宗教會議をピアセンサ及びクレマンの二地に開きて之を計り、人民亦皆之を賛し、遂にトルコ人征討の軍を擧ぐるに至りぬ。この軍は初めは専らトルコ人に對して聖墓を回復するの目的に出たるものなりしか、後には總ての異教徒征討に用らるゝに至れり。紀元一千九十六年に始て全一千二百七十に終る。前後七回。通常之を十字軍と稱す。即ち

第一回十字軍 (自紀元一千九十六年至全一千九十九年)

パレスチンを回復し、イエルサレム王國(自紀元一千九十九年至全一千一百八十七年)を建設したり。

第二回十字軍 (自紀元一千一百四十七年至全一千一百四十九年)

オデッサ市ヲ回復せんとして失敗したり。

第三回十字軍 (自紀元一千一百八十九年至全一千一百九十二年)

パレスチンを回復せんとして失敗したり。

第四回十字軍 (自紀元一千二百二年至全一千二百四年)

東ローマ帝國を覆へし、ラチン帝國(自紀元一千二百二十八年至全一千二百二十九年)を建設したり。

第五回十字軍 (自紀元一千二百二十八年至全一千二百二十九年)

イェルサレムを征服して之を占領したり (自紀元一千二百二十八年至全一千二百四十四年)。

第六回十字軍 (自紀元一千二百四十八年至全一千二百五十四年)

エジプトを征服せんとして失敗したり。

第七回十字軍 (紀元一千二百七十年)

チユニスを征服せんとして失敗したり。

以上第一回十字軍より第七回十字軍に至るものは、通常十字軍と呼び倣さるゝものなりといへども、此他は紀元一千二百一十二年にイェルサレム征討の爲に組織されたる幼童十字軍たるものありき。されは東方マホメット教國に對して起されたる十字軍は都合八回なりしなり。而して此

等八回の中にて、第四回十字軍の明かにマホメット教國に對するものに非ずして、キリシヤ教國に對するものなるを考ふるときは、是に至りて元來異教諸國征討の目的を以て起りし十字軍が一變して異派諸國の征討に用ひらるゝに至りしことを知るべきなり。故に紀元一千二百九年にはフランスの南方に住せるアルヒヂェンス(アルピ市に住するにより此名あり)の征討となり紀元一千二百六十六年にはシケリアの征討となり。かくて拾三世紀の末に至りては、バルト海(東海)に沿へる諸國、即ち、プロシア、リトワニヤ、ニウオア等、總て十字軍の征討を受くるに至りたり。東方マホメット教國に對する十字軍は、ローマ法皇の最も力を用ゐし所にして、ヨーロッパ諸國の皇帝士民等は競ふて此軍に越さしか、其軍多くは失敗に終りて成功を見ること少かりき。されど東方マホメット教國に對する十字軍は、茲に相識らざるヨーロッパ諸國の國民に、親密なる交際をなす機會を興へて、彼等が技能を交換する媒介をなせしのみならず、從來ラチン文明によりて養成せられしヨーロッパ諸國の國民をして、キリシヤ文明に東洋諸國の文明に接觸せしめて、彼等の智力的、社會的、商業的、並に宗教的世話の上に急激なる一大進歩を現出せしむるに至りたり。

其二 蒙古人の侵略

クリスト教國とマホメット教國とか、互に相争ありし間に、クリスト教徒にも非ず、またマホメ

ツト教徒にも非ざる、異教の一民族は此等兩教國の東方に起りて、彼等に對して一大打撃を加へたり。これヨーロッパ人カタルタルト稱する民族にして、即ち蒙古民族なりき。彼等は、曾て西ローマの晩年に當り、フン族カアツチラを戴て、ローマに進來せしごとく、十三世紀の初に當りて、ヨーロッパの東方に侵入し、少からざる危害をヨーロッパに與へたり。凡る蒙古民族の支那史上に現れたるは、大略六七世紀の頃にして、契丹部落の一なる蒙瓦部は、即ち蒙古の先なりといふを見れば、彼等は早くより一部落を形成したるものなること明なり。彼等はアジアの北方なるアムル(黒龍江)の支流、オノン(幹難)ケルレン(客魯健)、パンヂユニ(班朱巴)、河邊に部落を形成して遊牧を業としたりき。而して此部落か明かに其頭角を顯すに至りしものは、實に十二世紀の始、テムシン(鐵木真)即ちジン、キス、ハン(成吉思汗)の現れたるに基く。

テムシン(自紀元一千一百五十五年至全一千二百二十四年)の蒙古に現るゝや、蒙古は非常なる膨張をなすに至れり。彼は先づ蒙古の全部落を一統し、ついで近隣の諸部落を併吞せしのみならず是より万里の長城を越えて支那の内地に侵入し、更に轉してアラヒア、トルコ等の領土を蠶食し、遂に紀元一千二百二十一年には、カスヒ海沿岸の諸地及び黒海沿岸の諸邦を併吞するに至りき。而して其子オコタイ(窩闊台)の世に及ひては、蒙古更に一層の膨張を爲したりき。オコタイは父テムシンの意志を奉じ、其兄ヂウチ(朮赤)の子バツ(拔都)等に命じて、父の企圖したる征討を繼

續せしめぬ。依てバツは先づ北方ロシアの諸侯を征して之を降し(紀元一千二百三十八年)ついで東方ヨーロッパに向ひ、ポーランドを改めてドイツのライプニツに及び、轉してホンガリアに進み紀元一千二百四十二年、ワールスタット(リグンツ)にチユートニツクナイトと戦ひ、遂にドナウ河を渡れり、是にてドイツ皇帝フレリツキは大に恐れ、檄を諸國王に飛して、十字軍の編成を勧誘するに至りぬ。然るにバツは猶深く内地に侵入することをなさず、ホラゴウをしてバクダットを攻めて、アラヒアのアルフ、アバシツド家を放逐せしめ(紀元一千二百五十八年)、サライに都して金、オルド國(欽察國)を創めたり。ロシア諸侯等は、租税を納めて朝貢し、子弟を送りて留學せしめ、サライは一時隆盛を致したりき。

ローマ法皇インノセント四世は、十字軍の思想を以て、この新に興れる異教徒に對しても、クリスト教を傳ふと試みたり。彼はフランシスカン派の僧ブラノアルビをハラホルム(和林)の蒙古朝廷に送り、蒙古のヨーロッパに對せる強暴を慰諭し、兼ねて布教を計らしめぬ。而して此頃フランスなるリオンの僧の法皇の意志を奉して自ら蒙古に入りたるものあり。前後クリスト教僧侶の蒙古に入るもの甚多かりき。蒙古人は古より自然教的信仰を有せざるに非ざりしといへど、蒙古の朝廷は、彼等の信仰に對して、干渉せざるの方針なりしを以て、クリスト教もや、彼等の信仰を受くるに至りたりき。而して其最行はれしものは、チストリア派にてありき、蒙古人はクリスト

教徒を呼ぶに也里可温人の名を以てせり、後クプアイ(忽必烈)の立つに及びては、マホメット教の壓迫に困み、ローマ法皇と同盟して、是に當るの計を講せしことありといふ。かくて蒙古の勢は、一時アジアを壓し遙にヨーロッパに及びたりしか、久しからずして、同族の間に分裂を生し、自ら其勢を失墜するに至り、遂に紀元一千二百七十七年には、再ハトルコをして其勢を逞ふせしむるに至りたりき。然れども此間蒙古がトルコの後觀の憂となりて、其勢力を西方に延すの機會を失はしめ、東にして帝國をして稍や其亡滅の時期を遅ふせしめたるは疑ふ可らざるなり。

十字軍の
影響

其四 十字軍の影響

十字軍のヨーロッパに與へたる顯著の影響として見るべきものは、法皇權の膨脹なり。(一)騎士組合の興起なり。(二)都府の發達なり。(三)而して其等影響の當然の結果として現れたるものは、帝王權の縮小なりとす。十字軍のヨーロッパに起るや、僧社の組織は各處に起れり。即システルシアンス派あり、前フランシスカン派あり、ドミニカン派あり、フランシスカン派あり、アウクステン派あり、此等僧社は皆法皇を奉して宗教的熱誠を各處に鼓吹したり。而して又騎士組合も續々として現れ、即ちフランス、イスパニヤに向ひし、白衣に赤十字を帯ひたるテンブラーあり、マルタ、ローツス島に向ひし、黒衣に白十字を帯ひたるヨハチス團体あり、プロシア地方に向ひ

し、白衣に黒十字を帯ひたるドイツ組合あり、此等組合は皆法皇を戴きて宗教的征討を各地に試みたりき。故に十字軍の末後に於ては、法皇權の勢力は甚だ盛にして、インノセント三世時代は法皇權極盛の時期と稱せらるゝに至れり。

十字軍の際に興れる騎士組合は、純然たる宗教的組合なりき。彼等は武人的組織を取りしといへども、其目的は全く布教にありき、然るに十字軍の晩年に及びて、此等騎士は漸く、宗教的意義を放れて軍事的の意義を探り、諸國帝王の下に武人の階級を形成するに至りぬ。然れども彼等の漸く強大なるに至りては、かゝる武人の階級を以て満足せず、遂に帝王權を蔑視して、自己の勢力を扶植せんと企つるに至れり。かくして法皇權極盛の時代に於て更に騎士全盛の時代を現出せしめぬ。

十字軍の際に於て、帝王、諸侯等は皆其部下の農民を徵發して兵役に従事せしめ、市民をして運漕商業等の業務に精勵せしめぬ、故に十字軍後、農民は非常なる疲弊に陥りしに關らず、市民は盛に其資力を増加することを得て、各處に都市の發達を見るに至れり。即ち十字軍の要衝に當りしイタリアは勿論、其他、イギリス、ドイツに於ても都市は大に勃興せり。かくて十三世紀頃は、此等都市の勢甚盛にして、騎士等が城柵によりて領土の安然を計りし如くに、備兵を役して其市府を保守し、遂に市府の制度を廢して、純然たる國家の制度を取り、全く諸君主の状態をなすに

至れり。而してこれら都市の中に於て、最有名なりしものは、イタリアなるベネチヤ、ジェノバ、フイレンツエを初とし、パンサ同盟の都市及びドイツの自由市なりとす。

法王權の隆盛と騎士の勢力とは、明かに帝權の隆盛と比肩し得べき性質のものに非りき。更に之に加ふるに都市の發達を以てす、十字軍後に於ける帝王權の衰頽は、實に當然のこといふべし。而して其衰頽の程度に至りては、十字軍前に於ける帝王權の強弱に比列するか如きを覺ゆ。

イギリスに於ては、ブランドヂエチット家の最初の王なるヘンリー二世以來、僧正貴族の權力は益々盛なりしか、ジオアンの位に即くに及び、彼等は法皇インノセント三世と連合して王權の壓迫に勉め、遂に紀元一千二百十五年、王に迫りて、マグナカルタ(大憲章)を作り、之に承認を與へしめ、其條文の増減に關しては、總て大評議會の決議を経べきことと定めしめたり。此即ち今日のイギリス憲法の神髓となりしものにして、イギリス人民の權利か、初て文字上に表示せられたるものなりとす。ドイツにありてはフランコニア家後、サクサ家のロタールはスタウヘン家のコンラッド(ヘンリー四世の孫)と争ひしか、遂にウエルヘン家の助を以て王位の上り、やがて紀元一千一百三十三年、皇帝となれり。されど彼は全く法皇インノセント二世の臣下たる有様にして毫も權力を有せざりき。スタウフェン家自紀元一千一百三十八年、至全一千二百五十四年のコンラッド三世サクサ家に代るに及び、フランコニア家の採用したる方針を取り、帝王權の擴張を計り

しより、爾後ウエルヘン家(法皇黨)とスタウヘン家スタウヘン家はスワビヤなるロイプリンカ(帝王黨)の山の名によりてロイプリンガ家ともいふとの争たぬず、(イタリアにてはゲルフ、キベリンの争といふ)甥フレデリツキの代には、イタリア諸市は連合してロンバルト同盟を作りてドイツに反し、帝王の勢力全くイタリアに及ばず、法皇ハドリアン死し、ウイクトル、アレキサントルの二人、其地位を争ふに當りウイクトルを助けて、權勢を恢復せんと計りしか又意の如くならず、遂に紀元一千一百八十三年に至り、コンスタンスの條約を結ひて、法皇と和し、イタリア諸市の獨立を承認せざる可らざるに至りたりき。後フレデリツキの子ヘンリー六世に至り、シチリアを征し之を併せ、フレデリツキ二世に至りて、遂にドイツ、イタリア及びシチリアの王位を兼ね、法皇インノセント三世、ホノリウス六世、クレゴリ九世、インノセント四世等と争ひ、法皇の爲に破門を蒙り、王位を廢せらるゝに至りしも、猶法皇に抗して帝權の擴張を計りたりき。然るに子コンラットの代に及びては、ドイツの諸侯等は、勢力ある帝王を戴き其支配を受るを好まず、外國の皇子或は無勢力なる王を擧げて、自己の權力を増大せんことを希望するに至り、遂にドイツ國內に大空位の時代(自紀元一千二百五十年、至同一千二百七十三年)を現出するに至りたりき。紀元一千二百七十三年、ハブスブルク家のルドルフ選舉せられて王位に上りて後は、西ローマ皇帝の稱號は繼續したりといへども、イタリアは既に全く皇帝の所有に非ず、王權日を追ふて衰頽に陥りたりき。かくの如くにして従前法皇權の隆盛

にして王權の堅固ならざりしフランス、イスパニアの如きは、十字軍によりて十分注目すべき程の影響を受けず、スウイス、及び北方諸地の如きは、なほ依然としてゲルマニ時代の習慣制度を繼續して自然的の發達を遂げたりき。

其五 法皇權の衰頹

法皇權隆盛の時期は甚だ短くして、帝權伸張の時期直に之に代りぬ。拾三世紀の初に、隆盛の極に達したりし法皇權は、全紀の末に、既に衰頹の兆を現出するに至りぬ。是れ蓋し法皇か自己の大權を濫用せしと、部下の僧侶等の權勢をたのみて不正を營みしとによるへしといへども、又帝王か法皇と貴族との勢力を挫かんとして、貴族及僧侶の抑制に苦みし人民と合同したるによること明かなり。而して其始をなしたるものは、實にフランスなりき。

フランスはカペー朝に至りても、諸侯の勢力甚だ強く、王權至て弱かりき。殊にノルマンディー侯ウイリアムがイギリス王となりてよりは、フランス國內に於けるノルマンディー侯の勢力甚だ隆に、ノルマンディー、アキタニア等の諸地を領して其實權は遙かにフランス王室の上にありき、而してイギリス王ヘンリ二世が、フランス王ルイス七世の先后エリノルを始としたる故を以て、エリノルの地を領するに及びては、ノルマンディー侯の勢力は更に其強を加へたりき。フィリップ二世に及び、イギリス王ジョアンが其甥アルツルを殺し、イギリス王の位を奪ひたるに乗し、ノルマン

法皇權の
衰頹

ディーの地を沒収せしといへども、之を以てイギリス王のフランスに於ける勢力を挫くには足らざりき。ルイス九世(ルイス聖王)の立つに至り、大に王權の伸張を計り、切に諸侯を征せしかば、王治世間には、フランスの領土は大に擴張せられ、パリ、オルレアンの舊小境域を脱して、三面海に面する大國となるに至りぬ。されど猶フランス領内には、プロバンス、ブルグンド等の大諸侯の存するあり、フランス王の權勢は、未だ俄かに大なる伸張を望む可らざりき。されば十字軍の交、既にイギリスは國家の統一を現し、王室の權力盛なりしに關らず、フランスは國家未だ統一せず、王權極めて勢力なかりき。而してこの十字軍の際、フランス王室の勢力なかりしことは、十字軍後、大なる影響を受けず、なほ發達し得へき餘地を供したるものといふべく、かくしてルイス九世の孫、フィリップ四世(フィリップ美王)(自紀元一千二百八十五年—至全一千三百十四年)に至りて大活動を試みるに至りしも、決して偶然に非りしなり。

フィリップ四世の位に上るや、彼は祖王の後を受けて、諸侯の勢力を壓迫し、僧侶の特權を剝奪し、以て帝權の伸張を謀らんと企てぬ。而して彼は之を完成する方法として人民と結託したり。彼は、一方に於ては種々なる特權を人民に與へて其權利を増し一方に於ては法皇と爭論してテンブラー組合を解さぬ。ついで紀元一千三百二年に至り、國會の制度を設け、税目に關しては總て議會の協賛を経へざることなし、以て民望を收攬し、遂に其翌年、法皇ボニファチオ八世を拘禁

い、クレメンヌ四世を擁立したり。是より、法皇はローマを去りて佛境アヒニオンに居ることになりぬ。(バヒロン浮囚と稱す紀元一千三百九年より全一千三百七十六年に至る略七十年間なり) 是に於てか法皇は全くフランス王の権内に入り、フランス王は法皇を掌中に弄して、恣にフランス國內の僧侶及び貴族を命令するの實權を有するに至りしのみならず、總ての國王に與ふるに帝權伸張の好機會を以てしたり。フランス王の權利伸張は、フランスの諸侯たるイギリス王の權利伸張と相伴ふ可からず、故にフィリップ四世が王權を伸張せんとするに及ひ、イギリス王、エドワード一世及二世と常に其優劣を争はざる可らざりき。而して紀元一千三百二十七年カカロ四世死し、パロア家のフィリップ六世王位に上るに及ひ、イギリス王エドワード三世(自紀元一千二百二十七年—至全一千三百七十七年)は、曾てノルマンディー侯イリアムか女縁を以て、イギリスの王位を請求したることく、其母イサベラかフランス王フィリップ四世の女たる故を以て、フランスの王位を請求したり。されどフランスは古來サリツク法の行はれし國にして、女系の王位相續を許さざる習慣なるを以て、イギリス王の請求は遂に行はれずして止みぬ。是に於てエドワード三世は大舉海を渡りてフランスに入り、武力によりて王權を掌握せんと企たり。是より兩國の争絶むること略百年に及ぶ。依て百年戦争と稱す。(自紀元一千三百三十八年—至全一千四百五十二年) 此戰、イギリス王は皇帝ルイス及びフランス内の諸侯、諸市の援助あり、常にフランス

軍を破りて大勝を得、一時はフランス王と稱するに至りしかど、英人の佛人に對する殘暴抑壓よりして佛人の腦裏に、國家的感情の勃興を來し、上下相合して外人を國外に驅逐するに勉むるに至り、有名なるオルレアン處女、ジャンヌダルクの出て、國民を指揮して國勢の回復を計るあり、遂に紀元一千四百五十三年に至りては、英軍は全く足跡をフランスに止めざるに至り、イギリスはフランス國內に於て只カレーの一地を有するのみとなるに至れり。この後、イギリス王は猶屢々フランス王位の權利を主張し、時々領土の恢復を計企せざりしに非りしといへども、偶イギリスは、ヨーク、ランカスター二家王位相續の争あり(薔薇戰爭)紀元一千四百八十五年、チウードル家のヘンリ出て之を統一するまでは、國內擾亂の爲に力を外に盡すこと能はずして止みき。是に於てかフランスの統一次第に成就し來りて、他日ヨーロッパに冠たるの基を開くに至れり。

トイツはハツプスブルク家のルトルフ王位に上りし後といへども、法皇及諸侯の權力盛にして王室の勢力甚た振はす、爾來數十年の間、帝王皆諸家より出て、王位を二世に傳へしものなし。アルブレヒト一世の如き、法皇ボニハアチオ八世と争ふにラランス王フィリップ四世に結び、ライン諸侯を征服し、ライン河税を高めて自由市を困め、以て帝權の擴張を計りし者なきに非ざるも、イタリア諸市は猶トイツに服せず、スウイスは合同して獨立を企つるあり、帝權は容易に伸張せら

るに至らざりき。然るに一度法皇ローマを去りてアビニオンに遷り、フララス王の權下に屬するに至りては、法皇の勢力は自らドイツ諸侯に認められざるに至り皇帝の權漸く伸張せらるゝ傾向を現すに至りぬ。されはルイス王は法皇ヨハチ十二世の破門を受け法皇に皇帝より即位式を行ふことを得ざりしに關らず、撰舉侯等はレニゼの地に會して、法皇の即位式を受けざるも正當なるローマ皇帝たることを布告するに至りたりき。ついで博學なるカロロ四世カルクセンブルク家より出て、王となるに至りては、帝王の權漸く盛にして、久しくドイツより離れたるイタリアを征服してロンバルト同盟を屈從せしめ、また屢々スウイス同盟征討を企てし紀元一千三百五十六年には、ゴルデチブレ(憲法)を發布し、國會を開き、マインツ、トリエル、ケルン(以上僧諸侯)ボメミア、ラインハラチチート、サクス、ブランデンブルク(以上俗諸侯)の七人を撰舉侯と定め、ドイツ皇帝撰舉の權利を有するものなることを表示したり。是より先き、紀元一千三百七十六年、法皇グロツォナ一世死し、ローマの法皇廷内閣員はウルパン六世を撰び、アビニオンの法皇廷内閣員はクレメンヌ七世を撰び、フランスはタレメンヌを助け、イギリスはウルパンを助け、茲に相争ひしが、二法皇の死するに及び、各人徒黨をなして法皇を立て、各其奉ずる所を擁して混純たる形勢を示すに至りたりき。シギスモンド立て皇帝となるに及び、是等法皇の争鬪を鎮めんと欲し、紀元一千四百二年、宗教會議をビサの北に召集し、兩法皇を廢し別にアレキ

サンドル五世を立てぬ。然るに兩法皇は之を肯せざりしを以て、時に三法皇を見る有様となれり。依て法皇等はレギスモンドと計り、更に紀元一千四百十五年、宗教會議をコンスタンスに開き、其結果三法皇を廢し別にマルチン五世を立てることなせり。かくして法皇の抑壓せられしドイツ帝は、また法皇を左右するに至り、ドイツ帝の權勢は、益々伸張せらるゝに至りしかど、この後、ドイツは宗教上の争論を生せしが爲めに暫らく國內の統一を見ること能はざりき。

十字軍後、法皇の權力は、イギリス、ドイツ、フランス諸國に於ては、非常なる衰頽を見たるにあらず獨りイスパニアに於ては、大に之と異なる事實を現出したり。是實に奇異の感なきに非ずといへども、全く當時イスパニアの形勢の他三國と異りしか故にてありき。即ちイスパニアは未だ全然クリスト教化されたるものに非ず、イスパニアを統一するにはマホメット教徒と争ふの必要あり。而してマホメット教と争ふには宗教的統一を急動としたればなり。故にイスパニヤ諸王は他諸國王の如く法皇權に干渉するをなさず、専ら貴族の權利を壓服して、王權の伸張を計るに勉めたりき。十字軍以來イスパニアにはかの他クリスト教國は猶永續して、グラナダあるアホメット教國に對峙し、其勢力を維持したりしか、十字軍後に至りアラゴンは紀元一千三百四十八年、ベドロ三世に至り、大に帝權を擴張し、高等法院を設けて王と國會との争論を決することなし、ついでナバラを併せて其領土を増加したり。カスチラは紀元一千三百四十年アルフォンゾ十世に至

り、全くアラビア人の勢力を挫き、ジオアン二世に至りては、大に貴族の權を奪ひたり。ポルトアルは紀元一千三百八十五年、ジオアン大帝の王位に上るに及び、漸く帝權の強固を來し、アフリカなるサラセンの領土を征し、王子ドンチャンリはアフリカ海岸航海の企てをなし、紀元二千四百八十七年には、遂にアフリカを周航するを得、國力强盛の基を開きぬ。而して紀元一千四百六十九年、カスチラの王女イサベラとアラコンの王子ヘルチナントと結婚し、紀元一千四百七十九年、兩國の合同成なるに及びては、カスチリの勢は隆盛なるものとなるに至りぬ。是に於てヘルチナントは騎士組合の勢力を増加して以て帝王に從屬せしめ、各市の自由合同を興して以て貴族の權を制限し、法皇の許可を待て異教審問所を設け、トミニカン僧トルケマダを擧て長官とし、盛に異教徒の焚刑を行ひぬ。かくて紀元一千四百九十二年に至り、クラナタを改めて最後の王アダラを追ひ、全然イスパニアを統一したり。

文藝復興

其六 文藝復興

イタリヤに興りたりし、幾多の都市は、其後益盛運に趣きたりしか、既にして或は侯國となり、或は共和國となり、各自特殊の發達を遂くるに至れり。而して是等幾多の都市が互に對立して競爭せし結果は、かのギリシアの諸市が、互に獨立して競爭せし結果と全しく、文藝上、商業上、また政治上に、著しき發展を現すに至り、やがてイタリヤ人は、滅亡に向ひつゝありし、ギリシ

ア人、アラビア人等に代りて、ヨーロッパ文藝の保持者たる地位に立つに至りぬ。

西ローマ帝國滅亡以後は、文學は専ら僧侶の事業となり、僧侶は總ての文事に參與して、常に宗教上のみならず、政治上、社會上にも大なる勢力を有するものとなれり。凡そ東ローマ帝國にありては、ラチン語は、單に、官語、文章語としてのみ用ひられ、談話語は、全くギリシア語のみを用ふるに至りしに係らず、平和の時期持續したるを以て、俗人間に於ける文學の研究は、其跡を絶つに至らざりき。されど舊西ローマ帝國にありては、ラチン語が、既に宗教學術の方面にのみ用ひらるゝに至りても、未だ言語の統一なく、共通の談話語興らず、加之外人の侵入常なくして、俗人の軍務に従事すること多かりしを以て、文學は自然僧侶の手中に獨占せらるゝ状態なりき。然るに十字軍は、イタリヤの人民に、ギリシア人、アラビア人等の文明と接觸する機會を興へ、彼等をして文學研究の念を起さしむる動機となりしのみならず、此後イタリヤに於ける諸市の盛運は、益々彼等をして物質的満足より轉じて精神的満足を得んとする希望を高からしむるに至れり、即ち彼等はラチン文學より初めて終にギリシヤ文學の研究に入りぬ。

紀元十四世紀の交に至りては、イタリヤに於けるギリシヤ古文學の研究の風は、甚だしき盛況を呈するに至れり。彼等は特にギリシアの學者を招聘して、ギリシア語を學び、進んでギリシ

ア人、ローマ人等の著述の研究に勉めたり。是に於てか、アリストテレス以下、ギリシア、ローマの諸學者の哲學、プトレマイオスの地理學、ガレノス、フィボクリテス諸氏の醫學、エウクリデスの數學等は、皆彼等の研究を受くるに至りぬ。彼等は概ね自由教育を以て其主張とせしを以て、後世フマニストの稱あり。然れども當時の學徒風は、常にギリシア、ローマ兩國の著書を了解せんとするに止り古人の範圍を脱して自説をなすか如きは、彼等の夢想たもする所に非りき。要するに此時代は全くギリシア文學の復興に過さざりき。依て此時代を稱して「文學復興」の時期といふ。復興はたゞに文學の上にと止らず、更に藝術の上にも現れたりき。ギリシア、ローマの古藝術を見て之を復興せんとする氣運は、藝術家の間にも盛なりき。この復興の氣運は、幾多の畫家、建築家、彫刻家を産出するに大なる効力を有したりき。かのラファエロ、ミケランジェロの如きは、實に此時代に出たる最秀れたるものなりしなり。依て美術上この時代を稱してルネサンス（文藝復興）時代といふ。かくして、久しく僧侶の掌中において、僅に生命を維持したりし文學美術は、イタリアに於て、再び其姿を現したり。イタリアは他のヨーロッパ諸國に先ちて、中世に於ける文藝の中心となりたりき。然れども文藝の復興の潮流は必しもイタリア一地方に止りしに非ず、其他のヨーロッパ諸國に於ても、其勢力を脱出すること能はざりき。十字軍後、ヨーロッパ諸國民は、イタリア人と全しく、ギリシア人、アラヒア人等の文

明に接觸して、文學研究の念を起さしめぬ。かくしてラテン文學の研究は各國に起り、大學は各國に建設せらるゝに至りぬ。就中ドイツの如きは、大學の建設甚だ盛にして、紀元十五世紀の交に於て既に十數に上るに至りたりき。而して此等文運の興起は、更に宗教の上に非常なる影響を與ふることゝなるに至れり。

凡うイタリアに於けるフマニストは、所謂自由思索家ありき。彼等の主張は教會に對する學問の自由にして、專權なる法皇にとりては、甚だ危險なるものにてありき。されど當時イタリアに於ける法皇勢力は、他諸國に於けるか如くに衰へざりしを以て、彼等の主張は元來甚だ改革的なるに關らず、彼等の行動は極めて穩和なりき。然るにイタリア以外の諸國に於ては、形勢大に之に異なり、學者の多數は熱心なる自由思索者にして、確固たる主張と劇烈なる行動とを以て、從來教會か主唱したりし教理、教會か規定したりし儀式に對して、學理上より其誤謬を正し、根本的改革を宗教上加へんと試みたり。かのドイツブラーグ大學の教授、フッスの如き。イギリスのウイクリフの如きは、共に十五世紀の終に出て學者改革の説を唱導したるものなりき。かゝる彼等は實に近世の初に於ける宗教大改革の事業の先導をなしたるものにてありき。

文運復興の影響として現れたる著しきものは、幾多の發明事業なりき。紀元一千三百一十年、フ

ラビオギオジャは羅針盤を發明し、紀元一千三百五十四年、ベルトホルジシユワルツは火薬を發明せり。此等は共に重要な發明にして、一は航海術に、一は戦術上に一大紀元を劃するものといふも過言に非ず。而して最注意すべきは、紀元一千四百五十年、ジオアンラーテンベルグが印刷術を發明せることにして、その發明によりて如何はかり文藝の弘布を助けたる功力の偉大なりしかは、多言を要せずして明なることなりとす。

其六 トルコ人の侵略

紀元一千二百二年、東ローマ帝國は、ラチン民族の征服する所となり、ラチン帝國は、一時東ローマ帝國に代りて、其領土を支配したりしか、紀元一千二百六十年、パレオロゴス家起るに及び、分裂せる國內を統一し、東ローマ帝國を復興したり。然れども新東ローマ帝國は、僅かに舊東ローマ帝國の一部分たりしのみならず、常にセルジュクトルコ部族の侵略を蒙りしを以て、其國勢日に益々衰頹し、終にオスマントルコ部族の攻撃によりて、滅亡を告ぐるに至れり。紀元十三世紀の末、セルジュクトルコ部族か、蒙古民族の興起によりて、其勢力に失ふや、セルジュクトルコ部族の傭兵たりしオスマントルコ部族は、其酋長オスマン(幹都蠻)を奉して獨立し、以前セルジュクトルコ部族の領有したりし小アジアの土地を征服し、トルコ帝國の基礎を廣めたりしが、(紀元一千三百年)。ウルバンに及びて領土内に住するクリスト教徒をして、七

才より十四才に至る強健なる小兒を貢進せしめ、之に施すにトルコ風の教育を以てし、其長ずるに及びては、之を歩兵(イエニチエリ)或は騎兵として國務に服せしめ、又は文官として内政に従はしめ、其國家に功績あるものは、之を各地に封侯し、以てトルコ特有なる、武斷的、專政的、封建的の國家を建設したり。是よりオスマントルコ人の勢力は、甚だ強大にして、切りに東ローマ帝國の領土を略し、紀元一千三百六十一年ムラドの時には、首府をアドリアノーブルに遷し、東ローマ帝國の首府なるコンスタンチノーブル附近の幾多の土地を領し、紀元一千三百九十六年、バヤゼット五世の時には、スラブ民族の領土たるセルビア、ブルガリアの地を経て、ハンカリアの地を侵すに至れり。是に於てか東ローマ皇帝マヌエルは、ハンカリア王ジキスムンドと連合し以て大にトルコ民族の勢力を挫かんと欲し、ドイツ、フランスの騎士と共に、ドナウ河附近なるニコポリの地に陣し、之を迎ひ戦しも、却て其破るところとなり、今やキリスト教國はマホメット教徒の蹂躪に委せらるべき有様を見るに至りたりき。然るに偶々東方に蒙古の一族たるチムルの大に興るあり、天下の形勢は、少からざる變動を受くるに至れり。チムル(帖木兒)(自紀元一千三百三十六年—至全一千四百五十年)は、蒙古汗國の一たるチャカタイ汗國(茶合帶)より現れぬ。彼は前古比類なき武人的、外交家的天才を有したる人にてありき。彼はこの天才を以て大帝國建設の事業を企てぬ。紀元一千三百七十年、彼は先づチャカタイ汗

國を一統し、ヘルシア國及びキプチャク汗國を併吞し、遂に紀元一千四百二年、オスマントルコのバヤゼットの軍をアンゴラの地に擊破し、遂にインドを征服して、蒙古大帝國を創め、デルヒに於て帝位に上り、サマルカンドに近きケシユの地によりて全帝國を統治したり。この蒙古大帝國の勃興は、トルコ國に對しては、大なる損害を興へたりき。曾てセルジュクトルコは、蒙古人の勃興によりて受けたると略同様な影響を、オスマントルコは蒙古大帝國の興起によりて受けざる可らざりき。然れども蒙古大帝國の時は極めて短時期の間にして、紀元一千四百五年、チムルの死するや、蒙古大帝國は全然瓦解し、オスマントルコは、再び直ちに、小アジアヨロツバに於ける古の勢力を恢復することを得たり。

紀元千四百四十四年、ムラド二世は、バヤゼットの業を嗣てホンカリア侵入を企て、フンヤートの地に戦ひ、大にホンガリア人を破りぬ。依てホンカリア人は、嚴にドナウ河沿岸を警固し、東ローマ皇帝は、ローマ法皇に教會合同の議を提出し兩クリスト教國の力を以て此危難を救濟せんと企てしか、フレンツエの合同條約は、東ローマ僧侶及市民の爲に容るゝ所とならず、未だローマ法皇エウジエニオ四世は、各國に檄して、十字軍興起の事を説きしといへども、法權隆盛の時期は、既に去りて、更に其功果を治むる能はず、僅にイタリア國內に少數の義勇兵を得たるのみなりき。故にトルコの勢力は益々隆盛にして、紀元一千四百五十一年、マームド二世の位

につくに及びては、遂に全軍を擧げて、東ローマ帝國の首府たるコンスタンチノブルを圍むに至れり。東ローマ皇帝は、種々手段を盡して、防禦の方法を講せしにも關らず、首府終に陥り、パレオロゴス家最後の王たるコンスタンチン十二世は劍を手にして死しぬ。時に紀元一千四百五十三年五月廿九日なりき。是に於てか東ローマ帝國は全く滅び、コンスタンチノブルはトルコの首府となり、聖ソヒヤの大伽藍はマホメット教の僧院となりぬ。ついでバヤゼット二世に至り、モレア半島に於けるベチチャの領土を略し、セリム一世に至りて、シリヤ、エチプトを征し、ヨロツバ及びアジアに跨れる大なるトルコ帝國を見るに至れり。是よりヨロツバ、アジア間の商權は全くトルコに歸するに至り、イタリア諸市の商業は非常なる大打撃を受くるに至りぬ。

第三章 西大陸發見

西大陸發見

紀元十四世紀の頃、ポルトカルの皇子ヘンリーは、北方アフリカに住するマホメット教徒を征服せんと欲し、天文臺、海軍兵學校等を設立して、航海の業を奨励し、北方アフリカに向て地理的探究を企て、遂にアフリカ西端なるベルテ岬(北緯十四度四十五分、西經十七度三十二分)に達し、各地理學者の識らざりし土地を發見するを得たりき。是蓋し大陸發見の端緒といふべきものなる可し。而して當時歐亞の間に於ける商業貿易の隆盛は、更に世人をして未知の新航路を發見し、其利益を壟斷せんとする念を起さしめ、延て西大陸發見の大事業を成就せしむるに至らしめぬ。

さきに十字軍が歐亞交通の媒介をなせしより、地中海は外國商業の要路となり、ジエノバ、ウエチヤ等のイタリア諸市は、印度貿易の商權を握るに至り、北海、東海、太平洋沿岸の諸市は、皆この新商業的生活の潮流の露す所となれり。然るに印度の商品類は、概ねマホメット教徒の專賣に屬し、エチプトの سلطان は之に課する重税を以てしたるを以て、此等商品が其仲買人たるゲヌア、ウエチヤ人等の手中に入るに當りては、殆んど原價の三倍以上の價格を保つに至り、ヨールロッパ諸國民の之を彼等より購入するには莫大の資力を要したりき。是に於てかヨールロッパ諸國民は、地中海以外に他の航路を得、ジエノバ、ウエチヤ人等の仲買人の手を経ずして直接に東洋貿易に従事せんことを希望するに至り、茲にポルトガル人は、ヘンリーが保檢したる航路によりて、アフリカ大陸の周航を企つるに至りぬ。かくて紀元一千四百八十年、ポルトロメヂアズは、アフリカの南端なるトルメント岬（ジオアン二世之を喜望岬と命名せり）に達せしが、紀元一千四百九十八年、バスコダカマは、アフリカを周航して印度に着し、新航路發見の業を成就したり。

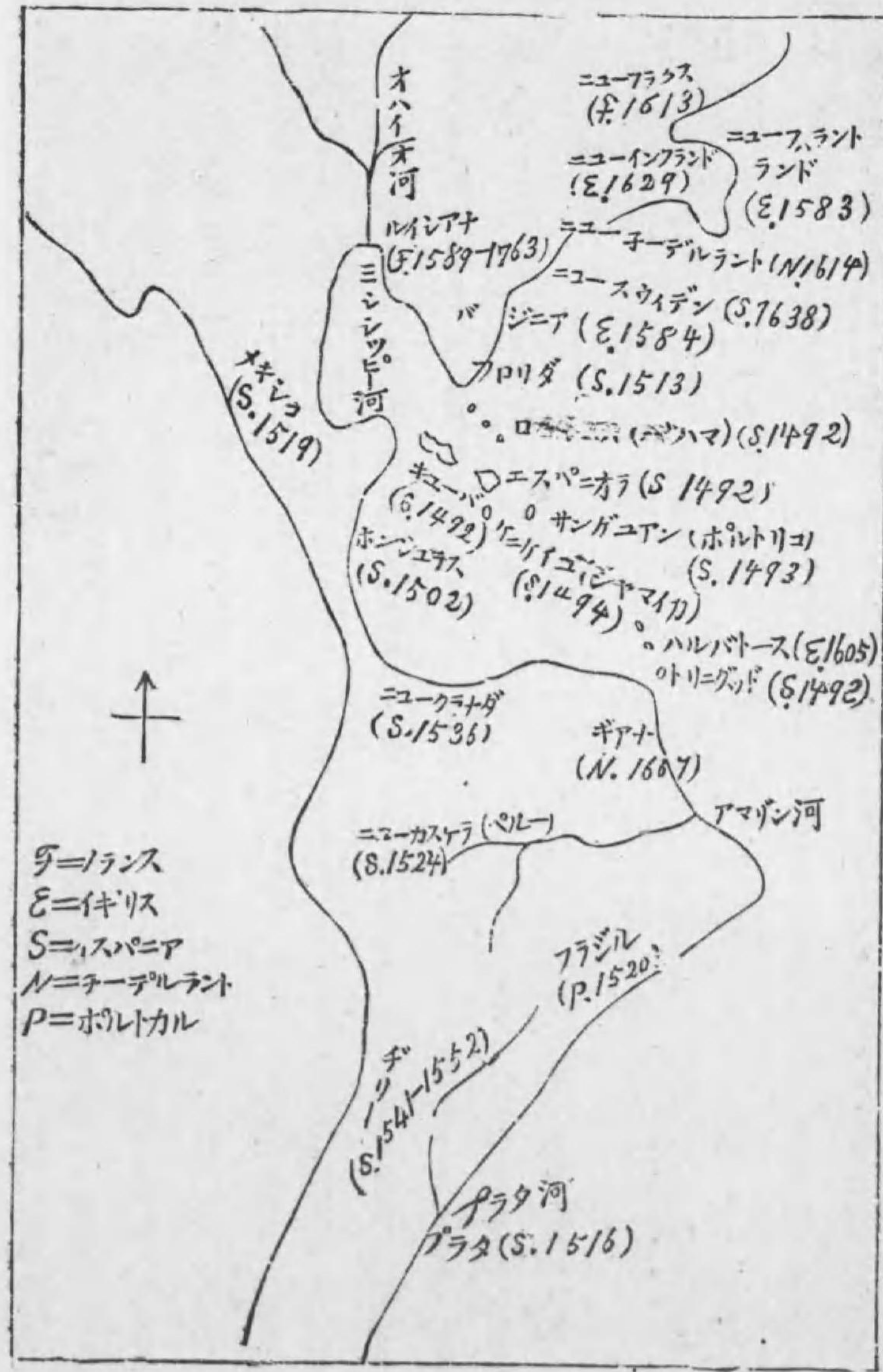
かくポルトガル人等が、切にアフリカを周りて、印度に至るべき新航路の探究に従事しつゝありし時に當り、ゲヌアの人キリストホコランバスは此新航路に優れる最近航路の存在することを主張し、諸國王の贊助を請求したり、ポルトガル王はこの企圖を顧みざりしも、イスパニアのへ

ルチナンド王及イサベラ女王は大に之を賛し、船舶三艘を給して新航路發見の途に上らしめぬ。紀元一千四百九十三年八月三日を以て發し、十月十二日に至りて一小島に達しぬ。是即ちサンサルワトルなり。其後紀元一千四百九十三年、再び同方向に航し、ヂャマイカ嶋に達し、紀元一千四百九十八年には、南アメリカのオリノエ河口に至り、紀元一千五百〇二年には、中央アメリカに着したり。即ち彼は其目的たる印度の新航路を發見する能はざりしといへども、是によりて未だ全く知らざりし西大陸の發見を爲すことを得たり。（この大陸は、其後新大陸を最初に紹介したるフロレンスの旅行家アメリコウスブケの名を取りてアメリカと稱せらる）この事實のヨールロッパに傳らるゝや、發見の熱は愈盛となり、ポルトガル人及びイスパニア人は、皆争ふて未知の陸地を發見せんとし、幾多の冒險家は踵を接して輩出するに至り、紀元一千五百年、カブラルは南アメリカに航し、ブラジルの地を發見し、マガリアエンスの如きは、各方未知の地を探究しつゝ、三年に渡る大航海を試みたりき。自一千五百十九年―至一千五百二十二年）

新大陸の發見に伴て殖民事業大に勃興したり。ポルトガル、イスパニア二國の民は、競ふて新大陸に移住し、忽ちにして幾多二國の植民地は新大陸に設立せらるゝを見るに至りぬ。而してこれら二國が互に自己の植民區域を廣めんとする結果は、二國をして衝突せしむるに非れば止まざるの勢を成せり。是を以て紀元一千四百九十三年に至り、法皇アレキサンデル六世は、二國の間に

仲裁を試み、二國植民地の領界を規定せり。即ちケーブベルテ島の西一百リダ（後三百七十リダに改む）に一線を劃し、其西方に發見せらるる物を以てイスパニア領となし、其東方に發見せらるる物を以てポルトガル領となしぬ。然れども元來ポルトガルはイスパニアの如く、本國內に於ける人口甚だ夥からず、從て植民地經營には極めて不適當なりしを以て、ポルトガル人は自然植民地經營をすて、専ら商業に従事するに至れり。故にポルトガル人は印度商業の上には大勢力ありしに關らず、新大陸に於ては其勢甚だ振はず。イスパニアは西印度諸嶋、メキシコ、ペリウの諸國を領せしといへども、ポルトガルは只ブラヂルを領したりしのみにして、植民事業の勝利は全くイスパニアに歸しぬ。而して此イスパニアが新大陸に於ける植民事業に成功せしことは、やがてイスパニアが、近世の初に於て、他諸國に先ちて大勢力を有するに至りし所以なりき。

ポルトガル、イスパニア二國の新大陸に於ける植民事業の隆盛は、他日北方ヨーロッパ諸國をして熱心なる經營を新大陸に行ふに至らしむ。されど北方ヨーロッパ諸國は、當時未だ大に手腕を大陸に振ふに至らず、紀元一千四百九十七年、イギリス王ヘンリーロツバ諸國は、當時未だ大に手腕をカボットをして、北西方よりして印度に至る航路を發見せしめ、以てイスパニア人か南西方よりして印度に至る企に先せんと欲し、北方アメリカを發見して、に殖民地を設け、紀元一千五百八十九年の頃、フランス王ヘンリー四世は、其後を受けて、セントローレンス、ミシシッピ河岸に植民地を開きしも、此等植民地の發展は、皆何れも後世のことにありき。



近世史

第一章 イスパニア

其一 イスパニアの興起

イスパニアの興起

イスパニアに於けるアラゴン、カスチラ二國は、マホメット教國の遺物たりしグラナタを陥れて、略は全國を統一したるを以て、更に政治の中心たるイタリアに向つて其勢力の擴張を試みるに至りぬ。而してイタリアに對する勢力の擴張は、隣國なるフランスとの衝突を免るゝと能はざりき。紀元一千四百九十四年、フランス王カロロ八世は、ミラ侯國及びナホリ王國の主權を主張してイタリアに侵入したりしか、紀元一千五百九年、フランス王ルイスカ、再々イタリアに入寇するに及び、アラゴン王ヘルチナンドは、之に對して強固なる抗議を申込み、ミラノ侯國及びナポリ王國は、フランス、アラゴン二國の間に分離せられざる可らざるを主唱し、紀元一千四百十九年、遂にレウスはミランを得、ヘルチナンドはシチリヤナホリ王國を得たり。後紀元一千五百八年、フランス王レウス、皇帝マキシミアン、法皇ユリウス二世等、カンブレーに會してベネチヤ分割の約を結ぶことあり、既にして法皇約に反きて神聖同盟を結ひ外人を國外に追はんとするに及びヘルチナント王は法皇と全盟してレウスに抗し、大に其破る所となりしも、紀元一千五百十二年

には、ヒレニー山の南なるナバラ王國を征し、ポルトガル以外、半島の全部は其有に歸し、更に新大陸を發見して、幾多の植民地を開き、イスパニアの勢力は、日に益々盛にして、漸く先進國たるフランスをも凌駕するの勢を示すに至りぬ。而して紀元一千五百十六年、カロロ一世アラゴンの王位に上るに及びて、イスパニアは明かにヨーロッパに於ける最優勢なる國となりぬ。

カロロ一世は、アラゴン王ヘルチナンドの孫にして、アウストリヤの王子フィリッポとカスチラの王女ジョアンナとの間に生れたりき。然るにフィリッポはチーテルランドを領したりしブルクンド國の女王と皇帝マキシミアンとの間に生れたる故を以て、チーテルランドとブルクンドの王位を得たり。而してジョアンナはカスチラの女王イサベラの死するに及びて其後を受けたり。依てカロロは、父の故によりて、チーテルランド王ハブルグンド伯を受け、母の故によりて、アスチラの王位を受けたりき。而して更に祖父の故によりてアラゴン、ナポリ、シチリアの王位を得ぬ。其領土の廣き其權勢の大なる、ヨーロッパ諸國、之に比肩すべき者あらず、イスパニア國の熾なる實に想ふべきなり。既にして紀元一千五百十九年、皇帝マキシミアン死するに及びてドイツの撰帝候は彼を推薦して其後を襲はしめぬ。依て皇帝カロロ五世と稱す。

イスパニアの急劇なる膨脹は、フランスの忍び得べき所に非りき。フランス王フランシス一世は、カロロの皇帝なるを拒みて、久しく其位置を争ひしか、紀元一千五百一十五年、イタリアに侵入

して、先に獨立したるミラノ侯國を復し、ナポリ王國を略奪せんと試みぬ。然るに紀元一千五百二十五年、バヒアの一戦にカロロの捕ふる所となり、ミラノ侯國は再び設けられて皇帝保護の下に屬することとなり、是よりカロロの勢力は益々イタリアに振ひ、紀元一千五百二十七年には、ローマも其占領する所となるに至りぬ。是より先き、フランシス一世はカロロ五世と和議成り、フランシス一世は、爾後ナポリ王國に對する要求をすて、フランダー地方の自由を許すことを約し、本國に歸りたりしが、未だイスパニアに對する猜忌の念を止むること能はず、此年イタリアに侵入してナポリ王國を襲ひたりき。後紀元一千五百三十六年、ミラン侯の死するに及び、またミラン侯國に關する要求を提出し、遂にトルコのソリマンと連合し、トルコをしてイタリア海岸及びドイツ國境を襲撃せしめ、己は直ちにミランに侵入したり。然も遂に其効を收むるに至らず、紀元一千五百四十二年、再びトルコと共にイタリアを侵せしが、却てカロロ五世の破る所となりぬ。かくてイタリアに於ては、フランスは常にイスパニアの破る所となり、イスパニアの勢力は遙かにフランスに優りたりしといへども、ドイツ地方に於ては、外はトルコの頻繁なる侵略によりて、平安を得ず、内は宗教改革の運動漸く盛にして、擾亂絶ゆる時なかりしを以て、紀元一千五百四十二年、カロロ五世はフランシス一世と、クレスヒーの地に會して和議を結び、久しく結んで解けざりしイスパニア、フランスの争は、一時其終を告ぐるに至れり。而して此和議の結果

は、フランシス一世の二皇子オルレアン公とカロロ五世の皇女との結婚成りて、オルレアン公はミラノ侯國を有することとなり。然れどもオルレアン公の死後は、ミラン侯國は、再び皇帝の所有に歸するに至りぬ。

其二、ドイツに於ける宗教改革

フマニスムの學風は、常にイタリアに於て盛なりしのみならず、北方ヨーロッパに於ても、決して是に劣る所なかりき。ドイツのロイヒタン、フツテン、イギリスのジオアンコーレット、トマスマーア、フランスのレヘーブル、チーラルランドのエラスムスの如きは、實に北方ヨーロッパに於けるフマニストの諍々たるものなりき。就中其最も有名なるものをチーデルラントのエラスムスとす。彼は當時フマニストの先導者といはれ、フマニストの公子といはれ、フランス、イギリス、ドイツ各國に其名聲を博したりき。彼の最注目すべき事業は、新約聖書のラチン譯にして、是により俗人は僧侶の手を経ずして、キリスト教を學ひ得るの便を得たり。彼の目的は、専ら教育によりて當代の文明を高からしめ、教會を破毀することなくして是を改革するにありき。彼の一派は皆温厚なる學者なりしを以て、急應なる革命運動の起るに及びて、却て舊教會に復讐するに至りたりといへども、宗教改革の根底は實に彼の一派によりて定られたるものなりき。而してこの主義を襲てこの大業を完成したるものは、マルチノルーテルなりき。

マルチノルーテルは、紀元一千四百八十三年十一月十日チウーリンゲン州に生る。農夫の子なり。父は彼を法律家たらしむべき目的を以てエルフルト大學に送りしか、紀元一千五百五年、彼は自らアウクスチン組合に投じて僧侶となりぬ。紀元一千五百十年、アソリツク教の首府たるローヌに旅して大に感ずる所あり、歸國以來専ら心をキリスト教的生治に關する問題の研究に専ら、聖アウクスチン以下諸聖の著書を受讀し、遂に「信仰によりて義とせらる」といへる新教教會の根本教義を發見するに至れり。既にして紀元一千五百十七年、ドミニカン派の儒ジョアンテワツエル法皇の免罪狀を持てサクソニアに來り、其價格に應じ、種々の罪惡に對する賞罰を免除する効あるを説き、之を人民に賣與す、是れ法皇レオ十世か之を以て戦費及ヘテル寺院の建立に供せんと企てたるなりき。時にルーテルはサクソニアにあり、ウイテンベルヒ大學に教授たりしか。此鄙陋なる法皇の行動を見て大に決する所あり、紀元一千五百十七年十月三十一日、この有名な免罪狀に反對する九十五箇條の論文をウイテンヘルヒ寺院の門戸に掲示したり。彼はこの論文を公示するに當りて猶教會の子の名稱を用ふるを厭はさりき。蓋し彼の志は決して教會の破壊に非ずして教會の改善に存したりしや明なり。然るに紀元一千五百二年、彼か法皇權は聖書に基かさる篡奪なるを主張し、法皇レオ十世は大に憤り、異教徒として破門の令狀を下すに及び、ルーテルは其令狀を投し、やかて法皇の教書を、ウイテンベルヒ門前、黨門生集合の中に焼けり。今

や、彼は教會改造の計をすて、新信仰を建設するの止むを得ざるに至りぬ。而してサクソニア侯を初めドイツ國民の熱心なる同情は彼か身上に注かれぬ。紀元一千五百十九年、祖父マキシミアンの後を受けたる皇帝カカロ五世は、ドイツの國狀を定めんが爲めイスハニアよりドイツに至る迄ライン河の沿岸なるウオルムスに議會を召集し、序を以てルーテルを召して其行爲を辨せしめぬ。皇帝カカロ五世は、決して彼が往還を妨げざる保證を與へたりしといへども、彼の友人等は切りに其出發を危みたりき。然るにルーテルは更に之を意に介せず、紀元一千五百二十一年四月十七日を以て、ウオルムスの議會に現れたり。議場の光景は大にドイツ人民の注意を引きし所なりき。ルーテルは遂にカカロ五世の前に屬すべきか、否らず、彼は彼の教義を縷陳し、悠々として議場を去りぬ。是に於てかドイツ人民の彼を賞讃する聲は響の如く、彼の名聲は忽ちにして全國に廣かるに至りぬ。されどサクソニア侯は彼が身上の危難を慮り、彼をしてワルトブルヒの城内に隠棲せしめぬ。かくてイタリアに於けるフランスとの競争上、法皇の力を借るゝに急なりしか。カカロ五世は、ウオルムスの勅令を發して、ルーテルの行爲を責め、其著作を停め、ドイツ人民の新説を奉ずることを禁じたり。然れどもドイツに於ける宗教改革の運動は、かゝる一篇の勅命によりて禁絶せられ得べきものには非りしなり。

ルーテルのワルトブルヒの城内に隠棲するや、ウイデンベルヒ市に於て、急烈なる宗教運動起り

各自豫言者と稱し、教會の尊崇する畫像を破毀すべしと主張して、暴行を逞ふし、遂には地方農民の政治上、社會上に自由を得んとするを煽動し、其主君を殺戮し、紀元一千五百二十五年の頃には、ドイツの中央部及び南西部は甚だしき擾亂を極むるに至りぬ。時にカロロ五世はイタリアにありフランス一世と争ひしが、此報を得るや、急にカングレーの和議を結びてドイツに歸り、紀元一千五百二十九年、議會をスバイエルに開きぬ。されど彼は從來イタリアにあり、宗教運動の經過に關しては、十分なる智識を有せざりしを以て、總ての宗教運動は皆ルーテルに出るとなし、此議會を開くや、カソリツク、ルーテル二派の諸侯を會して、ウオルムス勅令のドイツ一般に施行さる可く、革新の運動の廢止せらるべきを命したり。是を以てルーテル派の諸侯は大に皇帝に反抗し(依てプロテスタントの稱を受く)、ルーテルの友人メランヒトンの書せる「アウクスブルグの告白書」を捧げて、ルーテル主義の毫も國家に有害なるものに非ざるを論し、皇帝の壓服を恐れて、宗教同盟を結ひたり。是をシユマルアルデンの同盟と稱す。或はフランスの援助を乞はんとの説を主張するものありしも、ルーテルは之を以て反逆の行爲となして拒絶したり。然るに久しからずして再びフランスはイタリアを侵せしを以てカロロ五世はドイツを去らざる可らざるに至りぬ。

カロロ五世のプロテスタントに對する壓服の計畫は、常にフランスのイタリア侵入によりて妨げられ、彼未だ十分なる打撃を加ふるに至らざりき。故にカロロは斷然ドイツに於ける異教徒を滅絶して擾亂の跡をたんと欲し、紀元一千五百四十四年、クレスヒー和議を結て、フランスに大讓與をなし、やがてプロテスタント諸侯及プロテスタントの市に對して、専心戦争の順備を始めた。依てシニマルカルテン同盟は、又武装して防禦の計をなしぬ。ルーテルは同胞の既に干戈に訴ふるを見て、憂懼措く能はざりしか、終に紀元一千五百四十六年、ルーテルの没年、兩者の戦は開始せらるゝに至りぬ。サクソニア侯ジオアンフレデリツキはプロテスタント派に將としてミュールベルヒの地にカロロ五世と戦ひしか、彼の親戚なるアウリスの反意によりて一撃の下に其破る所となりぬ。然るにカロロの戦を終りて、カソリツク、プロテスタント二派の合同を試みんとするや、マウリスは直ちに兵を擧げて之に反し、ドイツ全國また之に應じて起り、カロロ五世はマウリスの手に捕はるゝ許となれり。是に於てカロロは遂にプロテスタントの勢に抗す能はざるを見、紀元一千五百五十五年、アウクスブルクに宗教會議を開きて、二教共に全等なるものとし、久しく亂れたりし宗教上の争を終りたり。然れども是れ未だ實際の宥怨といふ可らず、たゞドイツ國內の各州の政府は其好む所に從て其宗教を採用するを得るといふに過ぎずして、各個人の宗教は猶ほ其領屬する州政府の干渉を免るゝこと能はざりき。

ドイツに於てルーテルか宗教改革を唱へしより少しく後、スイスの東方(當時ドイツの一部)

ジウチープに於て、ジ・オ・ア・ン・カ・ル・ビ・ン、宗教改革の運動を起したり。彼は紀元一千五百九年フランスのピカルデーに生れ、オルレアン、パリ等にありて法律を學ひしか、新信仰を主張せし故を以てフランスを逐はれ、ドイツ、スウイスの諸國に流寓して、著述に従事したりき。然るに偶々スウイスに宗教運動起り、其主領たりしフアーレルは助をカルウインに求むるあり。カルウイン初めは、其身兵士に非ずして學徒なる故を以て之を辭せしも、更に安慰を求めて神の爲に戦ふ意なきかを難せらるゝに及び、奮然として、ジウチープ新教黨に投し、遂にプレスヒテリアン式の宗教政府を建設し、自己の宗派を確立したり。是よりカルビンの名聲は遠くヨーロッパ諸國に轟きジウチープは一時、本國を放逐せられたる新教徒の隠所となるに至りたりき。而して未だスウイスに於てはカルウインより早く、ルーテルと時を全うして起れるウルリヒツウ・イングリあり。彼は紀元一千五百一十八年、ルーテルと全しく贖罪狀に對して抗撃を企て、當時スウイス文化の中心たりし、ヂウーリツヒに至りて改革の旗を擧げたりき。スウイス諸州は山間僻陬の地多く文化普からざりしを以て、其主張の容れられしは只ヂウーリツヒ、ベルンの二州に過ぎざりしも、其勢力は甚だ盛にして、遂にドイツと全しく、各州自由に信仰を定むることとなりたりき。之を要するにルーテル、カルウン、ツウイングリ三人は、新信仰の主張者なりき。而してツウイングリーの主張はたゞスウイス一國內に止りしといへども、ルーテル、カルウインの唱導は、

最多くヨーロッパ諸國の宗教思潮上に影響して、デンマルク、スウイデン等北方諸國の新教徒は、皆ルーテルの教を奉し、フランス、チーデルランド、スコットランド諸國の新教徒は、カルウンの教を受くるに至りたりき。

其二 チーデルランドの獨立

現代オランダ、ベルギー、二國を含めるヨーロッパ北方の地は、遙かに水平面にある故を以て、チーデルランド(低地)の稱を受け、中世には各々主權を有して獨立せる幾多小邦の存するあり。後ブルグント侯國の盛大なるに従て、其領有する所となりたりき。ついで紀元一千四百七十七年、ブルクント王カロロ死し男系絶ゆ、フランス王ルイス十一世が、ブルグント侯となるに及び、チーデルランドはカロロの姝なるマリアの掌中に歸し、遂に夫たる皇帝マキシミアンを経て、皇孫カロロ五世に渡れり。この地古來南北人種を異にし、南にはケルト人あり、北にはチュートン人あり、多く農業漁業牧畜を以て、生業となしたりしも、其海岸に瀕せると、國內水利の便多きとより次第に商業工業の興起を見るに至り、中世に及びては、都市諸方に興り、各領主より特權を得市民自由の權を得て、繁榮に趣き、就中、アンベルス、フリウージ、ゲント、ハーンムの如き最盛にして、其物質上の繁榮と、智力上の文化に於ては、北方ヨーロッパ中チーデルランドと比すへきもの非りき。而してカロロ五世の時に至りては、更に大なる發展を示すに至りぬ。

チーデル
ランドの
獨立

近世の初に於て、宗教改革の大思潮は、この北方の文明國に輸入せられぬ。ルーテル教は先づドイツより入り、次てカルヴイン教はフランスより來りぬ。南方チーデルランドは概ねカソリック教を固持して動かさざりしも、北方チーデルランドは續々として新信仰を採用したり。ドイツに於て、將た、イスパニアに於て、新教の壓迫を加ふるに躊躇せざりしカール五世は、こゝにもまた新信仰者の撲滅を企てたりき。彼は異教審問所を設置し、監察官を任命し、新教徒に與ふるに嚴刑を施行したり。彼は令を發して、怪むべき文書を有するもの、秘密の祈禱會を開くもの、聖書について論ずるものは、皆死刑に處すべきを命じぬ。故にカール五世治世の間に於て、チーデルランド人の死刑に處せられしものは、無量五方に上りたりといふ。チーデルランド人か、かゝる非常なる殘虐を蒙りつゝ、猶未だ内亂を起すに至らざりしは、實にカール五世の幸なりしなり。

紀元一千五百五十六年、即ちアウクスブルク會議の翌日、カール五世は、世事の煩擾なるを厭ひて位を去りイスパニアなるサンユスト寺院に退き、ドイツ領及び皇帝號を以てヘルデナンドに與へ、イスパニア、イタリア、及びチーデルランドを以てフィリップ二世に與へ、再ひドイツ、イスパニアを分ちぬ。フィリップ二世のチーデルランドを領するや、父カール五世の意志を繼續して、新教徒を滅絶せんと試みたり。彼の方法は全く父の方法と異らざりき。異教審問所は遙かに活動を初めぬ。チーデルランドの市府は多く焚かれぬ。既にして紀元一千五百五十九年、フィリップ

ホ二世ハ義妹マルカレットをしてチーデルランドの政治をなさしめ、自己はイスパニアに向て去りしか、マーガレットは猥に自己の寵臣を集めて政治に參せしめ、從來政權を掌りしチーデルランドの貴族等を排斥したるを以て、貴族等は大に憤り、紀元一千五百六十五年、貴族等同盟を結び、オインシのウイリアムを擧げ盟主となし、異教審問所廢止の議を定め、五月五日三百余人の貴族等はブルツセルの政廳に至りて國王に呈するの書を捧げぬ。貴族の此計畫をきき、市民等もまた大連合を作り、全員兵士を徴し、新教徒等は大軍を編成して、カゾリック教の寺院に亂入し、法壇聖像を破毀したり。依てフィリップ二世は、忠實の武將たるアルバに二万の兵を率ゐしめ、チーデルランドに至りて反抗者を征定せしめぬ。紀元一千五百六十七年の夏、アルバはブルツセルに着し、直ちに鮮血裁判所を興し、警察官の手に捕はれたる者は、總て之を死刑に處したり。かくて忽ちにして一千人のチーデルランド人は其手に殺され、主なる諸侯も亦其中にありき。オレンジのウイリアムは、先にアルバの來らざりし前、既に自國に歸りたりしか、この悲慘なる報を得るに及び、同情の念禁する能はず、遂に紀元一千五百六十八年の春、其兄弟及逃亡者等を集め、チーゼルランド侵入の計を企てたり。彼はフィリップに對し戰爭によりて最後の決を結んど決心しぬ。彼が最爾たるオレンジ國を以て當時ヨーロッパに冠たりしイスパニヤの大國に抗し、前後八十年に渡る長日月間、更に屈する所なく、チーデルランドの自由の爲に奮闘し、遂にチーデ

ルランドの獨立を全ふするに至りし勇氣と忍耐とは、實に賞讃に勝へざる所なり。

最初の戦に於ては、ウイリアムの軍は常にアルバの軍の破る所となり、チーデルランド國內は、至る所、イスパニア軍の蹂躪する所となれり。されどウイリアムの勇氣はチーデルランド人厥起の基を開き、チーデルランドの水兵等は海岸を抄掠してイスパニア人の占領せる城寨を奪略し、北方の諸市は蜂起してイスパニア兵を驅逐せしかば、アルバの勢力は漸次減縮せられ、遂には只フリツセル、及南部チーデルランドに限らるゝに至れり。是に於てか北部チーデルランド諸洲は相連合し、ウイリアムを擧て、スタットハルテルとなし、防禦全盟を結ひぬ。アルバ亦勢の日に非なるを見、紀元一千五百七十三年、兵を引てイスパニアに返りぬ。アルバのイスパニアに歸るや、イスパニアはレケセンスをチーデルランドに送りて之を總轄せしめぬ。彼は温良の人物なりしを以て、アルバの創たる鮮血裁判所を廢し、チーサラント一般に大赦を布告しぬ。されど從來よりイスパニアの暴虐に馴れたる人民は、彼を信する能はず、猶諸處に蜂起するものありしかば、レケセンスは軍隊によりて之を服するの止む可らざるを考へ、兵を送りて之を攻めぬ。かくて紀元一千五百七十三年、彼はライデンの市を圍みぬ。時にウイリアム遂に堤防をさり、海水を市中に送り、以て其軍を破りしとは史上有名の事實に屬せり。後紀元一千五百七十六年、レケセンスの死するに及び、總督なきイスパニア軍隊は、一時恣に略奪抄掠を試み、アンルス以下太平洋沿岸

の諸市は殆んど灰燼に委するに至りしかば、チーゼルラント人民は、相謀りて紀元一千五百七十六年、デントの平和條約を結ひ、人種、宗教、國民、の區別なく、連合してイスパニア人を國外に放逐すべきことを約するに至れり。

紀元一千五百七十六年に至り、イスパニアはドンシオンを送りて、スタットハルテルとなせしも諸州皆之を認めざりしかば、二年にして歸り、紀元一千五百七十八年、アレキサンデルファルチス之に代りぬ。彼は將校として又外交家として秀れたる才能を有したりき。故に彼かチーデルランドに来るや、巧に新舊兩州の間に周施し、遂に南方カゾリツク諸州に與ふるに、古來の政治上の自由を以てしぬ。依て紀元一千七百七十九年、北方新舊七州（オランダ、ゼーランド、ウトレヒト、ケルデルン、オベリツセル、グロニンゲン、フリズラント）は防禦の目的を以てウトレヒトの條約を結ひ、ついで紀元一千五百八十一年、全くイスパニアより獨立し、ウイリアムを上げてスタットハルテルとなりぬ。是後世のベルギー、オランダの起源なりとす。

イスパニア王フィリツホ二世は、ウイリアムを以て反抗の張本者となし、彼を除かば必ずチーデルラント反抗の基を絶ち得へしと考へ、賄賂をウイリアムに送り、彼をして自由主義の徒黨より脱せしめんと企てぬ。然るにこの方法は更に其功なかりしかば、彼は最早彼を殺すの外なしと思ひ、彼を殺すものは貴族に列し金二万五千クラウンを興ふることを以て暗殺者を徴しぬ。かくて

ウイウアムはベルサギーグラーなる刺客の爲に殺され、當時十七歳なりし其子モリツは彼の後をつきぬ。而してクラアルチースは此機に乗じてチーサルラント諸州を征定することを怠らざりしを以て、チーサランド諸州は僅にオランダ、ゼーランド二州を除き、他は悉くイスパニアの手に落つるに至りぬ。是に於て七州の議會は相議して當時新舊國として雄をイスパニアと争ひつゝありしイギリスに向て救を求めたり。イギリス王エリサベタは直ちに其寵臣レースター卿を遣はし兵を率ひてチーデルラントに入り、新教徒を助けしめぬ。依てイスパニアは乃ち大艦隊を起し海上イギリスを攻めしか、風波の破る所となり、其目的を達する能はざりき。(インビンシブルアルマダ) 而して其後モリツは又チーデルラント諸州に於て、イスパニアの軍と轉戦し、遂にグロニンケン Groningenの諸州を恢復し、大にイスパニア軍隊の勢力を挫きたりき。かくて紀元一千五百九十二年フアチース死するに及ひては、イスパニア軍隊の勢力は益々振はす、イスパニアの艦隊はチーデルラントの海岸より驅逐せられ、國內漸く整理の緒につくに至り、フイリツボ三世のイスパニアに王たるに及ひ、紀元一千六百九年、オランダ共和國を承認し、十二年間の休戦條約を結ぶに至りぬ。紀元一千六百二十一年休戦條約の期盡さしか、時恰もヨーロッパに於ては、三十年戦争の正に酣なる日にてありき。フイリツボ三世は、この機を利用して再ひチーデルラントを攻撃し、恢復の目的を達せんと試みしか、フランス、イギリス等の干渉甚しくして意の如くならず、

遂に紀元一千六百四十八年ウエストファリア條約(三十年戦争の終局)の結はるゝに當り各國相談の下にオランダ共和國の獨立を許可したり。

このオランダ共和國か外邦との争亂より脱するや、更に國內の紛擾を起すに至りぬ。ツトレヒトの條約か只漠然たる七州の連合に過ぎざりしを以て、各州の政府は中央政府の政治に對して權力の争を惹起するに至れり。これ其の最強力なりしオランダか最多く其意志を實行するを得たりしによるといへども、君主黨と共和黨との争と、カルビン教徒(ゴマリアチン)と温和派(アルミニアチル)との争とは更に甚しき困難を生ずるに至らしめぬ。もとよりモリツは家族の主君たるを欲し、而して市民の特權に快からざりし下等人民は之を助け、富有なる市民等は共和政を望み、而して自己の階級以外には共和政に與るを欲せざりき。かくてオランダ共和國は全く兩派に分れ兩派の争は絶ゆること非ざりしか、紀元一千六百一十九年、モリツは遂に共和黨を敗て一時其争に局を結はしめぬ。

かくオランダ共和國は外患内憂相繼さしに係らず、國民の勇氣と忍耐とは、此外患内憂の間に在りて、よくオランダをして商業上、智力上に著大なる進歩を示すを得しめ、紀元一千六百二年には印度會社の設立ありしのみならず、パタビア、セイロン等を領するに至り、更に紀元一千六百四十二年には新オランダ(オーストラリア)を發見して東洋貿易上大勢力を有するに至り、國際

公法學者グロチウスの如き、哲學者スピノサの如き、畫家レンブラントの如き諸大家出て、十七世紀の文明を飾りたりき。

其四 イギリスの發達

イギリスの發達
 チュードル家最初の王たるヘンリ七世は、常にイギリスをしてヨーロッパの強國たらしめんどの理想を抱きたりしを以て、専ら紛擾をさけて國庫の充實を計らんと欲し、從來相敵視したるフランスの侵略を防かんか爲め、フランスの敵國なるイスパニアにより、イギリス皇太子アーサーとイスパニア皇女との婚姻を結ひ、アーサーの死するや、又其弟ヘンリーをしてカタリナと結婚せしめ、以て兩國間の同盟を繼續するに勉めたりき。而してこの際イギリスに於ては、フマニストの勢力漸く盛にして、シオアンコレはセントパウル校を設立して新青年の教育に従事し、トマスマアはユトビア(無何有郷)を著はして新思想を鼓吹し、オクスフォード大學の如きは、一時フマニストの中心となり、遂にフマニストはオクスフォードの改革者と稱せらるゝに至りたりき。

紀元一千五百九年ヘンリ八世立ちぬ、されど彼は父と異り無主義なる、放恣なる人物にてありき。彼は直ちに父の取り來りたる平和の主義をすて、イスパニア、フランス間に蟠れるイタリア問題に容喙し、イスパニア及び法皇と神聖同盟を結ひ、翌年カレーの地を根據としてフランスに侵入したり。依てフランス王フランシス一世はスコットランド王ゼームス四世と連合し、ゼームス四世は南方よりイギリス本土を襲撃せり。然れどもこの戦イギリスの兵力其優勢にして、ゼームス四世以下幾多の貴族はカタリナ女王の軍隊の爲に塵殺せられぬ。(フロツンヒールドの戦)ドイツに宗教運動起りルーテルか法皇の處置を批難するや、彼は法皇の權利を主張して、法皇の爲に一論文を公にし是によりて「信仰保護者」の稱號を受けたり。これ彼か初め兄の妻なるカタリナと婚するに當りて、法皇か特にカゾリツク教會の法規を破りて、其婚を許可したる事情あるのみならず、フランスとの關係に於て、法皇の意志を迎ふるの必要ありしによるものなりき。されど彼はもとよりフマニスト時代の生兒にして、宗教改革等に對して甚しく惡意を有するものに非ず彼の目的はたゞ自己の利益を収むるにありしを以て、彼は久しからずして婚姻問題により法皇と相争ふの位置に立つに至れり。

ヘンリー一世とカタリナとの間に、琴瑟相諧ひしはたゞ暫時に過ぎさりき。彼は其侍女アンボレインの妖色に迷ひ、カタリナを離婚するの計を濫するに至れり。然れども離婚の問題はカゾリツク教會の重事たるのみならず、紀元一千五百二十七年カロロ五世かローマを略してより以來、法皇は全くイスパニア掌中のものなりしを以て、この請求は到底法皇の裁可を得へく見へさりき。依てヘンリー八世は、特に寵臣ウルゼーを法皇に送りて、其請求の容致せられんことを願ひしも

然も遂に無功に終るに至りぬ。この時に當りて曾てウルゼーの書記たりしトマス・クロンウエルは、ヘンリー七世に薦るに、かのドイツ諸侯の如く法皇より分離し、自ら國教の主長となり、以てこの離婚を自由ならしむるの策を以てしたり。依てヘンリー七世は直ちに之に従ひ、イギリス僧侶の法皇に送るべき献金を止め、寵臣克蘭マーを擧げてカンタベリーの大僧正とし、紀元一千五百三十四年には議會を召集して、イギリス王自らイギリス教會の主長たるべき君主無上權の議案を通過せしめ、ついでトマス・モア、フィッツシャアの如き離婚問題に反対したる正義の士を殺戮したり。かくの如くしてイギリス教會は、ヘンリー八世の欲心より成立しぬ。されど他日發達せるイギリス國教の歴史を觀察するに當りて、このイギリス教會の分離がイギリス國民にとりて幸福なる行動たりしことを否定すること能はざるなり。

ヘンリー一世か、イギリス教會の最高者と認めらるゝに至りて、彼は彼の位置を以てローマ法皇の位置に比せざるを得ざりき。是を以て彼の思想は、これを教會分離の前に比する時は、遙かにカゾリツクのとなりぬ。蓋し彼の如き性質を有するものに取りては當然のことなりしなるへし。彼はクロンウエルと計り、寺院に屬する土地を略奪し、其資産を没収し、遂には議會をしてカゾリツクのなる六箇條の信仰箇條を議決せしめ、これに反對するものは死刑に處すべきを命するに至れり。是に於てか新教主義を採用せんとしてイギリス教會を可決したるイギリス國民は、擧つ

てクロンウエルの施政を抗撃し、紀元一千五百四十年にはヘンリーをしてクロンウエルを刑するの止むを得ざるに至らしめぬ。

彼はカタリナ、アンボレーンを娶りし後、ゼーンシーモア、クレープのアン、カタリナ・ポワード、カタリナ・バル等を娶りぬ。然も其多くは彼の殺す所となりき。かくして彼は紀元一千五百四十七年皇統をエドワード系よりマリア系に傳へ、マリア系よりエクサヘタ系に傳ふべき相續法を定め、て死しぬ。

ヘンリー八世の死せし時、エドワード六世は僅に九歳なりき。依て遺言して攝政會を開け政治を謀らしめぬ。然るにエトワード六世の立つや、攝政會の首席たりしソマーセット卿(母方の叔父)は議會をして攝政會を廢し、保護者の名を以て己れ一人攝政の職をどることを定めしめぬ。彼が攝政となるや、彼は克蘭マーと共に急激なるカルビン主義を採用して、不完全なるイギリス教會に、完全なる宗教的改革を行はんと企てたり。彼は紀元一千五百四十九年イギリス一般の祈禱書を編し、紀元一千五百五十二年カルビン主義によれる四十二條の信仰箇條を發し、この祈禱書を用ざるものは、多く之を死刑に處しぬ。イギリス人民はこの急激なる新教主義に従ふことを好まず、イギリスの貴族等は遂に之を殺し、ノーサンバラント卿をして其後を嗣かしめぬ。然れどノーサンバラント卿は政治上に於てはソマーセット卿の敵たりしといへども、宗教上に於ては寧ろ

ソマーセット卿の主義を奉ずるの人なりしかは、彼はソマーセット卿の遺跡を受けて改革主義を取りしのみならず、ソマーセット卿の教訓を受けたるエドワード六世は熱心なる新主義の主張者なりしを以て、改革主義の運動は猶委然として繼續したりき。

紀元一千五百五十三年、エドワード六世死しぬ。ノーサンバランド卿は、早くよりエドワードの多病にして久しく生く可らず、彼の死後王權マリヤ(カタリ)に移りは、舊教の勢力の再び強大ならんことを恐れ、ヘンリー七世の曾孫シェーンクレーの我子と婚せるを幸ひ、王をして位を此女に傳へしめ、王の死するに及び、此女を擁して王位に上らしめぬ。然るにエドワード時代の急劇なる新教主義を好まざりしイギリス國民等は、却てマリヤを奉して女王となせしかは、シェーンクレーは僅に九日にして位を退きぬ。然れどもマリヤは又人民の希望を満足せし得べき者には非りき。マリヤはエトワードの如く急激なる新教主義の改革をなさいりし代りに、更に急激なる舊教主義の改革を以てしたり。彼は純然たるカソリック教恢復の主義を取りエトワードのなせる總ての新教的改革を爲したるのみならず、紀元一千五百五十四年、法皇の使節ポールをロンドンに招き、議會をして一千五百三十四年の帝王無上權の令を爲してイギリス商會をして全然ロス爲會ニ合併せしめ。紀元一千五百五十四年、卒スバニア王フィリップ二世と婚しカソリック同盟を結びかくて克蘭マー以下多く新教主義者を殺戮したり。かのエトワードの急激なる新教改革を好ま

ざりし國民はかゝる急激なる新教改革も樂まざりき。國民不平の聲は漸く高りぬ。而して偶々紀元一千五百五十八年、彼かイスバニアと連合してフランスを攻め、却てこれか爲にカレーを失ふに至りしことは、更にイギリスの國民をして非常なる激昂を起すに至らしめしか、後間なく其年十二月病死せり。

マリヤの死後、義妹エリサヘタ其後を受けしか、彼は女性の優雅と女性の弱點を有せず。却て男性の粗笨と男性の才能を有したりき。彼はやゝ強烈なる虛榮心と執着心を有したりと雖も、確に政治家的技能を備へたる人物にてありき。彼は先づ即位の始、自己の信用する人物を擧げて、樞密院を開き、人民の撰擧によりて成れる國會より勢力を奪ふの策を取りて、總ての主權を自己の手中に收めぬ。彼は宗教に對しては、父ヘンリー八世の如き溫和主義を繼ぎて、エトワード及びマリヤの如き極端主義を取らず、紀元一千五百五十九年、至高權令を發してイギリス教會のローマ教會より分離すへきを布告し、均一令を發して僧侶の一般公禱書及び四十二條の信仰簡條(後三十九條に減す)に反する信仰儀式を用ゆるものは重罪を以て罪すへきを布告し、カソリック教會の階段政治を有するプロテスタント教會とも稱すへきイギリス教會を組織したり(監督政治なるによりてエビスバル教會といふ)もどより此半カソリック半プロテスタントなるイギリス教會は、純カソリック純プロテスタントをして満足せしむるに足らず、プロテスタント中にはユリ

タンセバレチストを生ずるに至り、カトリック教徒は連合して反抗運動を見るに至りしといへども温和なるプロテスタントよりなれる多数國民の満足を得るには十分なりしなり。彼が取りたるプロテスタント政略は、イギリス國民多数の満足を得たりしと雖も、然もカトリック教の主導者たるイスパニヤ國の對英感情に劇烈なる變動を起さしめざるを得ざりき。今や兩國の民は、海上に、殖民地に、至る所争闘を試みるに至りぬ。然して偶々イギリスがチーデルランドを助けてイスパニヤに抗するに至りしことは、兩國の戦端を開く源となれり。紀元一千五百八十八年、フリーツボは、一百三十二隻の艦隊(必勝艦隊)をしてイギリスの海岸に向はしめぬ。此艦隊は先づチーデルランドに至り、バルマ公の率ゆる軍隊を搭載して、イギリスに上陸せしむる任務を受けたりき。嶋帝國は實に危機一髪の間を迫りぬ。然るにこの恐るべき外寇に際會したるイギリス國民は、總て宗教の異同を擲棄し、愛國の熱情に鼓舞せられ、陸海軍人等は皆決死の精神に満たされて、エリサベタ女王の命令に従はんことを誓ひぬ。海軍の司令官、ホワード、フランシス、トレイク、マルチン、フロヒツ、シャ、等は、一百九十七艘より成れる艦隊を率ゐて、敵艦をイギリス海峡に要したり。イスパニヤ艦隊はイギリス海峡に入りしも、後方の封鎖を知り、スイットラント海岸を廻りて歸國せんと企てしか、偶々颶風の襲ふ所となり、多数は擱岸して破毀せられ、少數の残部は漸くにしてカデスの港に飯るを得たりき。是よりイスパニヤの宗教上の勢力

大に衰へ、イギリスに於ける新舊兩教の争、全く止み、イスパニヤの海上専權は消滅して、イギリスの海上權は頓かに大に擴張せられ、イギリス國民をして近世史上に雄飛せしむる資格を形くるに至らしめぬ。

第五章 フランスの發達

フランスの發展

フランスのフマニストたるルフェーフジによりて起されたる宗教改革の運動は、バリ、ソルポヌ等の舊教學僧の反抗ありしに係らず、漸く其勢を増し、ついでカルビル教のスウイスより傳流して各地に流行するあり、フランス國內には、幾多教徒(ユゲノー)の存在を見るに至たり。然してバビア戦後、フランシス一世は、偏に法皇の助力を得てイスパニアに當るに急なりしを以て、或は教徒を追放し、或は之を殺戮して、舊教徒の歡心を得るに勉めたりしといへども、亦盛にイタリアの文藝を國內に輸入して、フランスに於ける文藝復興其時期を現出せしむるに至りたりき。其子ヘンリー二世は(自紀元一千五百四十七年至全五十九年)は父と異り新教徒を嫌ふこと極めて甚しく、其即位の日に於て、異端者は總て國外に放逐して釋すことなかるへしと誓し程なりき。故に彼の治世に於ては、屢々新教徒に關する迫害の布告を發布し、新教徒に對し、新教焚殺の酷刑を専行し、其凄慘の状態は全くイスパニアのチーデルランドに行へしと同様なりしといふべし。

と彼のイスパニアに對する考は毫も其父と異ならず、イスパニアの勢力を縮むる爲には、彼の最も好まざりしドイツの新教徒と連合することをも厭はざりき。サクソニーのマウリスのカロロ五世に反してフランスの助力を請ふに及びて、彼は喜んで之に反し、直にドイツに侵入して、其兩方の僧正領たるメツツ、ツール、ベルダンの三地を占領したり。カロロ五世はアウクスブルグの和議を結ひて國內を統一し、全國一般の力を以て是か恢復を計りたりしか、事失敗に終りて、更にイスパニアの勢威を失墜せしめぬ。然れどフランスの國勢久しく盛ならず、フィリップ二世がイスパニアに王となり、フランスの敵たるイギリスと連合して兩面よりしてフランスを壓迫するの策をとり、イギリス女王マリアと結婚し、二國の力を以てフランスに當るに及び、フランスの軍はネーデルラント地方に於て屢々其敗る所となり、僅にギース家のフランスの力によりて、イギリスが久しく領したりしカレーの地を恢復し得たるのみなりき。依て紀元一千五百五十九年、フランスはシャトウカレブレに於て二國と和を講し、カレー以外の領地を二國に返却して其局を結ひぬ、是よりフランスの國勢は一時大頓挫を來すに至れり。

ヘンリー二世死後、其三子フランシス二世(自紀元一千五百五十九年至全六十年)カロロ九世(自紀元一千五百六十年至全七十四年)ヘンリー三世(自紀元一千五百七十四年至全八十九年)相繼て王位に上りぬ。三王共にフイレンツエ家のカタリナの出なりき。故に此等三王の間彼は隱然とし

て勢力を有したりき。フランシス二世は僅に九歳にして王となれり。依てフランスの習慣に従ひ其母アタリナは、皇后の兄ギース公フランシスを擧て政治を掌らしめぬ。ギース家は實に熱心なる舊教信者なりき。然るに王族たるブルボン家は獨り政權をギース家に委するを好まず、ナバレ王アントアンヌは其弟コンデ公ルイスと連合して國家樞要の地位を分與せられんことを請求しぬ。然して彼等は其請求の容れられざる見るや更に新徒と同盟してギース家に抗し、紀元一千五百六十年アンボイス城に於てギース家仆滅の計を企てぬ、然るに未だ半にしてギース家の發覺する處となり、ブルボン黨人の多數は或は城中に殺戮せられ或はロア河中に投せられぬ。カロロ九世立て僅に十歳なりき。母カタリナはギース、ブルボン兩黨の争鬭をさげんか爲に、兩黨の代表者を擧て政治を分掌せしめ、人或制限の下にユケノーを保護する布告を發して、新舊二教黨の平和を保たんと企てたり。然るにこの圓滿政策は兩者何れに對しても満足を與ふる能はず、カンリツク教徒は彼の讓歩を怒り、新教徒は彼の制限を難し、二黨の争は一層甚しきを加ふるに至りぬ。然して紀元一千五百六十二年、ギース黨のバツシーに於て新教徒を虐殺するに及び、ブルボン黨は武器を取りて其と相見ゆるに至り、フランスは各地擾亂の状態を呈するに至れり。然るに既にしてアントアンヌは新教との衝突によりて殺され、ユンデは過て死し、ギース諸侯も部下の暗殺する所となりしを以て、温和黨なるコリニーは兩黨の間に周施し、紀元一千五百七十年、サンゼル

マンの和議を以て兩黨の争を終りぬ。然れども此平和は只々一時に過ぎさりき。サンゼルマンの和議成りて、コリニーはパリに至りしか、カロロ九世は彼を遇すること甚だ厚かりき。彼は永くフランスの平和を維持せんと欲して、王に謀りて王女マルカレダを以てマントアンヌの二子ヘンリーに嫁せしめぬ。紀元一千五百七十二年八月十八日を以て婚姻の式は營まれ、多くのユケノーは之を祝はん爲にパリに入りぬ。然るにマリニーの王籠を受くるに至りしことは其母カタリナの厭ふ所なりしのみならず、王女のブルボン家に嫁せることはギース家の快からざる所なりき、是に於てかカタリナはギース家と連合し、其月二十三日ユリニーを自宅に殺し、二十四日即ち聖バルトロメ日、鐘聲を相圖に、各地の新教徒を虐殺したり。ヘンリーは卒して其災より免れぬ。この際新教徒の殺されしもの、パリに於て二千人、地方に於て六七千人に上りしといふ。世に之を聖バルトロメの虐殺と稱す。カロロ九世死後、ヘンリー三世繼ぎしか、既にして其末弟アレンソン侯死せしを以て、王位は自然男系の近親たるナバレのヘンリーに皈せざる可くさるに至れり。ギース家のヘンリー等は王位の敵人に皈する見、舊教徒と共に神聖同盟を結ひて、教會の爲には王に對するを厭はざるを誓ひぬ。多數のフランス人は皆之に趨き、一時フランス國內には二王を現出したるの觀ありき。ヘンリー三世は之を見て意甚だ平かならず。遂に紀元一千五百八十八年キースのヘンリーを誘て之を殺すに至りぬ。神聖同盟は王の行動を見て、大に憤り王に迫りて王

位を退くへきを以てせり。因て王は遁れてナバレのヘンリーに寄りしか、一僧侶の爲に暗殺する所となり、王位は自然ナバレのヘンリーに皈するに至りぬ。是に於てバローア家滅びブルボン家代りてフランスを統治することなれり。

ヘンリー四世(ナバレのヘンリー)(紀元一千五百八十九年乃至一千六百十年)はヘンリー三世の後を受けて王位に上りしといへども、彼の臣下は多くは舊教徒にして、彼の黨人は至て少數なりき。故に彼は忍耐と才略とを以て、専ら王權を確立することに力を盡しぬ。彼はやかて反對者の征服を試みしか、容易く之を勘定するの至難なるを見、遂に意を決して舊教に改宗し、以て人心を収攬し、紀元一千五百九十四年二月人民歡呼の間にシアルトルに於て戴冠式を行ひ、三月パリの王宮に入りぬ。ついで紀元一千五百九十八年五月ナントの布告を發布し、大貴族、市民、及び幾多の特種の市府に新教の禮拜處の建設を許可し、法律上舊教徒新教徒を平等たらしめ、彼等を安堵せしめんか爲に幾多の堡壘を有する都城を彼等に附與したり、この最後の條件は實に新教徒に對して、獨立の武力を附與したるものといふべきなり。此年彼はまたイスパニアとベルハンの和議を結ひて、久しく繼續したる兩國の紛議に終を置きぬ。彼はかくの如く内は宗教の争を鎮め、外はイスパニアとの争を定め、新教徒たるスリを擧げて宰相となし、財政を整理し、商工業の發達を計り以て國力を充實し、他日大にイスパニア及ハツプスブルク家に當るの素地を作りぬ。

ヘンリー四世死後、其子ルイス四世（自紀元一千六百一十年至全四十二年）位に即きぬ。時に年十歳。母メヂチ家のマリア政を攝す。されどマリアは決断なき無能の人物なりしを以て、政權漸く寵臣の手中に移り、ヘンリー四世に壓服されし貴族等は其勢力を恢復するに至りしか、偶々カルヂナルリシウリウ宰相となるあり、フランスの國情に一新生面を現出せしむるに至りぬ。リシウリウは實にフランスに於ける專制王國の建設者と稱せらる。彼は初よりフランスに於ける無限王權の確立を以て唯一の主義となし、この主義に對し、二個の政策を實行するに勉めたり。即ち一は新舊兩教の貴族の壓迫にして、一はイスパニア即ちハツプスブルク家の屈服なりき。かくて彼は先づフランスの國會を廢して、國民參政の權を奪ひ、王兄オルレアン公アストン以下の貴族を放逐し、ラロシエルを降して、新教徒の政治的特權を削り、次て國內に於けるフランス王の勢力を強大ならしめ、ついで三十年戦争に干渉し、諸地方に於ける新教徒を助けて、イスパニア即ちハツプスブルク家の勢力を弱め、以て國外に於けるフランス即ちブルボン家の勢力を伸張せしむるを得たり。是よりフランス即ちブルボン家の勢力は漸く盛にしてイスパニア即ちハツプスブルク家の勢力は稍衰ふるに至りぬ。

第六章 三十年戦争

紀元一千五百五十五年のアウクスブルクの和議は、ドイツに於ける新舊兩教徒の争抗に和解を與

へしと雖も、是もどより一時的のものにして、永久的に平和を見るか如きは望み得べきことに非りき。然してベルヂナンド一世（自紀元一千五百五十六年——至全六十四年）マキシミアン二世（自紀元一千五百六十四年——至全七十六年）の二代に至り、カルビン教の傳來して各地に擴り、教徒等新に權利の請求をなすに及びて、ルーテル教徒もまた合同して起り、新教徒は南方に據り、舊教徒は北方に居り、ドイツ再び新舊兩教徒の軋轢を現すに至れり。されど幸にして此等二代は、常に平和主義を抱持して、専ら兩教の一致に力を盡せしにより、其治世の間は、未たなほ事實上の争闘を見るに至らざりしといへども、ルードルフ二世（自紀元一千五百七十六年——至全一千六百一十二年）の世に至りては、兩教の軋轢漸く甚しく、新教徒の舊教徒が宗教的行列を妨害するあり、舊教徒がドアウエルトの自由市を領有するあり、やかて紀元一千六百八年、新教徒は相當防禦の目的より、カルビン教徒なるバルツのフレデリックを戴きて合同を形成し、翌年舊教徒はまたパワリヤのマキシミアンを戴きて神聖全盟を組織するに至りしか、遂にホヘミヤ王國の問題より兩黨間の一大破裂を引起さしむるに至れり。

ホヘミヤ王國は、ドイツ帝國の一部にして、スラフ、ケルマニ兩民族によりて形成せられし國なりしか、後ヘルチナント一世の時に至りて、ハツプスブルク家の所有に歸するに至りぬ。然れどホヘミヤは元來ルーテル教國なりき。是を以てルードルフ二世は深く心をホヘミヤ國內に於けるル

ーテル教徒の芟除に用ひ、種々の手段を盡して其全滅を企てたりき。されどホヘミヤに於けるルーテル教徒の勢力は甚だ強大にして、容易に彼の目的を達すること能はざりしかば、彼は遂に紀元一千六百九年を以て諭旨を發し、形式上ホヘミヤに許すに信仰の自由を以てしたり。然るにマチアス(自紀元一千六百十二年——至全十九年)の立つに及び彼のホヘミアに對する施政甚宜しきを得ず、彼が任命せる官吏等は切りに新教徒に迫害を加へたりしを以て、紀元一千六百十八年、新教徒等はツルン伯のマチアスを主領として一揆を起し、ブラーグなる其居城を襲ひ、援を新教合同に求め、自ら其政府を設置するに至れり。是より新舊南教徒は互に武力を以て自個の權利を争ふこととなり、三十年に渉る長期の戦争はヨーロッパの各地に戦はるゝに至り、ホヘミヤに起れる一小争闘が、遂にはヨーロッパ、全國新舊南黨の争亂と、ヨーロッパの主權に對するハツプスブルク家とブルボン家との争權と變するに至りぬ。今便宜上この三十年戦争を分ちて四期となす。

其一、ホヘミヤ、バルツ戦争(自紀元一千六百十八年——至全二十三年)

ホヘミアの新教徒カツルンのマチアスを主領として、フラークに一揆を起すに當り、援をトイツの新教合同に求めぬ。依て新教合同はマンスフェルド伯をブラークに送り、マチアスの一揆を助けて、皇帝の軍と撃破したりき。然るに其翌年皇帝マチアス死し、従弟ヘルデナンド二世(自紀元一千六百十九年——至全三十七年)は舊教僧侶たる四人の撰帝侯の承認によりて帝位を得るに

及び、彼は直ちに援助を舊教同盟に求め、同盟の盟主たるバツリアマキシミアンと共にホヘミア恢復の事を企てたりしかば、ホヘミアはまた新教合同の主領たるバルツ伯フレデリツキを以て國王となし、以て皇帝の軍に當るの計を講したり。然るにこの際新教徒はフレデリツキに對し、毫も助力を與へざりしのみならず、ルーテル教徒なるサクスの撰帝侯の如きは舊教徒と連合するに至りしを以て、紀元一千六百二十年、兩軍白山(ブランク市外)に會戦するに及び、フレデリツキの軍はマキシミアンの將チリー及びイスバニア兵の撃破する所となり、フレデリツキはドイツを横ざりてチーテルランドに走るに至れり。依てヘルデナンド二世は其軍隊と共にホヘミアに進入し、ルドルフが附與したる諭旨を破り、彼等の權利を奪ひ、ついでフレデリツキ追放の令を發し、ラインよりホヘミアに至るドイツ南方一帯の地を以てマキシミアンに與へたり。是に至りてドイツ國內に於ける舊教徒の勢力は俄然偉大なるものとなりぬ。然して此迄無頓着なりしルーテル教徒も些か恐怖の念を生ぜざる能はざるに至れり。

其二、デンマルク戦争(自紀元一千六百二十五年——至全二十九年)

白山の勝利はヨーロッパの舊教徒をして自個の勝利の如く歡喜せしめぬ。然れども同時にヨーロッパの新教徒をして自個の敗北の如く悲觀せしめぬ。今や新教諸國の同情は舉りてドイツ内なる新教徒の悲運に對して注かるゝに至れり。かくて紀元一千六百二十五年に至り、デンマルク

王にして全時にドイツの諸侯たりしクリスチナ四世は、新に新教合同軍の主領となり、冒險家なるマンズフェルトはまた別に義勇軍を編成し、バルツのフレデリツキの勇たるイギリス王ジェームス一世は、遙かに軍資を送りて新教徒の軍隊を助けたり。然るに皇帝は其將チリー及びワールンスタインを送りて、此等新教徒討伐の任に當らしめ、紀元一千六百二十六年、ワールンスタインはデッサウ橋に於てマンズフェルトの軍を破り、チリーはルツテルに於てクリスチナ四世の軍を破り、皇帝及び同盟の軍は進んでジュットランドに向ひぬ。クリスチナ四世は猶屈せず久しく之に抗したりしか、紀元一千六百二十九年に至り、リウベックの和議を結び、皇帝は彼に保證するに其領土の安全を以てし、クリスチナは皇帝に約束するにドイツの内情に關涉せざるを以てしたり。かくてドイツ國內は全く平和に歸し、國內一人の皇帝に抗する者なきを見、此年皇帝は回復令を發し、新教徒をししアウクスブルク以來、其所有に歸したる舊教寺領を返還せしめぬ。然れども皇帝の無法なるこの命令には因循なるルーテル教徒と雖も、驕然として之に服従することを拒みたりき。而してこの際ワールンスタイン政策に對する新教兩國民の批難の聲漸く甚しく遂に紀元一千六百三十年にレーテンスブルクに開かれたる國會は、王に迫りて彼を其職務より退かしむるに至りしことは、新教徒に取りての幸なりき。

其三、スウエーデン戦争(自紀元一千六百三十年——至全三十五年)

ワールンスタインか職を退きしと略々同時に、フィンランド、インケルマンランド、エストラント、リヴランド等を領して威を北方に振ひたるスウエーデン王グスタフアドルフはドイツのウセドム嶋に上陸したり。彼か遙にバルト海を渡りてドイツに上陸したる所以は、もとよりハツプスブルク家の勢力の北方に伸張するを妨げん考なりしなるへきも、またドイツに於ける新教徒を助けんどの誠意に基きたるものなりき。彼は先つステッテンを占領してドイツの軍隊をボメラニアより驅逐し、使をドイツの教徒諸侯に送りて、彼の同盟者を求めたり。ドイツの諸侯は彼の援助に對しては心中大に悦ぶ所なりしといへども、然かも皇帝を破りて、ドイツを外國人の手中に渡さんことは彼等の躊躇せざるを得ざる所なりき。故に彼は暫らく彼の同盟者を得る能はざりしか俄然フランスの宰相リシウリウーは彼に向て同盟を要求し、資金を以て彼を補助すへきを以てし紀元一千六百三十一年兩者の同盟なりぬ。前章參照。然して偶々ドイツの將チリーか北方諸侯のスウエーデンとの全盟せるを疑ひ、マクテブルク市を圍みて一大虐殺を行ひしにより、ヘサクス侯以下奮然起てクスダフの軍に應ずるに至り、クスダフは容易に南方に進むの便を得るに至れり依て此年クスダフはツラテレフェルトに至りて大にチリーの軍を破り、至る所に、新教徒の歡迎を受けつゝ、ドイツを横さりてラインに達し、レヒ河邊に於てチリーを殺し、パウリヤすらも彼の手中に落るに至れり。是に於て皇帝フレテリッは其勢力に恐怖し、再びワールンスタインを

起して職に復せしめ、以てこの大敵に當らしめぬ。かくて紀元一千六百三十二年、二人の名將はライプチツヒに近きリュウエンの地に會し、劇戰數刻、クスタフは漸くにしてワーレンスタインの軍を破りたりしか、不幸にして彼は軍中に殺されたり。グスタフの死するやワーレンスタインは反逆の罪を以てエゲールの地に殺され、スヴェテン諸將は皇子フレタツキの爲にノルドリンケンに破れて退きぬ。依て皇帝はブラークに於てサクス侯と條約を結ひ、回復會を取消し、爾來専ら温和の主義を執りて兩黨の一致を謀るに勉めたりき。然れども時既に遅く、フランスのリシウワウーは其蓄積したる國力を集注し、イスバニア及ハツプスブルク家に對して宣戰を布告するの報に接しぬ。

其四 フランス、スウエーデン戦争(自紀元一千六百二十五年—至全四十八年)

この戰は最早宗教上の争に非りき。この戰は全くフランス及びブルボン家とイスバニア及びハツプスブルク家との争なりき。フランスはイスバニアを弱めんか爲めに、オランダと全盟してネーデルラントを攻め、ブルボン家はハツプスブルク家を弱めんか爲めに、スウエーデンと全盟してドイツを攻めたり。然して皇帝は常はイスバニアの助力を受けたりといへども、疲弊せるドイツはたゞ茫然たるのみなりき。是によりてフランスの將、チュレーヌ、コンデ公子等は、切りに皇帝の軍を破り、年々ドイツは劍戟の災を受けぬ。而してヘルヂナンド三世(自紀元一千六百三十

フ、ラ、ス、
ス、エ、
ス、ウ、
エ、イ、
テ、ン、
戦、争

七年—至全五十七年)立つに及び、フランス軍は益々進入して遙かにライン河岸に至り、ライン地方の諸國概ね其併吞する所となるに至れり。依て紀元一千六百八十四年、帝は各國に謀りウエストファリアの和議を結ひぬ。

ウエストファリアの條約は大略三項に分つを得、即ち一はフランス及びスウエーデンがドイツより得べき領土に關し、第二は新舊兩教徒の平和の新基礎に關し、第三はドイツ國內の政治上の整理に關す。然して(第一)に於てはスウエーデンはポヘメラニアの西半部及びブレータン、ベルダンの僧正領を得、フランスはメツツ、ツール、ヘルタンの領有を確定し、且アルサスの大部(ストラスブルクを除く)を得。(第二)に於てはアウグスブルクの和議を確立して、ルーテル教に附與したる寛典を、カルビン教にも擴張し、回復會によりてカゾリツク領となりし土地はプロテスタントに返却す。(第三)に於ては、各小國を獨立とし、諸侯に相互の同盟及び外國同盟を形成し得る新權利を附與し、廢立されし撰帝公の子孫を再立し、ブランテンブルクに數多の領土を附與し、從來ドイツの國內なりしスウイス、オランダを獨立とす。を以て其要領となす。かくてイスバニア及びハツプスブルク家強盛の時去りて、フランス及びブルボン家強盛の時來る。

第七章 フランス

其一、フランスの強盛

フランスは、ルイス十三世の代に於て、宰相リシウリウーの政策により、内はエグノーの特種を奪ひ、貴族の權勢を削り、外は三十年戦争に干渉して、ハップスブルク家の勢力を弱め、フランスをして優勢なる地位に高むるを得たりき。後紀元一千六百四十三年ルイス十三世死して當時五歳なりしルイス十四世(自紀元千六百四十三年——至全一千七百十五年之に代り、リシウリウーは職を退けられて、后母アンの寵臣たるアリナルマサリン宰相となりぬ。然れどもマザリンは依然リシウリウーの政治的意見を繼承して、彼の政策を持儘したりき。彼は其襲職の始、貴族等か封建的特權を恢復せんとして蜂起せしを壓迫して、全然其勢力を打破し(フロンドの亂)ついでトイツとの戦は、ウエストファリアの條約を結ひて、フランスに取りて十分利益ある和議を結ひしに係らず、猶イスバニアとの戦端を止めず、屢々オランダと共にチーテルランドの地にイスバニアの兵を破り、遂に紀元一千六百五十九年に至り、ヒレニース條約を結ひて、ヒレニース山に沿へるイスバニアの土地及フスバニア領チーデルラントを得、以てイスバニアの勢力を破毀したり。紀元一千六百六十一年マサリン死せしか、時ヌルイス十四世は既に二十四歳に達したり。故に彼は最早宰相を置かず、親ら政治を執るに至れり。彼は、レター、セ、モア、(我は國家なり)の政治的主義により、獨裁君主の神權の理想を實行し、主として、ヨーロッパに於けるフランスの位置を進め、フランスに於ける王權を絶大ならしむるに勉めたり。彼は初め専ら意を内政の完備に用ひ、ユル

ベル等を用いて、政治機關を改良し、外交事務を整理し、陸海軍を擴張し、財政秩序を正し、商工業並に殖産殖民業を奨励したり、是を以て當時フランス國力の發展せしこと、實に甚しく、世界の一等國たりとの詞は決して贅辭に非ざりしなり。然るに既に於て彼は志を外邦の服屬に、く、漸く侵略を事とする至り、隆盛に向ひたるフランスの國力も漸く疲弊に傾くに至り、遂にフランスの國家に對して、悲しむべき命運を殘すに至れり。

ルイス十四世の後半生は實に次の四大戦争に滿ざる、(一)イスバニア領チーデルラント戦争、

(二)オランダ戦争、(三)バルツ戦争、(四)イスバニア王位繼承亂、即ち之なり。

(一)イスバニア領チーデルラント戦争(自紀元一千六百六十七年——至全六十八年)紀元一千六百六十五年、イスバニア王フィリップ四世死し、カロコ二世其後を受けぬ。然るにルイス十四世の妻マリアテレサはフィリップ四世の女なりしを以て、ルイスはチーデルラントの舊慣に従ひ、チーデルランドの大部はマリアテレサに與へらるゝべきを主張し、紀元一千六百六十七年、突然兵をチーデルランドに送りたり。イスバニアはもとよりこの強力なるフランスの兵に抵抗する能はず、只彼のなす所に委せざる可らざりき。されどチーデルランドに於て強力なるフランスの勢の樹立せらるゝことは、オランダの發展の上に於て非常なる影響を受くるを以て、オランダはイギリス、スウェーデンと協義し、三國同盟を形式してフランスの兵に抵抗したり。是に於てルイス

事の漸く困難なるを思ひ、紀元一千六百六十八年、ア、イ、ヘンに條約を結び、フランシユコンデをイスパニアに返し、一時三國全盟と和を講じたり。

(一) オランダ戦争(自紀元一千六百七十二年—至全七十八年)

ルイス十四世は、先きにネーデルラントの戦に於て、三國同盟に抗するの不利なるを見、一時ア、ヘンの條約を結びて、ネーデルラントの兵を返せしといへども、是より三國同盟の中心たるオランダに對する復讐の念は一日も禁すること能はざりき。故に彼は三國同盟を破毀し、オランダを孤立せしめ、以て之が討伐を擅にせんと欲し、種々外交的手段を用ひて、ドイツ皇帝及スウェーデンを中立ならしめ、又イギリス王カカロ五世をして自個と同盟を結ばしめ、紀元一千六百七十二年、イギリスフランスの連合聯隊を以て、ロイターが率ゆるオランダの艦隊に當らしめ、フランスの將チウレンス及びコンデをしてオランダに侵入せしめぬ。是に於てかデウイトも策の出る所を知らず、其軍隊城塞を擧げて總て之をフランスの軍隊に渡したり。然るにオランダの人民等は彼の爲す所を好まず、彼を殺しオランダの家の子ライアム三世を擧げてスタフトハルナルとなし、委するに海陸軍を指揮し、フランスに當るの任を以てしたり。ウイリアム即ち祖先か曾てインバニアに對して成したる勇敢の行蹟を想起せしめ、切に人民の志氣を鼓舞し、ルイスの未だアムステルダムに入らざるに先ち、溝渠を切りて之を妨禦したり。然るに此時に當りて皇帝は中立

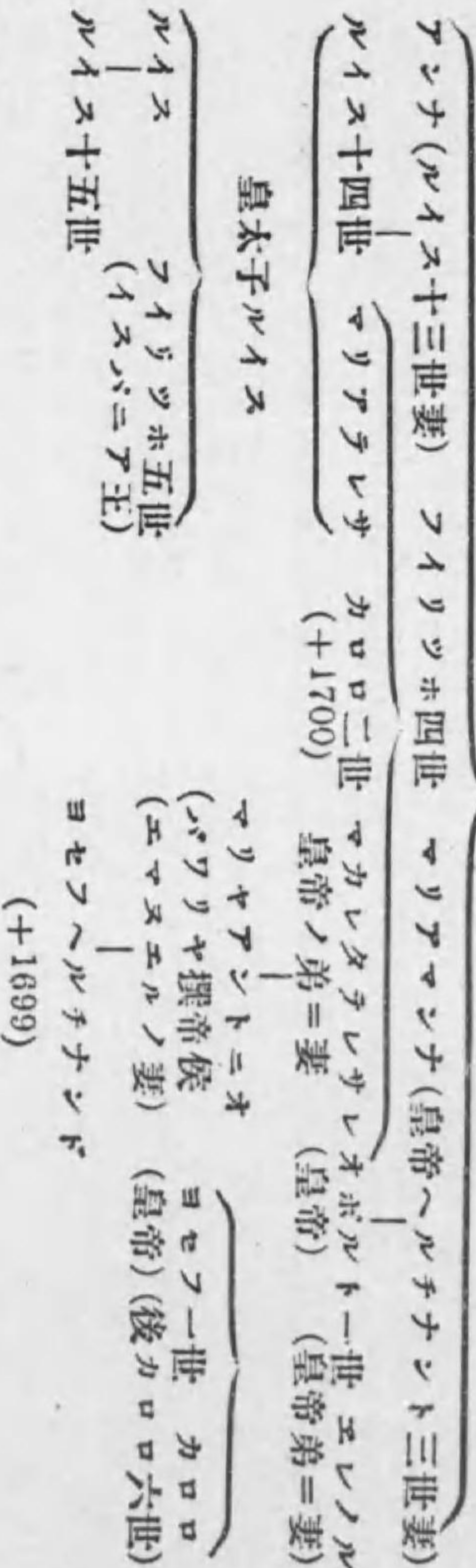
を脱し、ブランテンブルク等ドイツの諸國はオランダに同情を表すに至り、イギリス亦オランダに同情を示し、カカロ二世をしてルイスと斷ち、オランダと和せしむるに至りしを以て、紀元一千六百七十八年、ルイスはニムウエーゲンに條約を結び、フランスは總ての占領地をオランダに返し、ア、ヘン條約に定めたりしフラシユコムトをフランスに編入するの件を確定したり。

(三) バルツ戦争 自紀元一千六百八十八年—至全九十七年)

今やルイス十四世は、内治外政の成效を以て、無上の權勢を有するに至り、彼の寵者は彼を呼ぶに、ルイス大王の名を以てする有様となりぬ。然れども彼はこの偉大なる成功に満足する能はず紀元一千六百八十一年、アルサスに於けるドイツ帝國の殘部なるストラスブルク市を奪ひ、紀元一千六百八十八年、ケルンの僧正撰舉に關涉して、イスパニアのアビニオンを略し、紀元一千六百八十五年、バルツ撰帝侯カカロ死して男系の絶えしを期とし、紀元一千六百八十八年、ライン河邊の諸地を抄掠したり。是を以てヨーロッパ諸國は、皆フランスの侵略を恐れ、各機脈を通して防禦の計を滿するに至れり。然して偶々イギリスに於て、シエームス二世國人の追ふ所となりてウイリアム三世立ち、イギリス、オランダ二國の連合成りしを以て、紀元一千六百八十九年、二國、主唱の下に、一大全盟なり、ついで紀元一千六百九十二年、二國の連合艦隊はラホークに於て、大にフランスの艦隊を撃破したり。依て紀元一千六百九十七年、フランスはリスウイクの和議を結

ひ、バルツ相續問題は仲裁裁判に遷し、アルサスはフランスの領地と定め、ウイリアム三世はイギリス王たることを承認したり。

(四)イスパニヤ王位繼承亂(自紀元一千七百一年—至全十四年)
フイリッホ三世(イスパニヤ王)



イスパニヤ王カローロ二世は嗣子なかりしを以て、パツリヤのヨセフヘルチナントを撰で嗣子とし、其後を繼がしめんとせしが、ヨセフは紀元一千六百九十九年に死せり。是に於てイスパニアの王位は何人の手に落つべきかは、一の問題となるに至り、イギリス王ウイリアム三世及びルイス十四世の如きは、密かにイスパニア領土の分割を約するに至れり。然るに紀元一千七百年カロー

ロ二世の死するに當り、遺言して位をルイス十四世の孫フイリッポに傳へしめぬ。依てルイスは直ちにイギリスとの契約をすて、フイリッポをマドリッドに送りてイスパニアの主權を確立せしめぬ。かくてブルボン家は西方ヨーロッパの全部を領するに至り、いよいよ強大なる勢力をして、更に強大ならしめたり。

ブルボン家がイスパニアを領するに至りしことは、ヨーロッパの各國をして恐怖せしめぬ。イギリス及びオランダの隆盛を計るに熱心なりしウイリアム三世はフランス、イスパニア二國合同は二國の國力伸張に制限を置くものなるを見たり。故に紀元一千七百一年、彼は皇帝イギリスオランダ、ドイツ諸邦並にサボヤより成る所謂グラントアライアンス(大同盟)を形成し、アウストリア家のカローロ六世をイスパニア王に推し、アウストリア家の爲に、イタリア及びチーデルランドの状態を處置すべきを以てしぬ。後ウイリアム三世死せしがアン其政策をつぎ、大同盟を繼續し、フランスに抵抗を試みたり。紀元一千七百一年、サボヤのエウシエニオはイタリアに侵入し、紀元一千七百三年、イギリスのマルボローはチーデルランドに侵入し、兩面よりフランスに當り、紀元一千七百四年、二將軍ドナウ阿邊近に相會し、二軍を合してフランスの軍をヘクスタット及びブレンハイムに撃破したり。ついで紀元一千七百六年マルボローはチーテルランドのラミリーに於て大勝を得、エウレニオはチューリンに於てフランス軍を破り、之をイタリア以外に驅逐し

たり。而して二將軍がアウテナルデ(紀元一千七百八年)マルブラケー(翌年)に於ける戦勝は、全然フランス軍の抵抗力を失はしめ、ルイスをして同盟軍のバリに近入するやを疑ふに至り、平和の希望を抱くに至らしめぬ。然るに偶々イギリスにては、紀元一千七百年、民権黨(主戦派)内閣仆れて王權黨(平和派)内閣之に代るあり、マルボーロの行動漸く活潑なるを得ず、然して紀元一千七百十一年、皇帝ヨセフ死し弟カロロ六世其後を受くるに至り、カロロ五世の帝國を現出せんとする形勢となりしかば、イギリス、オランダ二國は大同盟を脱し、マルボーロを本國に呼び返し、フランスと平和の談判を開くに至れり。かくて紀元一千七百十三年及十四年エドレヒト及びラスタットの條約成り、イスパニア王位に關する争は終りを告げぬ。

エドレヒト及ラスタットの條約によればイスパニアの領土は大に分割せられぬ。フィリッポ五世は、フランスとイスパニアとは永久に分離せらるべき條件の下に、イスパニア及植民地の王たることを承認せられ、皇帝はミラノ、ナポリ及びイスパニア領テレルランドを得、オランダはイスパニア領テレルランドの二三の城塞を得、サボヤは王國としてシチリヤ島を得、イギリスは二ウーハウンドランド、アカヂヤ、ホドソン灣テリトリ、及びイスパニアのジブラルタルを得たり。

エドレヒト、ラスタットの條約後、久しからずして、ルイス十四世は死せり。彼はフランスを残り、絶大なる負債と儉約なる國民とを以てしたり。彼が其初政に於て創造したる物貨的繁榮は今や全く認ること能はざりき。彼は彼の愚なる懸望の爲に、總てを消耗し盡したるなりき。然して彼は紀元一千六百八十五年ナンドの令を發して、ユケーに迫害を加へたるを以て、多くの有力なる人民は國外の移住し、フランスの國力に非常なる損害を及ぼしたりき。然れども彼の時代は確に黄金時代なりき、フランスの都なるベルサヘユは世界の都となり、フランスの朝廷は世界朝廷の模範となり、フランスの國語、フランスの風習、フランスの技藝は世界を支配したりき。而して彼の時代を永久に記憶せしむるものは、コルテユ、ラシヌ、モリエルの戯曲なりとす。前二者は悲劇家にして後一人は喜劇家なりき。

其二 イギリス立憲政體の組織

エリサベタ死後、イギリス王位は、マリヤスチュワードの子、スコットランド王シエームス一世の手に移りぬ。依て之をスチュワート王朝と稱す、是よりイギリス、スコットランド二國は、共通の主君を戴くこと、なれり。

シエームスの即位は實に好時期に遭遇したるものなりき。彼はイギリスか、外は、イスパニアの必勝艦隊を破りて、威力を國外に輝かし、内はイギリス教會を創めて、國民の一致を致したる、ホリサヘタ時代を繼承したり、然れども彼は「キリスト教國中最利巧らしき愚物」にして到底エ

リサベタの後を受くべき價值ある人物に非ざりき。是を以て彼は此好時期を利用して、更にイギリスの發展を計る能はず、却てイギリスをして不振の状態に陥らしめぬ。彼は帝王神權説を固持し、帝王は專制權を有し、國民は之に喙を容れ得べきものに非ずとなし、即位の始より、專制の政治を行ひ、人民の權利を無視し、總て自己の意志をのみ實行せんと試みたるを以て、之か爲め宗教上、政治上、人民の怨を買ふに至りたりき。エリサベタがイギリス教會を組成するや、もとよりカゾリツク、ピューリタンの兩極端派の満足を得る能はざりき、されど彼の政策の良好なるによりて、彼の治世の間彼等は先づ平穩を保持したりき。然るにカルビン教徒なる彼は、表に寛大を示して、裏に誑詐を逞しうしたるを以て、カゾリツク教徒等は大に憤怒し、彼と近き信仰を有するピューリタンすら彼を怨むに至れり。かくて紀元一千六百五年、カゾリツク教徒は國會議事堂の床下に火藥を装置し、一舉してイギリス政府、王、貴族、議會を滅さんと企つるに至りしが、半にして事覺はれ、黨人の多くは殺す所となりぬ。然れども是よりしてイギリス人民のカゾリツク教徒を恐怖する念は、愈々劇烈なるに至りたりき。エリサベタが貴族の勢力を壓する爲に、専ら中流の士人に頼るの政策を取り、中流人士に與ふるに多くの權利を以てし、國會をして有力なる政治機關とならしめぬ。故にジエームスが專制の政治を行ふや、國會は其命令に服従せず、屢々財政の問題に關して王と衝突したり。然して當時國會には多くのピューリタン

教徒の議員たるものありしを以て、王は甚だしく之を嫌忌し、之を解散すること三回に及びたりしも然も王は遂に國會を收攬すること能はずして止みたりき。

ジエームスは外國に對しては、専ら平和主義を持し、プロテスタントの主導者たるイギリスとカゾリツクの主導者たるイスパニアと和するは、世界に平和を與ふる所以と考へ、切に其成效に志を傾け、紀元一千六百二十三年には、其子カロロ及び宰相バツキンハムをイスパニアに送り、イスパニア王の妹、インハンタとイギリス皇子カロロとの婚を結びて、二王家の合同を企てぬ。然るにイスパニアは之に應ぜざりしを以て、王は遂にイスパニアに向て戰を開かんとせしが、既にして逝けり。

カルロ一世は、父ゼーム又一世と同じく帝王神權説を持し、帝權の擴張に關し常に議會と争へり。且つ彼は熱心なる舊教信徒なりしを以て、國內のピューリタンを惡み専ら其壓服に心を用ひたり、故にピューリタン及議會の敵手甚しく、英國々民をして英國の主權は、議會にありや帝王にありやの問題を引起さしむるに至りぬ。カルロは其即位の年、フランスのルイス十三世の妹マリアと結婚せり、此舊教國との結婚は、初め甚しく英國に於ける不人望を來せしか、當時英國人の多數を占めたるカルビン主義を攻撃せし、或イギリス僧侶に同情を表し新教徒に反對の意志を示すに及びて、國王及び平民との間、宗教問題に關し益々相容れざるに至り、人民をして自然儀式的な

る英國教會の主義を離れて、ビュリッタンの方角に移るに至り、新教主義はイギリスの主要なる信仰となれり、カルロ一世は宗教上の敵對を起して人民の不滿を求めしのみならず、尙政治上の行動によりて人民の不平を益々強めたり。イスパニヤの戦争は當時尙繼續せられ、議會は彼に援助を與ふることを望まざるにあらざりしも、良好なる主領の下に充分有効なる成功を希望したりき。然るにカルロは父の寵臣なるバツキンハムを用ひ、之か征討を圖らしめ、イスパニヤのライン河畔の領土及びカヂズを攻撃せしめしに、總て失敗に終りしかば、議會はバツキンハムの政權を有する間は、王に戦費を支出するを拒絶し、カルロが屢々議會の解散をなせしに係らず、斷乎として之に應せざりき。而して紀元千六百二十七年に至り、王が更にフランスのユゲノーを助けてフランスと戦を開き、國債を國民に強制し、バツキンハムをしてユゲノーの根據なる、ラ、ロシールに航せしめしも、カヂズ攻撃と同しく失敗に終り、イギリスは益々困難を極むるに至り人民の不平甚しく遂に紀元千六百二十八年國會は、政府に對して大非難を加へ、權利請願書を提出して強制的國債の不當を布告し、議會の協賛なくして課せられたる納税の無効たるを主張し、進んで彼の主政を非難したり。實に此權利請願書は大憲章の再顯とも稱すべきものにして、イギリス國家法律の基礎を形成せるものなり。然るにバツキンハムは尙職を退かさりしを以て、人民の怨の度を高め彼れか再びラ、ロシールに遠征せんとしてボルツマウスに至りし時、刺客の爲めに殺さ

るに至りしも、王は尙其政策を變ずることをなさざりしかば、國民のカロロに對する敵愾の心をして益々強からしめ、遂に國會は彼が良政府を組織するに非ざれば、彼の一世間王室の唯一の収入たる、ボンデージ及びトンチージを支出せざることを決議せり。依て紀元千六百二十九年の議會は、王及び下院の争激烈を極め、カルロは之を解散せんと決せしに、已に議會は之を知り、ボンデージ及びトンチージの課税は不當にして、之を支拂ふものは叛逆人たるの議案を可決したり。斯くて王は自今（紀元千六百二十九年より四十年に至る）國會を開かず、千六百三十年に至りイスパニヤ及びフランスと平和を結び、ウイリアム、ラウド及びウエント、ウオースの計畫の下に專政の政治を行ひたりき。既にして彼は國民の感情を忘れて、英國の國教をスコットランドに輸入せんと企てしより、スコットランドのプレスビテリアン教徒の激烈なる反對を受け、スコットランドの僧侶は一致して彼の行動に反抗せしより、遂に紀元千六百三十九年より翌年に至る二回の僧正戦争を生せしか、彼は此戦に由て漸々失敗したることを自覺せざるを得ざりき。依て王は軍費の支出を得んと欲し、紀元千六百四十年に至り久しく召集せざりし議會を召集せしか、議會は政府の失政を論して止まざりしかは、王は直ちに之を解散し再び新議會を召集せり、是れ即ち長期議會と稱する所のものにして、之より英國の状態は一轉換を示すに至れり。此長期議會は、漸次政權を自己の手中に收め、先づラウド等を處刑し、王の始めたる政廳を廢し、諸種の課

税を廢止し、斯くて凡ての組織は全く改良せられ、而して議會は命令權を握り王は全く無力となり。然るに下院は宗教問題に關し、ビュリタンとイベスコバリアンの二派に分るに至りしかば、王は後者に黨したりしに、紀元千六百四十二年にはイベスコバリアンが議會の勢力を有せしを以て、王は再び權力を恢復し、ピム以下五人の議員を捕縛せんとしてロンドン市民の抵抗を受けるに至り、ヨークに走り同年八月に至りて、カルロは王黨をして兵をノッテンに擧げしめしかば、議會は軍隊を集めて戰備をなすに及び、王と議會との間は之より兵力に訴へて雌雄を争ふに至れり。初め王黨なるカバリアは議員黨なるラウドヘッドに對して勝利を博したりしか、オリバー、クロンウエル出て鐵壁隊を編成して王に當るに及び、遂に紀元千六百四十四年マーストンの戰に於て先づ敗れ、次いで翌年ナスビーの戰に於て漸々敗北して王はスコットランド人に降れり。然るにスコットランド人は議會と同盟して王に抗するに至り、王はクロンウエルの捕ふる所となれり。當時議會黨はプレスビテリアン及びインデペンデントの二派に分れ、前者は王權を制限せんとし、後者は共和政治を行はんとし相争ひしが、インデペンデントの主領クロンウエルは遂に反對黨徒を議會より追ひ、高等法院を組織したり。而して紀元千六百四十九年此高等法院は王を叛逆者と決定し、之を死刑に處せり。是に於てランプ議會はイギリスの共和政治を布告し、カウンスル、オブ、ステートを任命し政府の行政を取扱はしめたり。斯くてクロンウエルは共和

政府の主領として其實權を握り、カルロ二世を擁立せんとするスコットランド人及びアイルランド人を制し、紀元千六百四十九年ドラベタ及びウエクスフォードにてアイルランド人を破り、紀元千六百五十年ダンバーの戰に於て、翌年ウオーセスターの戰に於て全く之を破り、カルロ二世をして大陸に走るの止むを得ざるに至らしめ、スコットランド人と和議を結べり、是に於て共和政府の實權は英國全部に波及するに至れり。然るに當時オランダはウエストフハリヤの條約に由りてイスパニアよりの獨立を認定せられ、急足なる商業貿易の進歩をなして痛くイギリスの商權を害せしを以て、クロンウエルは紀元千六百五十一年航海條例を發して、輸入品はイギリス船によりて運ばるゝか、然らざれば其貨物が生産せる國に屬する船によりて運ばるゝことを命じ、オランダの商業を妨害せんと企てたり。依てオランダは戰を布告し、バントロンブをしてイギリスの海軍に當らしめしかば、イギリスは屢其破る處となりしも、終に英將ブーク、オランダの海軍を擊破せしかば、オランダは遂に和を請ふに至れり。紀元千六百五十三年に至り、議會はクロンウエルに送るにプロテクター(保護者)の名稱を以てするに至りしかば、クロンウエルの權勢益々盛にして、内は舊教を壓抑し、外はイスパニア勢力の壓服に勉め、其西印度領ジャマイカを奪ひ又イスパニア領チーデルランドに於けるドUNKILKを占領し、イギリスの名聲をしてイサペラ女王以來未だ曾てあらざる地位に高むるに至れり。尙彼は新教主義の王國を地上に建設する希望

を懐きたりしか、紀元千六百五十八年病の犯す所となりて死せり。依て議會は其子リチャード、クロンウエルを以てプロテクターとなし、父の後を繼かしめしか、彼は父の如き剛強果斷の人物にあらざりしを以て、能く國民の希望に適ふ能はず、是に於て國民はカルロ二世をオランダより迎へ、共和政治を廢して再び王政に復古したり。

カルロ二世は帝王として人望ある君なりしも、永くフランスに在りて、ルイス十四世時代の放恣逸樂の社會に成長したるを以て輕躁にして私行修らざりしは彼の唯一の缺點なりき。王政復古後と雖も王及議會の問題は、戰爭以前の狀態に復りしを以て、イギリス國民は社會の秩序及安寧の恢復を喜び、且つ國王の特權に關する過去の争闘を忘れたるもの、如くなりき。紀元千六百六十年に成りし議會はカバリヤを以て組織せられ、國民の反動的感情を表示し、國王より優に專政にして主權者に對して武器を取るは、不法の行爲たることを議決し、而してイギリス教會以外の宗派を認めざりき。かくて翌年ユニフォーム條例を發布し、バプタスト及びクエーカー信徒を以て非國教徒と認め、次いで紀元千六百六十四年、コンベンタル條例を發布し、是等非國教徒に對して罰金を課するに至り、舊教主義を保持したるカルロをして、其行動に恐怖の念を抱かしむる程なりき。此時に當りオランダ、イギリスの商業上の競争は再び激烈となり、二國は各地の殖民地に於て競争絶わざりしか、紀元千六百六十四年に至り兩國の争破裂し、オランダ海軍は

テームス河を遡り、ロンドン市は其封鎖を受けしも、翌年非常の大饑饉に際會せしを以て、能くオランダに抗する能はざりき。會々ルイス十四世はイスパニアを攻むるに當り、オランダの妨害を受け其意を果す能はず、オランダに對して怨恨の情を抱くに至り、遂にカルロに同盟をすゝめしかば、カルロは之を以てオランダに對する復讐をなすの好機會となし、紀元千六百七十年ドーバの秘密條約を結び、紀元千六百七十二年ルイス及びカルロはオランダを攻撃したり。然るに舊教徒なるカルロ王は、寛恕なる法令を發し、教徒及非國教徒の信仰を自由にせしを以て、議會の感情を害し議會は王か此法令を撤回するにあらざれば、戰費の援助をなさざるを決議せしのみならず、イギリス人のフランスに對する敵愾心は、遙かにオランダの上にありしを以て、フランスと同盟してオランダに當るを好まず、カルロは止むなくオランダとの平和を結びたり。斯くて議會は審査律を通過して、舊教徒の官吏及び議員となるを禁止、又人身保護律を議決して狼りに人民を捕ふることを禁じたり。斯くて紀元千六百八十五年カルロ死せしが、王位相續のことに關し議會は二派に分れ、進歩主義なるホイッグ黨は王弟ゼームスの王位を削らんとし、保守主義なるトリー黨は之に反對して兩黨互に相争ひしが、後者終に勝を制してゼームス二世は其後を受けぬ。ゼームス二世は舊教徒たりしのみならず、父カルロ一世の如く帝王神權の思想を有せしを以て、彼の治世は明かに失敗を豫定するを得たり。彼は紀元千六百八十七年法令を發して、舊教徒及び非

國教徒に對する處刑を發し、國民一般の不滿に係らず、第二回の布告を發して之が強制を勉め、僧正等の其命に従はざるものを罰したりしかば、彼に對する人民の怨恨を増加したり。されども國民は彼の後を繼ぐべき女マリヤ（オレンヂ家ウエリアムの妻）の新教徒たるを以て、稍々彼の惡政を忍びたりしが、偶々紀元千六百八十八年王は一子を擧げたるを以て、國民は王が是れを以て王子となし、舊教的教育を受けしめ、舊教王朝を繼續せしめんことを恐れ、ウエリアム及び其妻マリヤをして、イギリスに來りて國民を救はんことを勸むるに至りしかば、其年ウエリアムはイギリスに上陸し、國會は王の廢位を布告して、ウエリアム及びマリヤに與ふるにイギリスの主權を以てしたり。次いで紀元千六百八十九年に議會は權利表白令を出し、是に依りて課税の問題及び法律の發布に關する王の權力は正確に規定し、王は之に對して承認を與へたり。之を名譽改革と稱す。

其三 ロシアの勃興

紀元八百六十二年、北人の一派なるルツス族の酋長ルーリツクはノブコロッドに入りて國をなせしが、ついで同族のキーフに據れるものを併せ、東ローマと交通して其宗教を受け、スラブ人を征服して大に其境域を廣むるに至りたり。既にしてモグル帝國の強大なるに及び、其征服する所となり、爾來二百五十年間其壓制を被りしが、紀元一千四百八十年、イバン三世の代に及び、

ロシアの
勃興

モグル帝國の羈絆を脱し、諸公及び諸都府の權力を奪ひ、茲に帝國に基を開きぬ、イバン四世に及び、心を領土の擴張に用ひ、トルコを征してアトラスカンを略し、以て南方カスヒ海に至る地を得、ついでまた西方バルト海に至る領土を得んと企てたり。然るに紀元一千五百九十八年に至りルーリツク家絶ゆるに隣邦諸國は此機に乗じて侵略を企て、ロシアは一時大頓座を來すに至りぬ。依て紀元一千六百十三年國民はミカエルロマノフを以て王となし。國家の恢復を計らしめぬ、然れどもロマノフ家は未だ容易に此等隣邦に抗する力なく、専ら領土をンベリヤに開きしが、紀元一千六百八十二年ベテロの王位に上るに至り、形勢一轉の機運に際會しぬ。

初めベテロは其兄イバンと共に王位に上りしが、ベテロは幼稚なりしのみならずイバンは羸弱なりしを以て、姉ソヒヤ代て政を攝したり。然るにベテロは長ずるに及びてソヒマの攝政を嫌ひ、十七歳の時、遂に自ら政を執るに決し、攝政の終れるを布告し、ソヒヤを尼寺に幽したり。當時ロシアの領土はヨーロッパ、アジアに亘り、北方の大國たりしといへども、未だ文明の見るべきものなき未開の状態にあり。然して帝王は專政君主なりしといへども、教會の大監督と親衛兵たるステルチの勢力は帝王を壓する有様なりしを以て、ベテロはバルト海の海權を得てヨーロッパ諸國交通の道を開きて國家の繁榮を計り、大監督及び親衛兵の勢力を壓して王權の鞏固を計らんと企てぬ。實に彼が一生は此目的に向て注がれたる。紀元一千六百九十五年、彼はトルコ

がドイツ皇帝の爲に破れしを見て直ちにアゾフ港を略して、ロシアの南方の出口を開きしが、こゝに暫らく經綸の業を止め、翌年西方文明諸國の状態を目撃せんとして歐洲旅行の途に上りぬ。彼は先づドイツに入りオランダに移り、終にイギリスに入りぬ。彼は帝王の尊を以て身を職工に墜し、ツアーンダムの造船場に入りて造船術を學び、また各種の工場に入りて其技術を受けたり。既にして彼がウイーンに來りし時、本國に於てステルチ等の反逆を企る報に接したるを以て直ちに國に歸りこれが仆滅を企てぬ。彼れは其千人を殺戮し殘余を悉く解職し、更に歐洲式に則れる軍隊を編成し、從來諸帝の困みたるステルチの壓制を脱したり。ついで彼は紀元一千七百年大監督の死するに及び、再び大監督を置かず、自ら敎國の部に署名し、爾今皇帝は敎會の主領たるを示し、全く大監督の權力を収めぬ。彼はまた切りに、歐洲文化の輸入に勉め、道路水道を改築し、商工業を奨励し、普通敎育を興したりき。然れども彼の最も意を注ぎし所は海陸軍の擴張にして、是實に他日領土を海邊に擴げんとする彼の素志に外ならざりき。

彼は旅行より歸るや、意をバルト海に注ぎぬ。されどこの企は黒海の如く容易なるものに非りき。彼がこの企を實行する爲には少くとも北方強國たるスウェーデンとの衝突を免れざりき。當時スウェーデンはグスタウスアドルフス以來バルト北方及東方海岸を有せしのみならず、ウエスハラ條約により、西部ポメラニア及びウエーゼル河、エルバ河邊の地を得て其威力は猶ほ北方を壓

したりき。これぞスウェーデンの強國たる所以は主として兵力にありて民力に非らりしを以て、永くこの位置を保持することは甚だ疑はしきことにして、他日隣邦の復仇を受くべき時あるは明かなることなりき。然して紀元一千六百九十七年カローロ十二世位につきしが、年僅に十五歳なりしを以て、隣邦諸國は機乗すべしとなし、紀元一千七百年、デンマルク、ポーラント、ロシアの三國は同盟を結びて彼等の舊領を復せんと企てぬ。カローロ十二世は猶ほ幼時なりしといへども決して尋常の人に非りき。彼はクスタブスの系を受けたる非凡の戦士なりき。故に彼は三國同盟を聞くや直に軍隊を召集し敵に向て進軍しぬ。彼は同盟軍の各分離し居るを見、個々に之を破らんとし、其兵先づゼーランドに渡り、コッペンハーゲンを圍ミ、デンマルク王をしてトラヘンダルに條約を結び中立を保つべきを誓はしめ、ついでフィンランドに航し、八千の兵を以て五百の兵を有するペテロピナルバの地に會戦して之を走らし、更にポーラントに入てアウグスト王を廢し、之に代ふるにスタニスラウスレスキチンスキを以てし、紀元一千七百六年サクソニーに入りてアウグストを破り之と和を結びぬ。然にペテロピナルバは此間を利用して切りに兵をバルト諸洲に用ひ大略其地を征し、紀元一千七百三年にはペテルブルク府を建設したり。依て紀元一千七百七年カローロはロシアを征せんとしてモスクバに入りしが進軍の困難と氣候の嚴寒の爲に彼の意を全ふする能はず、紀元一千七百九年ブルトワの一戦大敗を被り、カローロは數百騎の士を卒てトルコに走るに至れり。是

に於て北方に於けるスウェーデンの勢力全く地に委し、ロシアは之に代りて北方に覇たるに至りぬ。

カローカトルコに走るやスルタンによりてペンタルの地を得、五年の間此地に止り、スルタンをしてペテロと兵を交へしめんとせしが、スルタンは之に應せざりしのみならず、既にして彼に退去を請ふに至りしを以て、紀元千七百十四年ストラルズンドに走り遂に本國に歸れり。是より更に國力を恢復を企て、紀元千七百十八年ノルウエーのフレデリックスハルトを圍みしが、却て反間の殺す所となりぬ。妹ウリカエレノルの立つに及び到底舊領を復するの難きを見、諸國との平和を計り、デンマルクと和して其侵地を還し、ドイツ諸侯と和してスウェーデン領のドイツ諸市を與へ、アウクストのポーランド王たるを承認し、紀元一千七百二十一年ロシアとニスタット條約を結びカレリア、イングリヤ、井トニア、リポニア等東方バルト諸州をロシアに割讓したり。是れを北方戦争と稱す。

ペテロの治世はロシアをして非常なる進歩をなさしめぬ。然れども彼の急激なる改革は保守派の悦ぶ所に非りき。是を以て彼等は皇太子アレキシスのペテロの主義を好まざりしを舉てペテロ退けんと企てしが、彼はアレキシスを捕ひて之を獄に投し遂に之を殺したり。かくて彼は紀元一千七百二十五年に死しぬ。

ペテロ死後、ロシアは保守派の勢力隆盛にして、再びロシアの舊態に復せん有様なりしが、偶カタリナ二世(ペテロ二世の皇后)の出で女王となるに及び、再びペテロの意志を繼述し、ポーランド及びトルコを征してロシアの擴張を計りしを以て、ロシアは愈々其國力を強大ならしむるを得たり、ポーランドは中古時代に於ては、北方ヨーロッパの最強國にして、一時ポーランド王はホンガリ及びボメミアの王位を兼ねたることありき、然れども其政府組織社會状態甚だ宜しからず、政權全く貴族の手にあり、人口三分の一を占むる小作人は全く彼等の壓制の下にあり、中等社會なるものなかりき、紀元十四世紀半よりリベルムビトールと稱する裁決法行はれ、其弊害甚しく、また紀元一千五百七十二年ジャケロン王統絶て撰舉王國となりしより、爲に國力衰頹の基を開きたり。カタリナ二世の時は、オウグスト王既に死せしかばカタリナは寵臣スタニスラウスゴニアトウスキを以て國王たらしめ、以てロシアのポーランドの内政に關涉するの道を開きぬ。是よりカタリナは切にポーランドに對して壓制を加へしを以て、ポーランド人等怒りて之に抗するあり、ロシア軍は之を驅逐してトルコに侵入し其領土バルタの町を燒くに至りぬ。依てトルコ帝ムスタフ三世はロシアの侵入を憤りてロシアに對して戦を開きぬ。是れ紀元一千七百六十八年なりき。依てロシア軍は一方に於てモルダヒヤを領し、一方に於てはクリミア地方を奪ひ、ロシア海軍は小アジア海岸にてトルコの海軍を燒きはらひたり。トルコは依て紀元一千七百七十四年に至りクチュツ

ク、カイナルチに條約を結び、ロシアに與ふるに、キンプルン、ケルチ、エニケールを以てし、クリミア及びクバンの汗を獨立のものゝ定めたり。これ實に東方問題の初なり。

然るにプロシヤ及びオーストリアは、ロシアの益々トルコを征して切りに勝を得、コンスタチノールブルも甚だ危く見ゆるを以て、二國はロシアをして南侵の鋒先を轉せしめんとし、ロシアに説きて三國にてポーランドを分割せんと企てたり。是蓋しプロシヤ王ヘレテリキの計にして之によりて其領土を連續せんと考に出しなるべし、かくて紀元一千七百七十二年、三國分割を定め、略ポーランドと三分の一を分割したり。即ちプロシヤは西ブラシヤ大部、オーストリアは東ガリキア、ロシアは白ロシアを取りぬ。これ第一分割なり。ロシアは之より益々ポーランドの内政に干渉するを勉めしが、貴族等は切に國政恢復に勉め、紀元一千七百九十二年新憲法を作り、撰擧王國を廢し、サクソン王家を以て世襲王家とし、一般人民公撰よりなる議會を作り、之に立法權を與へ、リベルムヒトの權を廢し、ローマ教を國教とし、國王は舊教たるべしと定め、小作民に權利を與へたり。然るにカタリナは反對派の貴族と結びこの憲法を廢せしめ、紀元一千七百九十五年プロシヤと共に第二分割をなせり。是によりて、プロシヤは西プロシヤの殘部及び南プロシヤ、ロシアはリトアニアの大部分及びワラキヤ、ポドリア等を取れり。獨りアウストリヤは當時フランスと争ひしを以て之に與らざりき。この後義士コシウスコウ等義兵をクラカウに擧げ、ワルシヤウを

陥れ假政府を立てたりしが、既にして紀元一千七百九十五年プロシヤ、プロシヤ、オーストリア三國の同盟軍の爲に破られて離散し、ポーランドは更に第三分割を受けぬ。是によりてプロシヤは新東プロシヤ、新シレシヤ、アウストリアは、西ガリナヤ、を得、ロシアは其殘部を得たり。是に於てポーランドは全く三國の分割する所となりぬ。然してロシアはかくポーランドを分割を企ると共に、決してトルコに對する征討を止めず、新領地の總督ボテムキンをして諸汗國を滅さしめ、新領地にケルソンの市を起し、カタリナは自ら之に幸して其地を觀察したりき。既にし紀元一千七百八十七年帝はスウェーデンとの間に争闘を生せしかば、トルコ帝は之を機とし戰を開きたり。依てロシアはオーストリアと連合してトルコに侵入したり。後アウストリヤはトルコと和せしが、獨りシヤは戰をつげ屢々トルコを破りしかば、紀元一千七百九十二年ジャツセーに於て和議を結び、ニースター河西を以てロシア及びトルコの境界を定めたりが、かくてロシアはカタリナ二世の間に大なる版圖を有するに至りぬ。

其四 プロシヤの興起

紀元十三世の頃プロシヤはチユートニツクオルダーの領地に屬し、ポーランドの保護の下にありしが、十六世紀の頃、ブランデンブルク侯アルベルトがオルダーの主君となり、プロシヤ及びブランデンブルクは一人の支配を受くるに至りぬ。ついで十七世紀の初、ジョルヂウイルレム全く二

プロシヤの興起

國を合併せしが、後ウイレルムの子撰帝侯フレデリックウイレルム三十年戦争に中立を保持し、ウエストハリア條約の結果西部ホメラニヤ半部及び幾多の僧正領を得、またスウェーデン、ポーランドの抗争に於て、巧に兩國の間に處してポーランドより獨立國承認を受け純然たるドイツ諸侯となりぬ。フレデリック二世はイスパニア王位繼承亂に皇帝に黨してフランスと争ひ、爲に皇帝レオポルドよりプロシア王の稱號を受け、東プロシヤの都なるケーニヒスベルヒに於て王位につきフレデリック一世と稱したり。是實にプロシア王國の起源なりき。然してフレデリック一世の子フレデリックウイリヤム一世は、外交的手腕を有しまた政治的大望を有せし人物には非りしも、内政及軍事上に意を用ふること深く、ゼテラルデレクトリを以て財政の全權を有するものたらしめ、極端なる節儉をなし、また非常なる熱心を以てフランス及びオーストリアと同様なる常備軍を設け、嚴正なる規律の下に之を訓練し、強制的に普通教育を奨励し、他日フレデリック王をして大雄飛をなしめ得べき十分なる素地を作りたりき。

紀元一千七百四十年フレデリック二世位につきしが、彼の即位後數月、皇帝カローロ四世死しぬ。然るにカローロは男子の嗣子たるべきものを有せざりしを以て、死後オーストリアの紛援を生ずべきを憂ひ、紀元一千七百二十四年ブラクマツクサンチクシヨンを發し、ドイツ國領土の分割すべからざること、若し男子の嗣子なくば女子及其子孫相續すべきこと、若し帝女の系統絶ゆるときは

ヨセフ一世及び其子孫之を繼承すべきことを定め、オーストリア全部を擧げて皇女マリヤテレサに傳んとし、ドイツ諸侯は皆之を承認したりき。然るに帝の死するや此等諸侯はマリヤテレサの權利を拒み、ババリアの撰舉侯カローアルベルトの如きは、自己の相續權を主張してテレサと相争ふに至り、フランス、イスパニア諸國また此機に乗じて種々なる要求を提出しぬ。然してプロシヤ王フレデリックも、また當然シレシヤを領すべき權利ありと稱し、突然兵を出して此地に侵入したり。かくて紀元一千七百四十一年フレデリックはオーストリアの軍とモルウイツに戦て大に之を破り、シレシヤを略せしが、フランス、サクソニー、ババリアの同盟軍もまたボヘミアを領し、カローアルベルトは立ちて皇帝となり、カローロ七世と稱するに至れり。(自紀元一千七百四十二年至全四十五年)。然るにホンカリーの人民等はマリヤテレサに同情を表し、之を助けて同盟軍に抗し、同盟軍をボヘミアより驅逐し、更に進んでババリアを侵したり。時にプロシヤはフランスを助けてホヘミアに入りしが、テレサは一方の敵を滅して他方の敵に當らんとして、紀元一千七百四十二年プロシヤとブレ斯拉ウに條約を結びテレサは事實上シレシヤを放棄し、フレデリックをして同盟を去ることを約せしめたり。之を第一シレシヤ戦争といふ。是よりテレサは専ら同盟軍に當り勝敗常ならざりしがドイツの舊友たるイギリス及びオランダと結ぶに及び、フランスの勢力もまた昔日のごとくならず、皇帝カローロ七世は全く其領土を失ふに

至り、テレサは十分にドイツの主人たる地位を確むることとなれり。されどかくオーストリアの強大に趣くば、フレデリツキの黙過し得べき所に非りき。是を以て紀元一千七百四十四年彼は再びアウストリアに對して戦を開き、フランス及びババリアの軍を助け、翌年アウストリアの軍をホーヘンフリドベルヒに破りぬ。依てテレサはまたプロシアと和しドレズデンの和議を結び、改めてシレシヤをプロシアに割譲したり。之を第二シレシヤ戦争といふ。

この後オウストリヤと同盟軍との争は猶繼續せられ、フランスの將アウリスは屢々アウストリヤの軍とチーデルラントス戦ひしが、兩國共に戦争に疲れしのみならず、紀元一千七百四十五年に至りカコロ七世死せしを以て、ババリアは先づアウストリアを和し、以て紀元一千七百四十八年列國アーヘンに合して和を議し、マリヤテレサのオウストリヤに於ける主權を承認し、またハノフェル家のイギリス王たることを承認し、オーストリアはバルマをイスパニヤ太子フィリポに譲り、プロシアはシレシヤを得て、アウストリヤ、フランス、イギリス、ロシア等の諸國と水平の地位に上るに至りぬ。然してプロシアは是よりフレデリツク二世の力によりて益々民力の發達を致すに至り。彼はオーデル河埋立をなして幾多の人民をこゝに移し、溝渠を開鑿して内地商業の便宜を計り、鉄、毛布、鹽等の工場を作りて工業の發達を企て、全國一般に適用せらるべき法律を發布して司法上の統一を計りたりき。

マリヤテレサはシレシア割讓の怨深く骨髓に徹し、常に恢復の念をたゝす、紀元一千七百四十六年ロシアと親交同盟を結びしが、紀元一千七百五十六年に至り、フランスと同盟を結びぬ。是れ宰相カウニツツの考案に出るものにして、其だ巧なる計策なりき。蓋し彼は此世紀の半頃より起れるイギリス、フランス間の海上勢力の争は、二國をして大陸に於ける援助を要する大なるに着目したるのみならず、イギリス、プロシアの間に於て將に同盟の結ばれんとする事情は、フランスをしてオーストリアに結ぶの急を感ずるの點に注意したるものなりき。かくして彼れはオーストリア軍をして南方より、フランス軍をして西方より、ロシア軍をして東方より、スウェーデン軍をして北方よりし全くプロシアを仆滅せんと企てたり。然るにフレデリツキは早く之を探知し、紀元一千七百六十年秋、突然サクソニーを占領し、ホヘミヤに侵入したり。是に於て翌年オーストリア軍は運動を開始し、彼に向て壓迫しぬ。彼は同盟軍の合せざるに當り、別々に之を撃んとせしが、コリンに於ける彼の分隊の敗北は彼をして意の如くならざらしめ、オーストリア軍は徐にシレシヤに侵入し、またロシア軍は東プロシアに進み、スウェーデンはポメラニヤに着し、フランス軍は皇帝フランスの軍と共にベルリンに向て進み來れり。依て彼はチューリッカに至りてフランス及皇帝の軍に對し、ロスバッツハに於て大に之を破り、直ちに兵を引てシレシアのオーストリア軍とロイテンに會し、再び之を破りしかば、スウェーデン、ロシアの軍は風を望みて國外に退きたり。